Ellen G. White Estate

祝福の山

ELLEN G. WHITE

祝福の山

Ellen G. White

Copyright © 2021
Ellen G. White Estate, Inc.

Information about this Book

Overview

This eBook is provided by the Ellen G. White Estate. It is included in the larger free Online Books collection on the Ellen G. White Estate Web site.

About the Author

Ellen G. White (1827-1915) is considered the most widely translated American author, her works having been published in more than 160 languages. She wrote more than 100,000 pages on a wide variety of spiritual and practical topics. Guided by the Holy Spirit, she exalted Jesus and pointed to the Scriptures as the basis of one's faith.

Further Links

A Brief Biography of Ellen G. White
About the Ellen G. White Estate

End User License Agreement

The viewing, printing or downloading of this book grants you only a limited, nonexclusive and nontransferable license for use solely by you for your own personal use. This license does not permit republication, distribution, assignment, sublicense, sale, preparation of derivative works, or other use. Any unauthorized use of this book terminates the license granted hereby. (See EGW Writings End User License Agreement.)

Further Information

For more information about the author, publishers, or how you can support this service, please contact the Ellen G. White Estate

at mail@whiteestate.org. We are thankful for your interest and feedback and wish you God's blessing as you read.

Contents

Information about this Book i
序 v
山腹にて 7
祝福 11
律法の精神 42
奉仕の真実の動機. 68
主の祈り 87
さばかずに、行え. 104

序

山上の説教は、この世界に対する天の祝福であり、神のみ座からの声である。それは義務の法則として、また天の光として人類に与えられたものであって、失望におちいった時の希望と慰安になり、浮き沈みの多い人生において、喜びとなり慰めになるように与えられたのである。ここで、説教者中の説教者、大教師イエスは、父なる神が語るようにと与えられた言葉を発せられるのである。

山上での祝福の言葉は、ただ単に信じる者だけではなく、人類家族全体に対するキリストのあいさつの言葉である。イエスは、しばし、ご自分が天上ではなく、この世界にいることを忘れられたかのように見受けられる。そして、イエスは光の世界で言いなれたあいさつの言葉を用いられる。長い間閉ざされていた豊かな命の流れがほとばしり出るように、祝福の言葉がイエスの唇からあふれ出るのである。

キリストが常に是認して祝福される品性の特徴は、疑う余地がないほど明らかにされている。イエスは、世の野望を夢見た人気者に背を向けて、彼らが顧みない世に捨てられた人々に心を寄せ、主の光と命を受けるすべての者に祝福を宣言されるのである。心の貧しい者、柔和な者、謙そんな者、悲しむ者、侮られる者、迫害される者に、イエスは保護のみ手を伸ばして、「わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」と言われるのである。

キリストはこの世界の苦悩をごらんになっても、人類を創造したことを少しも悲しまないでごらんになれるのである。キリストは、人間の心の中に罪と苦悩だけをごらんになるのではなく、それ以上のものを見られるからである。主は、無限の知恵と愛のうちに、人間の可能性、すなわち人間がどんな高さにまで到達できるかを見られるのである。たとえ人間が、神の憐れみを乱用し、神がお与えになった尊厳を破壊してしまったとしても、なお人間をあが

なうことによって、創造主に栄光が帰せられることを知っておられるのである。

祝福の山からキリストが語られた言葉は、各時代にわたって、その力を保つことであろう。1つ1つの文は真理の宝庫から取り出された宝石である。この説教において述べられた原則は、各時代のあらゆる種類の人々のためのものである。キリストは、正しい品性を形成したためにさいわいになった人を次々に述べ、ご自分の信仰と希望を力強く表明されたのである。主を信じ、命の与え主なるイエスの生涯をわたしたちがたどることによって、だれでも、主のことばの中に掲げられた標準に到達できるのである。

山腹にて

[1124]

イエスがベツレヘムでご誕生になる14世紀あまり前、イスラエルの子らはシケムの美しい谷に集まっていた。両側の山からは祭司たちの声が聞こえて、一方からは祝福を、他方からはのろいを宣言していた。「もし、……あなたがたの神、主の命令に聞き従うならば、祝福を受けるであろう。もし……聞き従わ（ないならば）、のろいを受けるであろう」（申命記11：27、28）。こうして祝福の言葉が語られた山が、祝福の山として知られるようになった。しかし罪に沈み、悲しむ世界に祝福となった言葉が語られたのは、昔ながらのゲリジム山ではなかった。

ところで、イスラエルは、その前におかれた高い理想に達しなかった。ヨシュアならぬもう1人のお方が、信仰の真の休みに、主の民を導かなければならない。祝福の山として知られているのは、もはやゲリジム山ではなくて、ゲネサレ湖畔の名もない山である。その山の上から、イエスが、弟子たちと群衆に向かって、祝福の言葉を語られたのである。

わたしたちはその時の光景を心に描きながら、その時代にさかのぼってみよう。わたしたちも弟子たちと共に山腹にすわって、彼らの心を満たしていた思いを察してみることにしよう。イエスの言葉が、それを聞いた者にとってどんな意味をもっていたかを理解するなら、そのみ言葉の中に新しいはつらつさと美とを認めることができ、その深い教訓を自ら集めることもできるのである、

救い主が伝道を開始された時、メシヤとその働きに関して一般の人々がいだいていた考えは、人々が救い主を受けいれるのを全くさまたげていた。真の敬神の精神は、伝説と儀礼の中に失われてしまっていた。そして預言は、高慢な、世を愛する心が意図するままに、解釈されていた。ユダヤ人は、きたるべきお方を罪からの救い主として待ち望んだのではなかった。彼らはユダ部族の獅子の支配権の

下に、すべての国をしたがえる偉大な王を待望したのである。

バプテスマのヨハネが、占代の預言者のごとく、心を見抜く力をもって彼らに悔い改めを叫んでもむだであった。彼がヨルダン河畔で、イエスを、世の罪を除く神の小羊と指摘したこともむだであった神は、苦難の救い主に関するイザヤの預言に、彼らの心を向けようと願っておられたのだが、彼らは聞こうとしなかった。

イスラエルの教師や指導者たちが、品性を変化させる主のめぐみにまかせるならば、イエスは彼らを、人々の間で、主の大使とされたことであろう。ユダヤにおいてまず王国の到来が宣言され、悔い改めの招きが発せられた。エルサレムの神殿から冒とく者どもを追い出される行為をなさることによって、イエスはご自分をメシヤ——罪の汚れから魂をきよめ、その民を主に聖なる宮とされるお方——として宣言されたのである、しかしユダヤの指導者たちは、へりくだって、ナザレから来た身分の低い教師を受け人れようとしなかった。イエスが2度目にエルサレムに行かれた時、彼は、サンヒドリンの前で尋問された。そして高官たちが、イエスの命をとらなかったのは、ただ民衆を恐れたためにほかならなかった。そこで主はユダヤを去って、ガリラヤ伝道に入られたのである。

主は、山上の説教をなさるに先だって、ここで数か月お働きになった。主がガリラヤ全上に伝えられた『天国は近づいた』という使信（マタイ4：17）は、すべての種類の人の心をひきつけた。彼らの野心は、ますます強くあおり立てられたのである。新しい教師の名声は、パレスチナ国境の外の地方まで広まった。宗教的指導者たちの態度をよそ目に、このお方こそ待望の救世主ではないかとの思いが広くゆきわたった。大群衆がイエスの行かれるところに群がり、民衆の熱狂は高まった。

これは、キリストと親しく交わってきた弟子が、主のお働きにもっと直接に結ばれる時であった。それというのは、この大群衆が牧者のいない羊のようにとり残されろことのないようにするためであった。弟子の中には、主の伝道の初期から加わっていた者もあった。そして12人のほとんど全部は、イエスの家族の一員として共に交わってきたのである。 [1125]

しかし彼らもラビたちの教えにまどわされて、一般の人と同様に地上の王国が建設されるのを期待していた。彼らはイエスの態度を理解できなかった。すでに彼らはイエスが祭司やラビの支持を得て、ご自分の運動を強めるために何の努力もなさらないことや、地上の王としての権威をうち立てるために何もしておられないことをいぶかり、当惑していた。イエスが昇天される時、これらの弟子たちに与えられる聖なる委託に対して、彼らが準備ができるようになるためには、まだ、1つの大きな働きがなしとげられねばならなかった。けれども、彼らはすでにキリストの愛に応えていた。彼らの信じる心はにぶかったが、イエスは、彼らが大いなる働きのために訓練する価値のある人々であるのをごらんになったのである。こうして今、彼らは、主と共にいたことにより、主のお働きが神からのものであることについて、多少とも信仰をもつことができるようになった。民衆もまた、疑いをはさむ余地のないキリストのみ力の証拠を認めるようになっていた。そこで、人々がキリストの王国の真の性質を理解することができるように、その王国の原則が、公にされる準備が整ったのである。

イエスは、ガリラヤ湖の近くの山で、これら選ばれた者のためにただ1人で夜通し祈り明かされた。明け方に、主は彼らをみもとに召し寄せ、祈りと訓示の言葉とを与えて、み手を彼らの頭において祝福し、彼らを福音の働きのために聖別された。こうして、彼らをつれて湖畔にこられたのであったが、そこにはすでに早朝から、大群衆がぞくぞくとつめかけていた。

ガリラヤの町々から来たいつもの群衆に加えて、ユダヤから、また首都エルサレムから、あるいはペレアから、半異教のデカポリス地方から、ユダヤの南方のイドマヤ、さらに地中海沿岸のフェニキヤの町、ツロ、シドンから大勢の人々が集まってきた。「そのなさっていることを聞いて」、彼らは「教えを聞こうとし、また病気をなおしてもらおうとして、そこにきていた。……力がイエスの内から出て、みんなの者を次々にいやした」（マルコ3：8、ルカ6：18、19）。

狭い岸辺には、イエスの言葉を聞こうと願うすべての者が、立ってみ声を聞くだけの場所もないので、イエスは山腹へと道を引き返された。大群衆のために、快い集会の場

となるような広々としたところへこられると、イエスは草の上に腰をおろされ、弟子たちも群衆もそのようにした。

何かいつもと変わったことが起こるのではないかと期待して、弟子たちは主のみもとに近よった。その朝のできごとから察して、彼らは主がまもなく樹立されるものとあさはかにも望んでいた国について、何かの宣言が今なされるにちがいないと思った。同様の期待感は、群衆の中にも充満していた。彼らがどんなに深い興味をもっていたかは、その熱心な顔に見うけられた。

彼らが緑の山腹にすわり、神からの教師の言葉を待ちうけていた時、彼らの心は輝かしい未来のことで満たされていた。学者やパリサイ人たちは、彼らが憎むべきローマを支配し、大世界帝国の富と光栄を手に入れる日を待望していた。貧しい農夫や漁師は、彼らのみすぼらしい家、乏しい食物、骨折りの生活、欠乏のおそれなどが、ぜいたくな邸宅、安逸の日々にかえられるという保証の言葉を聞きたいと望んでいた。彼らは、日中は身にまとい、夜は毛布ともなる1つの粗末な衣服のかわりに、彼らの征服者の高価な衣服を、キリストが彼らに与えることを望んでいた。

すべての者の心は、イスラエルがまもなく主の選民として国々の前にあがめられ、エルサレムが世界王国の首都として高められるという、誇らしい希望におどっていたのである。

祝福 [1126]

「そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて言われた。『こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである』」

（マタイ5：2、3）

この言葉はいぶかる群衆の耳に、何か不思議で、新しいものとして聞こえるのである。このような教えは、彼らが祭司やラビたちからいつも聞いてきたことと全く違っている。その中には、彼らの誇りにへつらい、彼らの野望をあおる何ものもない。しかしこの新しい教師には、彼らをとらえてはなさない力がある。神の愛のかぐわしさが、彼の存在そのものから花の香りのように流れ出る。彼の言葉は「刈り取った牧草の上に降る雨のごとく、地を潤す夕立のごとく」降る（詩篇72：6）。すべての者は、この人こそ、魂の秘密を読みながらも、なお憐れみ深く、人々に近づいてこられるお方であることを、直感的に感じる。彼らの心は、イエスに向かって開かれる。こうして彼らが聞き入っていると、いつの時代にも、人類が学ばなければならない教訓の意味を、聖霊が彼らに説明される。

キリストの時代に、民の宗教指導者たちは霊的宝に富んでいると自認していた。「神よ、わたしはほかの人たちのよう……でないことを感謝します」というパリサイ人の祈りは、その階級の気持ち、またさらに、国全体の気持ちを非常によく表現していた（ルカ18：11）。しかし、イエスをとりまく群衆の中には、自分の霊的な貧しさを認めた人々も何人かあった。魚が奇跡的にとれて、キリストの神聖な力があらわれた時、ペテロは救い主の足下にひれ伏し、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者です」と叫んだ（ルカ5：8）。そのように、山上に集まった群衆の中にも、キリストの純潔を目の前にして自分が、「みじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見

えない者、裸な者」であることを感じた魂があった（黙示録3：17）。そして彼らは、「すべての人を救う神の恵み」を切望したのである。これらの魂の中に、キリストのあいさつの言葉は希望をよびおこした。彼らは、自分たちの生涯が神の祝福を受けていることを知った。

イエスは祝福の杯を、「富んでいる、豊かになった、なんの不自由もない」と感じている者にも供されたのであったが、彼らはあざけって、そのめぐみの賜物を拒んでしまったのであった。自分は完全であり、かなり善良であると考え、自分の状態に満足している者は、キリストのめぐみと義にあずかることを求めない。誇りは必要を感じない。だから、キリストと、キリストがおいでくださって与えようとしておられる無限の祝福とに対して、心を閉ざしてしまうのである。そのような人の心には、イエスが入られる余地はない。自分自身も富んでおり尊敬すべき者と考えている者は、信仰をもって求めようとしないし、神の祝福を受けないのである。彼らは自分が十分だと感じているから、からのままで去るのである。自分を救うこはできない、また、自分では正しい行いはできないと知っている者は、キリストがお与えになる助けを感謝する者たちである。彼らは心の貧しい者であり、主は彼らを、幸福であると言明されたのである。

キリストは、お赦しになるに先だって、その人をまず悔い改めさせられる。そして、罪を認めさせるのは、聖霊の働きである。罪を認めさせる神の霊によって心を打たれた者たちは、自分の中に何もよいものがないことを悟る。彼らは、今までしてきたことはすべて、自我と罪がまざっていることを知る。彼らはあわれな取税人のように遠く離れて立ち、目を天にむけようともしないで、「神様、罪人のわたしをおゆるしください」と叫ぶ（ルカ18：13）。その時、彼らは祝福されるのである。悔い改める者にはゆるしがある。キリストは、「世の罪を取り除く神の小羊」だからである。神の約束は「たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ、紅のように赤くても、羊の丘のようになるのだ」「わたしは新しい心をあなたがたに与え……わが霊をあなたがたのうちに置」くのである（イザヤ1：18、エゼキエル36：26、27）。 [1127]

心の貧しい者についてイエスは、「天国は彼らのものである」と言われる。この王国は、キリストの聴衆が望んだような一時的な、地上の統治ではない。キリストは人々に、ご自身の愛とめぐみと義の霊的王国を開いておられた。メシヤの統治の旗印は、人の子のかたちであるから、はっきり目立っている。主の国民は心が貧しく、柔和で、義のために責められる者である。天国は彼らのものである。まだ十分に成就してはいないけれども、「光のうちにある聖徒たちの特権にあずかるに足る者とならせて下さる」お働きは、彼らのうちにはじまっているのである（コロサイ1：12）。

心の貧しさを深く感じ、自分のうちに何もよいものがないと感じるすべての者は、イエスを見上げることによって、義と力を見いだすことができる、イエスは、「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい」と言われる（マタイ11：28）。イエスは、あなたの貧しさを、主のめぐみの富と交換するように仰せになる。わたしたちは、神の愛を受けるにふさわしくない。しかしわたしたちの保証人であるキリストは、それにふさわしく、また、彼に来るすべての者を豊かに救うことがおできになるのである。あなたの過去の経験がどうあろうと、また、現在の状況はどんなに落胆させるものであっても、弱く、力なく、気落ちしたままでイエスに来るならば、わたしたちの憐れみ深い救い主は、遠くからあなたを迎え、その愛のみ腕をあなたにのばし、その義の衣をあなたに着せられる。イエスは、ご自身の品性の白い衣をわたしたちに着せて、父なる神に紹介される。イエスは、父のみ前でわたしたちのために嘆願される。そして、わたしはすでに罪人の代わりになりました、このわがままな子をごらんにならないで、わたしを見てくださいと言われる。もしサタンがわたしたちの罪を責め、わたしたちを彼の餌食であると主張して、大声で訴えても、キリストの血はより大きな力をもって嘆願するのである

「人はわたしについて言う、『正義と力とは主にのみある』と。……イスラエルの子孫は皆主によって勝ち誇ることができる」（イザヤ45：24、25）。

「悲しんでいる人たちは、さいわいである。彼らは慰められるであろう」

（マタイ**5**：**4**）

ここにみられる悲しみとは、罪のための真心からの悲しみである。イエスは、「わたしが、この地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせる」と言われた（ヨハネ12：32）。人が、十字架にあげられたイエスを見るように引きよせられる時、彼は人類の罪深さをはっきり知る。彼は栄光の主を嘲笑し、十字架につけたのは罪であることを悟る。彼は、今まで、言い表せないほどのやさしさをもって愛されてきたのに、自分の生涯は忘恩と反逆の場面の連続であったことを知る。彼は最良の友なるお方を捨て、天のもっとも尊い賜物を乱用した。彼は、神のみ子を自分で再びくぎづけにしたのである。そしてその傷つき痛められた心を、もう一度さし貫いたのである。彼は広く、暗く、深い罪の淵によって、神からへだてられた。彼は絶望感にうちひしがれて悲しむのである。

このような悲しみは「慰められるであろう」。神はわたしたちがキリストのうちに逃げこむために、彼によって罪の束縛から解放し、神の子らの自由を喜ぶために、わたしたちの罪をあらわしてくださる。真の悔いをいだいて、わたしたちは十字架のもとに来ることができる。そしてそこに、わたしたちの重荷をおけばよいのである。

救い主の言葉はまた、苦悩や失望に苦しむ者に慰めの言葉となる。わたしたちの悲しみは地からわきでるのではない。神は「心から人の子を苦しめ悩ますことをされない」（哀歌3：33）。神が試練と苦悩とをゆるされる時は、「わたしたちの益のため、そのきよさにあずからせるため」である（ヘブル12：10）。耐えがたく思われる試練も、信仰をもって受けるならば、祝福であることがわかる。この世の喜びを砕く残酷な一撃も、わたしたちの目を天に向ける手段となる。悲しみが彼らを、主にある慰めに導かなかった[1128]ならば、イエスを知らないでしまう人がどんなに多いことであろう。

生涯の試練は、わたしたちの品性から不純で粗野なものを取り去る、神の職人である。切り出され、角材とされ、削られ、刻まれ、磨かれるのは苦しい工程である、砥石車におしつけられるのはつらいことである。しかしこうして石は、天の神殿に置かれるように整えられるのである。主

は無用の材料に対しては、こんな注意深い、行き届いた手間をかけられない。主の尊い石のみが、宮の型にならって磨かれるのである。

主は、ご自分にたよるすべての者のために働かれる。忠実な者は尊い勝利を得る。貴重な教訓を学び、すばらしい体験をすることができる。

わたしたちの天の父は、決して、悲しみに沈む者に無頓着ではおられない。ダビデがオリブ山を「登る時に泣き、その頭をおおい、はだしで行った」時、主は憐れみ深く彼を見守っておられた（サムエル下15：30）。ダビデは麻布を身にまとい、良心に責められていた。自分を低くしたその態度は、彼の悔いを立証していた。涙にむせび、自責にふるえる声で、彼は神に事情を訴えたのであった。主はそのしもべを、お捨てにならなかった。自分の息子の反逆に扇動された敵から、良心に責められたダビデが、命からがら逃げた時ほど、無限の愛のみ心にいとしく思われたことはなかった。「すべてわたしの愛している者を、わたしはしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって悔い改めなさい」と主は言われる（黙示録3：19）。キリストは、悔いた心を引き上げ、悲しむ魂を洗練して、それを、ご自分の住居としてくださるのである。

しかし悩みが来る時、ヤコブのようになる人が何と多いことであろう。わたしたちはそれを、敵の手と思うのである。そして、暗やみの中で力が尽きるまで、めくらめっぽうに戦うのである。そして、慰めも救いも見いだせない。夜明けにヤコブに触れた神のみ手は、彼が格闘していたのは契約の天使であることを明らかにした。泣きながら力尽きたヤコブは、彼の魂が慕い求めていた祝福を受けるために、無限の愛の懐に倒れ伏した。わたしたちはまた、試練は益をもたらすことを学び、主のこらしめを軽んじることなく、主に責められる時、気落ちしないように学ぶ必要がある。

「見よ、神に戒められる人はさいわいだ。……彼は傷つけ、また包み、撃ち、またその手をもっていやされる。彼はあなたを6つの悩みから救い、7つのうちでも、災はあなたに触れることがない」（ヨブ5：1719）。イエスはすべての打たれた者に、いやしのわざをもって来られる。失

望、苦痛、苦難の生涯は、主の臨在の尊い啓示によって明るくされるのである。

神は、わたしたちが傷つき破れた心をもって、無言の悲しみに圧倒されるままに放置しておかれない。神はわたしたちに、目をあげて、愛のやさしいみ顔を見るように望まれる。聖なる救い主は、涙で目がくもって、主を見分けられない多くの者のそばに立たれる。主はわたしたちの手をにぎり、単純な信仰をもって主を見るようにと、また、わたしたちが主に導いていただきたいと願うようになることを望んでおられる。主のみ心は、わたしたちの苦しみ、悲しみ、試練にむかって開かれている。主は永遠の愛をもってわたしたちを愛し、わたしたちを慈愛をもって囲まれろ。わたしたちは主のことを心に思いつづけ、1日中、その慈愛をめい想することができる。主は魂を、日ごとの悲しみと困惑の上に引きあげ、平和の国に入れられるのである。

苦しみ悲しむ子らよ、このことを思い、望んで喜びなさい。「わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である」（ヨハネ5：4）。

イエスと共にこの世の悲しみに同情し、その罪のために悲しんで泣く者もまた、さいわいである、そのような悲しみには、自我の思いがまじっていないのである。イエスは悲しみの人であり、どんな言葉も言い表せないような、心の苦悩にお耐えになった。イエスの心は、人の罪によって裂かれ、傷つけられた。イエスは人類の欠乏と災いをとり除くために、必死の熱心さで労苦された。群衆が、命を得るために主のもとにこようとしないのを見て、主の心は悲
[1129] しみに打ちひしがれた。キリストに従うすべての者は、この体験を共に持つのである。彼らが主の愛にあずかる時、失われた者の救いのための主の苦しみに入るのである。彼らは、キリストの苦難にあずかると同時に、やがてあらわれる栄光にもあずかるのである。主と共に悲しみの杯を飲み、主のみわざにおいて一つになる彼らは、主の喜びにも共にあずかるのである。

イエスが慰めの力を経験されたのは、悲しみを通してであった。彼は、人類のすべての苦難をお受けになった。「主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである」（ヘブ

ル2：18、イザヤ63：9）。主の苦しみを共に味わった者は、この働きにあずかる特権を持つ。「キリストの苦難がわたしたちに満ちあふれているように、わたしたちの受ける慰めもまた、キリストによって満ちあふれている」（Ⅱコリント1：5）。主は悲しむ者に、特別なめぐみを持っておられる。その力は心を溶かし、魂を捕らえるのである。主の愛は、痛み傷ついた魂に通路を開き、悲しむ者をいやす香油となる。「あわれみ深き父、慰めに満ちたる神。神はいかなる患難の中にいる時でもわたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである」（Ⅱコリント1：3、4）。

「柔和な人たちは、さいわいである」

（マタイ55）

山上の祝福の言葉の中には、クリスチャン経験の進歩のあとがたどられる。キリストの必要を感じ、罪のために悲しみ、苦難の学校でキリストとともに座った者は、天よりの教師から柔和を学ぶであろう。

不正な取り扱いを受けながらも、忍耐し、柔和であることは、異教徒やユダヤ人が賞賛する特性ではなかった。霊感のもとにモーセが、彼は地上におけるもっとも柔和な人であると書いた言葉は、当時の人々に賞賛とは受けとられなかった。むしろそれはあわれに思われたり、侮られるようなものであった。しかしイエスは、その王国の主要な資格の一つとして、柔和をおかれるのである。主ご自身の生涯と品性に、このとうとい徳性の神聖な美が現れているのである。

父の栄光の輝きであられるイエスは、「神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをと」られた（ピリピ2：6、7）。そのつつましい生活のすべての経験を通して、イエスは、王者として尊敬を求めることなく、他の人に仕えることを自分の仕事とする者のように、人々の中で生活することに同意された。彼の態度には、少しの偏狭さも、冷酷な厳格さもなかった。世の救い主は、天使の性質よりももっと偉大な

性質をもっておられたけれども、その神々しい威厳は、すべての人の心をひきつける柔和と謙そんに結びつけられていた。

イエスは、自己をむなしくされた。彼がなされたすべての事に、自己は現れなかった。イエスは父のみ心に、すべてを従わせられた。地上の働きが終わるころ、「わたしは、わたしにさせるためにお授けになったわざをなし遂げて、地上であなたの栄光をあらわしました」と仰せになることがおできになった（ヨハネ17：4）。また主は、「わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、……わたしに学びなさい」と命じられる（マタイ11：29）。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て」なさい（マタイ16：24）。自我を引き下ろそう、もはや魂の至上権を、自我に持たせないようにしよう。

キリストの克己と謙そんを見上げる者は、ダニエルが人の子のようなお方を見た時に言ったように、「力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力がなくなった」と言わずにはいられない（ダニエル10：8）。わたしたちが誇る自立と自己至上主義は、サタンの配下であるしるしとして、その真の邪悪さが示される。人間の本性は、たえず自己を表現しようと戦い、競争している。しかしキリストに学ぶ者は、自己、誇り、至上権を愛する心がなくなり、心の中はおだやかになる。自我は聖霊の指導に服従する。そ の時わたしたちは、最高の地位を得たいと望まなくなる。わたしたちは他人をおしのけて、自分に注目を引くことを望まない。わたしたちの最高の地位は、救い主の足下にあると思うのである。わたしたちは導きのみ手を待ち望み、み声を聞こうとしてイエスを仰ぎ見るのである。使徒パウロはこの経験をもった。彼は、「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである」と語った（ガラテヤ2：19、20）。

[1130]

キリストを心の中に宿られる客として受ける時、すべての思いに過ぎる神の平安が、キリスト・イエスによって、わたしたちの心と思いを支える。地上における救い

堂の生涯は、戦いのさ中にあったが平和な生涯であった。怒った敵がいつもイエスをねらっていたが、彼は、「わたしをつかわされたかたは、わたしと一緒におられる。わたしは、いつも神のみこころにかなうことをしているから、わたしをひとり置きざりになさることはない」と言われた（ヨハネ8：29）。人間やサタンの怒りのどんな嵐も、神との完全な交わりの平静さを乱すことはできなかった。またイエスは、「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える」と言われる（ヨハネ14：27）。「わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」（マタイ11：29）。わたしとともに神の栄光と、人類の向上のために奉仕のくびきを負いなさい。そのくびきは負いやすく、その荷が軽いことがわかるであろうと、主は言われる。

わたしたちの平和を破壊するのは、自己愛である。自己が生きている間は、屈辱や侮辱から自己を守ろうといつも見張っていなければならない。しかし自己に死に、わたしたちの命がキリストとともに神の中にかくれるならば、無視されても、軽べつされても、少しも心にとめなくなる。わたしたちは、人の非難に対して聞こえない者となり、嘲笑、侮辱に対しては見えない者となるのである。「愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。愛はいつまでも絶えることがない」（コリント13：48）。

地上に源を持っている幸福は、境遇の変化と同じように変わりやすいものである。しかしキリストの平和は、変わらない永続的な平和である。それは人生のどんな境遇にも、この世の財産の額や友人の数によるのでもない。キリストが生きた水の泉であり、彼から得た幸福は決してうせ去ることはないのである。

家庭の中にキリストの柔和があらわされると、家族は幸福になる。それは争いを引き起こさせず怒った返答をさせない。いらだった感情を柔らかくし、やさしさがしみわ

たって、その楽しい囲いの中にいるすべての者にそれが感じられる。柔和のあるところはどこでも、地上の家族を天の一大家族の一部とするのである。

不当な非難をうけて苦しむことは、敵に復讐して良心の責めを感じるよりはるかによいことである。憎悪と復讐の精神はサタンから出たものである。そしてそれをもつ者には、悪い結果をもたらすだけであるキリストのうちに住む結果生じる謙そんな心と柔和は、祝福の真の秘訣である。「主は……へりくだる者を勝利をもって飾られる」（詩篇149：4）。

柔和な者は「地を受けつぐであろう」。罪がこの世界に入り、最初の両親がこの美しい地、彼らの王国の統治権を失ったのは、自己を高める野心によってであった。キリストが失われたものをあがなわれるのは、自己放棄によってである。主はわたしたちが、主と同じく勝利しなければならないと言われる（黙不録3：21参照）。「柔和な者は国を継ぐ」時、わたしたちは謙そんと自己屈服によって、主とともに世継ぎとなるのである（詩篇37：11）。

[1131] 柔和な者に約束された地は、死の陰とのろいで暗くなったこの地上のようなところではない。「わたしたちは、神の約束に従って、義の住む新しい天と新しい地とを待ち望んでいる」（Ⅱペテロ3：13）。「のろわるべきものは、もはや何ひとつない。神と小羊との御座は都の中にあり、その僕たちは彼を礼拝」する（黙示録22：3）。

そこには失望も、悲しみも、罪も、わたしは病気だと言う者もない。また、葬式の行列も、嘆きも、死も、別離も、悲嘆もない。そこにはイエスがおられ、平和がある。そこで「彼らは飢えることがなく、かわくこともない。また熱い風も、太陽も彼らを撃つことはない。彼らをあわれむ者が彼らを導き、泉のほとりに彼らを導かれる」のである（イザヤ49：10）。

「義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう」

（マタイ5：6）

義は聖であり、神に似ることである。そして、「神は愛である」（ヨハネ4：16）。義は、神の律法にしたがうこと

である。なぜなら「あなたのすべての戒めは正し」く（詩篇119：172）、「愛は律法を完成するものである」からである（ローマ13：10）。義は愛であり、そして愛は神の光であり、命である。神の義はキリストの中に具体化した。わたしたちは、キリストを受け入れることによって義を受けるのである。

義が得られるのは、苦しい戦いや労苦によってではなく、ささげものや犠牲によってでもない。それはそれを受けたいと飢えかわくすべての者に、無償で与えられるのである。「さあ、かわいている者は、みな水にきたれ。金のない者もきたれ。来て買い求めて食べよ。あなたがたは来て、金を出さずに、ただでぶどう酒と乳とを買い求めよ」（イザヤ55：1）。「彼らの義はわたしのものであると主はいわれる」（イザヤ54：17・英語欽定訳）。「その名は、『毛はわれわれの正義』ととなえられる」（エレミヤ23：6）。

どんな人間の力も、魂の飢えとかわきを満たすものを供給することはできない。しかしイエスは、「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう」（黙示録3：20）、「わたしが命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない」と言われる（ヨハネ6：35）。

肉体の力をささえるために食物が必要であるように、霊の命をささえ、神のわざをなす力を受けるために、わたしたちは、天からのパンであるキリストが必要である。身体が命と活力を支える栄養をたえず受けているように、魂もキリストとたえず交わり、キリストにゆだね、全くたよらねばならない。

疲れた旅人が砂漠で泉をさがし求め、ついに発見して、焼けるようなかわきをいやすように、クリスチャンは、キリストの泉から命の清水を求めて飲むのである。

救い主の品性の完全さをはっきり知る時に、わたしたちは全く変えられ、主の純潔なかたちにかたどって新しくされることを願うのである。わたしたちが神を知れば知るほど、自分の品性の理想は高くなり、主のみかたちを反映したいとの願いはますます熱烈になる。魂が神に達しよう

とする時、神の要素と人間が結合されるのである。そして神を求める心は、「わが魂はもだしてただ神をまつ。わが望みは神から来るからである」と言うようになるのである（詩篇62：5）。

もしあなたが自分の魂の必要を感じるなら、もしあなたが義に飢えかわいているなら、それこそ、キリストがずっとあなたの心に働いておられる証拠である。それは主が聖霊の賜物を通して、あなたが自分ではすることができないことをあなたのためにしてくださるよう、あなたが主を求めるようになるためである。わたしたちは、浅い流れでかわきをいやそうと求める必要はない。もしわたしたちが信仰の道をわずかでも高くのぼるならば、わたしたちのすぐ上に大きな泉があるから、その豊かな水をわたしたちは自由に飲むことができるのである。

[1132] 神の言葉は命の泉である。あなたが生きた泉をさがし求める時、聖霊によって、キリストとの交わりに入れられる。聞きなれた真理が新しい装いをもってあなたの心に現れ、聖書の聖句は閃光のように新しい意味をあらわすであろう。あなたはあがないのみわざと他の真理の関係を悟り、キリストがあなたを導いておられること、神聖な教師があなたのそばにおられることを知るであろう。

イエスは、「わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」と言われた（ヨハネ4：14）。聖霊があなたに真理を開かれる時、あなたはもっとも尊い経験をしっかり胸にいだき、あなたに示された慰めの数々を他の人々に語りたいと切望する。その人々と交際する時、あなたはキリストの品性や働きについて何か新しい思想を伝えるであろう。あなたは主イエスの憐れみ深い愛についてあらたに示され、それを主を愛する人にも愛さない人にも伝えるようになるであろう。

「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう」（ルカ6：38）。なぜなら神のことばは「園の泉、生ける水の井、またレバノンから流れ出る川である」からである（雅歌4：15）。1度キリストの愛を味わった心は、もっと深く飲むためにたえず呼び求める。そして与えるにしたがって、より豊かに、より潤沢に受けるのである。魂に対する神の啓示はすべて、知る能力と愛する能力を増し加える。魂は「もっとあなたを」と叫びつづける。すると、

聖霊はいつも「さらに豊かに」（ローマ5：9、10・英訳）と答えて下さるのである。というのは、我らの神は、「わたしたちが求めまた思うところのいっさいを、はるかに越えてかなえて下さる」ことを喜ばれるからである（エペソ3：20）。

失われた人類の救いのためにご自身をむなしくされたイエスには、聖霊が限りなく与えられた。同じように、主が内にお住まいになれるように心を全くささげる時、キリストに従うすべての者に聖霊が与えられるのである。わたしたちの主ご自身が、「御霊に満たされ」なさいと命令されたが（エペソ5：18）、この命令は、成就する約束でもある。キリストの中に「すべての満ちみちた徳を宿らせ」（コロサイ1：19）、「そしてあなたがたは、キリストにあって、それに満たされ」ることは、父なる神の喜ばれるところであった（コロサイ2：10）。

地を生きかえらせる雨のように、神は惜しまずに愛を注いでこられた。神はこう仰せになっている「天よ、上より水を注げ、雲は義を降らせよ。地は開けて救を生じ、また義をも、生えさせよ」「貧しい者と乏しい者とは水を求めても、水がなく、その舌がかわいて焼けているとき、主なるわたしは彼らに答える、イスラエルの神なるわたしは彼らを捨てることがないわたしは裸の山に川を開き、谷の中に泉をいだし、荒野を池となし、かわいた地を水の源とする」（イザヤ45：8、41：17、18）。

「わたしたちすべての者は、その満ち満ちているものの中から受けて、めぐみにめぐみを加えられた」（ヨハネ1：16）。

「あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう」

（マタイ5：7）

人間の心は本来冷たく、暗く、愛なきものである。憐れみとゆるしの心があらわされる時はいつでも、それは人間から出たのでなく、その心に働く神の霊の感化によるのである。「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛して下さったからである」（ヨハネ4：19）。

神ご自身が、すべての憐れみの源である。神のみ名は「あわれみあり、恵みあり」である（出エジプト34：6）。神はわたしたちの功績にしたがってわたしたちを取り扱われるのではない。神はわたしたちが、神の愛を受ける価値があるかどうかは尋ねられない。かえって神は、わたしたちを価値ある者とするために、その豊かな愛を注がれるのである。神は懲罰的ではない。神は罰することを求めずかえって救うことを願われる。摂理によって示されるきびしい処置でも、さまよう者の救いのために示されるのである、主は 人の苦痛を和らげ、その傷に主の香油をぬろうと[1133]熱望しておられる。神が「罰すべき者をば決してゆるさ」れないことは本当である（出エジプト34：7）。しかし神は、罪を取り去ろうと願っておられるのである。

憐れみある者は、「神の性質にあずかる者」である。彼らのうちに、神の慈悲深い愛があらわれている。心が無限の愛のみ心に一致するすべての者は、罪を責めるのでなく救おうと求める。心の中に住まれるキリストは、かわくことのない泉である。主が宿られるところには、いつも恩寵（おんちょう）があふれでるのである。

あやまちを犯し、誘惑に負け、欠乏と罪のうちにあるみじめな犠牲者の訴えに対して、クリスチャンは、「彼らは価値があるだろうか」とは問わない、かえって、「どうしたらわたしは彼らを助けることができるか」と尋ねる。どんなにみじめで、また、どんなに堕落した者の中にも、クリスチャンは、キリストが救おうとして死なれた魂を見、そのような魂のために、神は和解のつとめを、その子らにお与えになったことを知るのである。

憐れみある者とは、貧しい者、苦しむ者、しいたげられている者に同情をあらわす者である。ヨブはこう述べた。「これは助けを求める貧しい者を救い、また、みなしごおよび助ける人のない者を救ったからである。今にも滅びようとした者の祝福がわたしに来た。わたしはまたやもめの心をして喜び歌わせた。わたしは正義を着、正義はわたしをおおった。わたしの公義は上着のごとく、また冠のようであった。わたしは見えない人の目となり、歩けない人の足となり、貧しい者の父となり、知らない人の訴えの理由を調べてやった」（ヨブ29：1216）。

多くの人にとって、人生は苦しい戦いである。彼らは自分の無力を感じ、みじめで不信仰である。彼らは、自分が感謝するほどのものは何も持っていないと考尺ている。これらの苦闘し、よるべのない多くの者にとって、親切な言葉や、同情のまなざし、感謝の表現は、かわきにあえぐ魂への1杯の冷たい水のようになる。1つの同情の言葉、1つの親切な行為は、疲れた肩に重くのしかかっている重荷を持ち上げる。無我の親切から出るすべての言葉や行いは、失われた人類に対するキリストの愛の表現である。

憐れみ深い者は「あわれみを受けるであろう」「物惜しみしない者は富み、人を潤す者は自分も潤される」（箴言11：25）。慈悲深い心にはすばらしい平和があり、自分を忘れて他の人の益のために働く生涯には、祝福された満足がある。心に住み、生活に現れる聖霊は、かたくなな心を和らげ、同情とやさしさをよび起こす。あなたは、自分がまいたものを刈り取るのである。「貧しい者をかえりみる人はさいわいである。……主は彼を守って、生きながらえさせられる。彼はこの地にあって、さいわいな者と呼ばれる。あなたは彼をその敵の欲望にわたされない。主は彼をその病の床でささえられる。あなたは彼の病む時、その病をことごとくいやされる」（詩篇41：13）。

神の子らに仕えることで神に自分の命をささげた者は、宇宙のすべての資源を支配されるお方と連なるのである。彼の命は変わることのない約束の黄金の鎖によって、神の命と結ばれる。苦難と窮乏の時に主は彼を見捨てられない。「わたしの神は、ご自身の栄光の富の中から、あなたがたのいっさいの必要を、キリスト・イエスにあって満たして下さるであろう」（ピリピ4：19）。さらに最終の窮乏の時、憐れみ深い者は、情け深い救い主の憐れみの中に、避難所を見いだす。そして、永遠の住居に受け入れられるのである。

「心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう」

（マタイ5：8）

ユダヤ人は、儀式的なきよめに関しては実に厳格で、その規則はきわめてわずらわしいものであった。彼らの心は

規則とか規定とか、外面的な汚れに対する恐れでいっぱいになっていた。それでいて、我欲や悪意が魂に与える汚点には気づかなかった。

イエスはこの儀式的きよめを、キリストの王国に入る条件の一つとしてあげずに、心の純潔の必要を指 摘された。[1134] 上よりの知恵は、「第一に清」い（ヤコブ3：17）。神の都には、汚れたものは何一つ入れない。その住民となるすべてのものは、この地上で、心の清いものになっていなくてはならない。イエスに学んでいる者の中には、不注意なふるまいや、不適当な言葉や、下品な思いに対する嫌悪が徐々に強まってくる。キリストが心に住まわれる時、思いと行為が純潔になり、洗練されるのである。

しかし、「心の清い人たちは、さいわいである」とのイエスの言葉は、もっと深い意味をもっている。単に世が純潔と考える意味での純潔——肉体的なものにとらわれず、情欲に汚れていない——を言うのでなく、心のかくれた目的や動機において真実であり、誇りや利己主義から解放され、謙そんで、無我で、幼な子のような者であることを意味する。

似た者同士が理解し合えるのである。あなたが自分の生活に、主の品性の本質である自己犠牲の愛の原則を受け入れない限り、あなたは神を知ることはできない。サタンに欺かれている心は神を暴君と見、情け容赦のないお方と見る。人間の利己的な特性とサタンの特性までも、慈愛深い創造主のせいにされる。「あなたはわたしを全く自分とひとしい者と思った」と主は言われる（詩篇50：21）。神の摂理は専制的で、復讐的な性質の表れであると解釈される。神のめぐみの富の宝庫である聖書も、同様に解釈される。天のように高く、永遠にわたる真理の栄光も、認められないのである。人類の大多数の者にとって、キリストご自身は「かわいた土から出る根」のようであり、彼らは主の中に「慕うべき美しさ」を見ないのである（イザヤ53：2）。イエスが、人性をとった神の啓示として人々の間におられた時、律法学者やパリサイ人たちは主に向かってこう言ったのである。「あなたはサマリヤ人で、悪霊に取りつかれている」（ヨハネ8：48）。弟子たちでさえ、我欲に目がくらんでいたので、父の愛を表すために来られた主をなかなか理解しなかった。ここに、イエスが人々のた

だ中で孤独に歩まれた理由がある。イエスは天においてだけ、十分に理解されたのであった。

キリストが栄光のうちに来られる時、悪者は彼を見るに耐えないのである。主を愛する者にとっては命である主の臨在の光が、不敬慶な者にとっては死となる。彼らにとって主の来臨の期待は、「ただ、さばきと、……激しい火とを、恐れつつ待つこと」である（ヘブル10：27）。主が現れる時、彼らは、彼らをあがなうために死なれたお方のみ顔から隠されることを祈るのである。

しかし、聖霊の内住によってきよめられてきた心にとっては、すべてが変わってくる。これらの人々は、神を知ることができる。モーセは主の栄光があらわされた時、岩の裂け目にかくれた。わたしたちが神の愛を見るのは、キリストの中にかくれる時である。

「心の潔白を愛する者、その言葉の上品な者は、王がその友となる」（箴言22：11）。信仰によって今ここで、わたしたちは神を見る。日々その経験の中に、神の摂理のあらわれの中に、わたしたちは主のいつくしみと憐れみをはっきり知る。わたしたちはみ子の品性の中に、神を認めるのである。聖霊は神と、神がつかわされたお方に関する真理を人間が理解し、心に受け入れられるようにされるのである。心の清い者は、自分たちのあがない主として新しい関係をもって神を見る。彼らは主の品性の純潔と美しさを見ると同時に、主のみかたちを反映することを切望する、彼らは悔い改めた息子を抱きかかえようとひたすら待っている父として神を見る。そして彼らの心は、言い表せない喜びと輝く栄光に満たされるのである。

心の清い者は、その偉大なみ手のわざに、また宇宙を構成している美しい事物の中に創造主を見る。神の書かれたみことばの中に、神の憐れみ、いつくしみ、めぐみの啓示をはっきりと読むのである。知恵のある者や賢い者には隠されている真理の数々が、幼な子にあらわされるのである。この世の知者にはわからない真理の美と尊さが、神のみ心を知り行おつと、幼な子のように信頼して望む者に、たえず示されていく。わたしたちは、自分が神の性質にあずかる者となることによって、真理を見分けるのである。

心の清い者は、神が彼らにこの世で生を与えておられる間、神が目の前におられるかのように生活する。そしてア [1135]

ダムがエデンにおいて、神と共に歩み、語ったように、来たるべき不死の状態において、彼らもまた顔と顔をあわせて神を見るのである。「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう」（コリント13：12）。

「平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう」

（マタイ519）

キリストは「平和の君」である（イザヤ9：6）。キリストのみわざは、罪が破壊した平和を、天と地に同復することである。「このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている」（ローマ5：1）。だれでも罪と絶縁することに同意し、キリストの愛に心を開く者は、この天の平和を持つ者となる。

これ以外に、平和の基はない。心に受け入れられたキリストのめぐみは、敵意をしずめる。それは争いをしずめ、魂に愛を満たす。神との平和また隣人との平和を保っている者は、決して不幸になることはない。彼の心には嫉妬はない。そこには、悪意の入る余地がない。憎悪も存在しえない。神と調和している心は、天の平和の共有者である。そして周囲のすべての者に、その祝福された感化を及ぼすのである。平和の精神は、世の争いに疲れ、悩む人々の心に、露のようにとどまる。

キリストに従う者たちは、平和の使信をもって世につかわされている。きよい生活の静かな無意識の感化によってキリストの愛をあらわし、ことばと行為によって、他の人に罪をすてさせ、心を神にささげるように導く者は、平和をつくり出す人である。

「平和をつくり出す人たちはさいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう」。平和の精神は、彼らが天と結びついている証拠である。キリストの芳しい香りが彼らをとりまいている。その生活の香り、その品性の美しさは、彼らが神の子らである事実を世に示している。人々は、彼らがイエスと共にいたことを知るのである。「すべて愛する者は、神から生れた者であ」る（ヨハネ4：7）。

「もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない」。しかし、「すべて神の御霊に導かれている者は、すなわち、神の子である」（ローマ8：9、14）。

「その時ヤコブの残れる者は多くの民の中にあること、人によらず、また人の子らを待たずに主からくだる露のごとく、青草の上に降る夕立のようである」（ミカ5：7）。

「義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである」

（マタイ5：10）

イエスは彼に従う者たちに、地上の栄誉や富を得たり、または、試練のない人生を送れるような希望をお持たせにならない。かえって主は彼らに、自己犠牲と屈辱の道を主とともに歩む特権を提供される。というのは、世が彼らを知らないからである。

失われた世界を救うためにこられたお方は、神と人類との敵の連合勢力の反対に出会われた。悪人と悪天使たちは、無情な同盟をもって平和の君に向かって陣をしいた。救い主の言葉と行いの1つ1つは、神の憐れみのあらわれであったのだが、彼が世と似ていないことが、痛烈な敵意をかき立てた。生来の悪い欲望をほしいままにするのをイエスが許されなかったので、もっとも激しい反対と敵意を引き起こすことになった。そのように、キリスト・イエスにあって敬虔に一生を送ろうとする者はすべて、同じ敵意と反対を受けるのである。義と罪、愛と憎悪、真理と誤謬の間には、抑えがたい闘争がある。人がキリストの愛と聖潔の美しさを示すならば、彼はサタンの王国の臣下を引き離しているのである。だから悪の君はそれに抵抗して立ち上がる。キリストの霊に満たされているすべての者には、迫害と非難が待ちうけている。迫害の性質は時代によって変わるが、その本質——その根底を流れる精神——は、アベルの時以来、主の選民を殺してきたのと同じ精神である。 [1136]

人々が神と調和することを求める時、十字架のつまずきが今なお終わっていないことに気づくであろう。もろもろの支配と、権威と、天上にいる悪の霊は、天の律法に服従するすべての者に対抗して陣をしくのである。こうして

迫害は、キリストの弟子にとっては、悲しみをひきおこすどころか、かえって喜びとなるはずである。なぜならそれは、彼らが主の足跡に従っている証拠だからである。

主はご自分の民が、試練をまぬかれるという約束はなさらなかったが、はるかに良いものを約束された、主は、「あなたの力はあなたの年と共に続くであろう」と言われた（申命記33：25）。「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」（Ⅱコリント12：9）。もしあなたが、主のために火の燃える炉を通るように召されるならば、イエスは、バビロンの忠実な3人の青年たちと共におられたように、あなたのかたわらにおられる。あがない主を愛する者は、主とともに屈辱とそしりにあうたびに喜ぶ。彼らは、主を愛しているので、主のための苦しみを少しもいとわないのである。

すべての時代にわたって、サタンは神の民を迫害してきた。サタンは彼らを拷問にかけ、死に至らせた。しかし彼らは、死ぬことによって勝利者となった。彼らは、その不屈の信仰によって、サタンよりも強いお方をあらわした。サタンは彼らを責め、肉体を殺すことはできた。しかし、キリストとともに神のうちにかくれている命に触れることはできなかった。サタンは牢獄の中に幽閉することはできたが、その魂をしばることはできなかった。彼らは「わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない」（ローマ8：18）。「このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである」と叫びながら、暗黒のかなたに栄光を見ることができた（Ⅱコリント4：17）。

試練と迫害を通して、神の栄光――品性――が神の選ばれた民のうちにあらわされる。世に憎まれ、迫害される神の教会は、キリストの学校において教育され、訓練を受ける。彼らは地上の狭い道を歩き、苦難の炉で精錬される。彼らは激しい戦いの中にあってもキリストに従う。彼らは自己を犠牲にし、にがい失望を経験する。しかし彼らの苦しい経験は、罪の結果とその苦悩を教えるのである。そして、彼らは嫌悪の情をもってそれを見るのである。キリストの苦難にあずかる彼らは、キリストの栄光にあずかる者とされるのである。聖なる幻の中に預言者

は神の民の勝利を見た。「またわたしは、火のまじったガラスの海のようなものを見た。そして、このガラスの海のそばに、……勝った人々が、神の立琴を手にして立っているのを見た。彼らは、神の僕モーセの歌と、小羊の歌とを歌って言った、『全能者にして主なる神よ。あなたのみわざは、大いなる、また驚くべきものであります。万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります』」（黙示録15：2、3）。「彼らは大きな患難をとおってきた人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張って共に住まわれるであろう」（黙示録7：14、15）。

「人々があなたがたをののし（る）……時には、あなたがたは、さいわいである」

（マタイ5：11）

サタンは堕落して以来、欺瞞（ぎまん）によって働いてきた。彼は神を偽り伝えたように、その部一下によって神の子らを誤表するのである。救い主は、「あなたをそしる者のそしりがわたしに及んだ」と仰せになる（詩篇69：9）。同じようにして、室の弟子たちの上にそしりが及ぶのである。

この世に生を受けた者の中で、人の子ほど残酷な中傷を受けた者はなかった。イエスは、神の聖なる律法の原則 [1137]
に確固として従われたので、愚弄され嘲笑を受けられた。人々は理由なしに主を憎んだ。しかし主は敵の前に冷静に立ち、非難はクリスチャンの遺産の一部であると言明しておられる。また弟子たちに、いかにして悪意の矢をふせぐべきかを教え、迫害にあっても気落ちしないようにと命じておられる。

中傷は人の評判を悪くすることはできるが、品性に汚点をつけることはできない。それは神の守りのうちにあるのである。わたしたちが罪に同意しない限り、人間でもサタンでも、魂に汚点をつける力はない。神に信頼している人は、どんな苦しい試練、どんな絶望的な状況にあっても、以前自分が繁栄していて、神の光とめぐみに浴していると

思えた時と、全く変わらないのである。彼の言葉も、動機も、行動も、誤解され曲解される。しかし彼は、もっと重大な事がらに関心をもつのでそれを気にしない。モーセと同じく、彼は「見えないかたを見ているようにして」（ヘブル11：27）「見えるものにではなく、見えないものに目を注」いで忍ぶのである（II コリント4：18）。

キリストは人に誤解され、悪い評判を立てられているすべての者を知っておられる。神の子らはどんなにそしられ、軽蔑されても、冷静な忍耐と信頼をもって待つことができる。なぜなら秘密にされているもので、明るみに出ないものはなく、神をあがめる者は、人と天使たちの前で神から光栄を与えられるからである。

イエスは、「人々があなたがたをののしり、また迫害する時は」「喜び、よろこべ」と言われた。そして主は聴衆に「苦しみを耐え忍ぶ……模範」として（ヤコブ5：10）、主のみ名によって語った預言者たちを示しておられる。アダムの子らのうち、一番はじめのクリスチャンであったアベルは、殉教の死を遂げた。エノクは神とともに歩んだが、世は彼を知らなかった。ノアは狂信者、世を騒がせる者と嘲笑された。「なおほかの者たちは、あざけられ、むち打たれ、しばり上げられ、投獄されるほどのめに会った」「ほかの者は、更にまさったいのちによみがえるために、拷問の苦しみに甘んじ、放免されることを願わなかった」（ヘブル11：36、35）。

どの時代にも、神が選ばれた使者たちは、ののしられ、迫害された。しかしその苦難を通して、神の知識が広まったのである。キリストの弟子はみなこの列に加わり、預言者たちと同じ働きを推し進めなければならない。そして敵は、真理に逆らっては何一つなし得ず、むしろ真理のためになっていることを覚えるべきである。侮辱のことばが浴びせられても、神は真理が前面に出され、検討と論議の主題になるよう意図しておられる。人々の心を、ゆり動かさなければならない。あらゆる論争、あらゆる非難、良心の自由を束縛するあらゆる企ては、ともすれば眠りをむさぼりがちな人心を、目覚めさせる神の手段である。

このような結果は、神の使者たちの生涯の中に何度もみられた、かの高貴で雄弁なステパノがサンヒドリン議会の扇動によって石で打ち殺された時、福音事業は何らの損失

もこうむらなかった。ステパノの顔に輝いた天の光と、彼の臨終の時の祈りに聞かれた神のような憐れみなどは、そこに立っていた頑迷な一議員の罪を指摘する鋭い矢のようなものであった。こうして迫害者のパリサイ人サウロは、異邦人や、王たちやイスラエルの子らにキリストの名をもたらす選びの器となったのである。

それからずっと後になって、年老いたパウロは、ローマの牢獄からこのように書いた。「わたしの入獄の苦しみに更に患難を加えようと思って、……一方では、ねたみや闘争心からキリストを宣べ伝える者が（いる）。……見えからであるにしても、真実からであるにしても、要するに、伝えられているのはキリスト（である）」（ピリピ1：17、豆5、18）。パウロの投獄によって、福音は広まった。カイザルの宮殿の中でさえ、魂がキリストへ導かれた。「神の変ることのない生ける御言」の「朽ちない種」は、それを撲滅しようとするサタンの働きによって、人々の心にまかれる（ペテロ1：23）。神の子らをそしり、迫害することによって、キリストのみ名があがめられ、魂は救われるのである。

迫害とそしりによってキリストのための証人となる者の、天において受ける報いは非常に大きい。人々は地上の幸福を求めているが、イエスは彼らに天の報いをさし示される。しかしイエスは、何もかも来世に置くことはなさらない。報いは、この地上から始まるのである。主は昔アブラハムにあらわれて、「わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは、はなはだ大きいであろう」（創世記15：1）と言われた。これは、キリストに従うすべての者が受ける報いである。エホバ・インマヌエルは——「知恵と知識との宝が、いっさい隠され」「満ちみちているいっさいの神の徳が、かたちをとって宿って」いるお方である（コロサイ2：3、9）。そしてわたしたちが、宝の性質を受けようとますます心を開くにつれて主と一つになり、主を知り、主をわがものとするようになる。また主の愛と力を知り、キリストのはかり知れない富を持ち、「また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているもののすべてをもって、あなたがたが満たされ」「その広さ、長さ、高さ、深さ」をますます理解するようになるのである（エペソ3：19、18）、——「これが主のしもべら [1138]

の受ける嗣業であり、また彼らがわたしから受ける義である」と主は言われる（イザヤ54：17）。

ピリピの獄中で、パウロとシラスが真夜中に神に祈り、神を賛美した時、彼らの心を満たしたのはこの喜びであった。キリストは彼らのそばにおられ、主の臨在の光は天の宮の栄光をもって暗やみを照らした。ローマから福音の進展を見たパウロは、捕らわれの身であることも忘れて、「わたしはそれを喜んでいるし、また喜ぶであろう」と書き送った（ピリピ1：18）。山上の、キリストのことばがそのまま、迫害のさ中にあるピリピ教会へ書き送ったパウロの使信の中に反響している。「あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい」と（ピリピ4：4）。

「あなたがたは、地の塩である」

（マタイ513）

塩は、保存の性質があるので尊重される。そして、神は神の子らを、塩と呼ばれるのである。神が彼らを、神のめぐみにあずかるものとなさったのは、他の人々を救う器にするためであることを、教えようと望まれたのである。全世界の中から一つの民を選ばれた神の目的は、彼らを神の息子、娘とすることだけでなく、彼らを通して、救いをもたらす恵みを世界が受けるためである（テトス2：11参照）。主は単に、アブラハムを神の特別な友とするためばかりではなく、主が、国々に与えようと望まれた特権を取り次ぐ者とするために、彼を選ばれたのである。イエスは十字架におかかりになる前、弟子たちとともになされた最後の祈りの中で、「彼らが真理によって聖別されろように、彼らのためわたし自身を聖別いたします」とお祈りになった（ヨハネ17：19）。同様に、真理によってきよめられたクリスチャンは、世が道徳的に腐敗しきってしまわないようにする保存力をもつのである。

塩は、それを加えた物質とよく混ぜねばならない、保存するためには、塩は浸透しなければならない。そのように、人々に福音の救済の力が及ぶのは、個人的な接触と交わりによってである。人々は集団としてではなく、個人として救われるのである。個人的な感化には力がある。わた

したちは、益を与えたいと思う人に近づいて行かなければならない。

塩の味はクリスチャンの活力——心にあるイエスの愛、生活に浸透するキリストの義——をあらわす。キリストの愛はひろがり、くい込む性質がある。それがわたしたちのうちに宿る時、他の人々に向かってあふれでるのである。わたしたちは、人々の心がわたしたちの無我の関心と愛によって暖められるまで、彼らと親しくなるべきである。誠実な信徒は生きた活力を発散する。それは、彼らが働きかける相手の魂の中にしみ込んで、新しい道徳的な力を与える。品性を変える働きをするのは、人間の力ではなく聖霊の力である。

イエスは厳粛な警告をしておられる、「もし塩のききめがなくなったら、何によってその味が取りもどされようか。もはや、なんの役にも立たずただ外に捨てられて、人々にふみつけられるだけである」（マタイ5：13）。 [1139]

キリストのみことばを聞いていた人々は、味を失って役に立たなくなったので外に捨てられた塩が、道ばたで白く光っているのを目にしていた。それはパリサイ人の状態と、彼らの宗教が社会に及ぼす影響とをよくあらわしていた。またそれは神のめぐみの力が去って、冷たくキリストなき者となった、すべての人の生活を示すものである。口では何と言おうと、そのような人は、人と天使から味のない、不快なものと見られる。キリストが「あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。このように、熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるいのであなたを口から吐き出そう」と言われたのは、そのような人に対してである（黙示録3：15、16）。

キリストを個人的救い主として信じる生きた信仰なしに、懐疑的な世界にわたしたちの感化を及ぼすことは不可能である。わたしたちは、自分で持っていないものを他人に与えることはできない。わたしたちはキリストに自分をささげればささげるほど、人類の祝福と向上のために大きい感化を及ぼすのである。実際の奉仕、純粋な愛、現実の体験がないところに、他人を助ける能力も、天との結合も、生活の中におけるキリストの味もないのである。イエスのうちにある真理を世に伝える器として、わたしたちが聖霊に用いていただかない限り、わたしたちは味を失った

塩のようで、全く値打ちのないものである。キリストのめぐみに欠けることによって、わたしたちが信じると主張する真理は何らきよめる力をもたないことを、わたしたちは世に立証するのである。こうしてわたしたちの影響が及ぶ限りにおいて、神のみことばの力を無にしてしまう。「たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鏡鉢と同じである。たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である」（コリント13：13）。

愛が心を満たすと、それは他の人々に向かってあふれでる。それはその人々から親切にされたからではなく、愛が行為の原則であるからである。愛は品性を変え、衝動を支配し、敵意を押え、愛情を高尚にする。この愛は宇宙のように広く、天使たちの愛と調和する。その愛を心に抱けば全生涯を美しくし、まわりのすべての者にその祝福を注ぐ。わたしたちを地の塩とするのは、これである。ただこれだけなのである。

「あなたがたは、世の光である」

（マタイ514）

イエスは人々を教えられた時、たびたび周囲の自然界からたとえをひき、それによって教えを興味深くし、聴衆の注目を集められた。人々は朝早くから集まっていた。輝かしい太陽は、谷間や山の小道にひそんでいる影を追い出しながら、次第に青空にのぼっていく。東の空には、まだ紅が消えないでいる。朝の光はきらきらと山野にみなぎり、鏡のように静かな湖水の面は黄金の光を反映し、バラ色の朝雲をうつしていた。どのつぼみも花も小枝も、朝露に光っていた。自然は新しい日の祝福にほほえみ、鳥は木々の小枝で楽しく歌っていた。救い主は目の前の群衆をごらんになり、目を転じて上ってくる太陽を見て、弟子たちに、「あなたがたは、世の光である」と言われた。太陽が

夜の陰を追い払い、世界を命に目ざめさせながら愛の使いをはたしていくように、キリストに従う者たちは、誤謬と罪の暗黒の中にいる人々に天の光をまき散らしながら、自分の使命を果たすために出て行かなければならない。

輝かしい朝の光の中に、周囲の丘に点在する町々や村々がくっきりと浮かびでた、その光景は八々の注目を引き付けずにはいなかった。イエスはその町々を指さして、「山の上にある町は隠れることができない」と言われた。イエスは、さらにつけ加えて「また、あかりをつけて、それを [1140] 枡の下におく者はいない。むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照させるのである」と言われた。イエスのみことばに耳を傾けていた者の大多数は農夫や漁師であった。彼らの粗末な家には1つの部屋しかなく、1つのあかりが燭台の上にあって、家の中のすべてのものを照らしていた。「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」とイエスは教えられた（マタイ5：1416）。

キリストから輝きでる光のほかには、堕落した人類を照らす光は、過去にもなかったし、またこれからも決してないのである。救い主イエスは、罪のうちにある世の暗黒を照らす唯一の光である。キリストについて、「この言に命があった。そしてこの命は人の光であった」と書かれている（ヨハネ1：4）。主の命を受けることによってのみ、主の弟子たちは光を掲げる者となることができたのである。魂のうちにあるキリストの命、品性にあらわされたキリストの愛が、彼らを世の光としたのである。

人類は、それ自身のうちに光をもっていない。キリストから離れるならば、わたしたちは、火がともっていない灯心のようであり、太陽に顔をそむけた月のようである。したがって暗い世界にただ一筋の光を与えることもできない。しかし、わたしたちが義の太陽に向かい、キリストと接触する時、神の臨在の輝きによって心が全く燃やされるのである。

キリストの弟子は、人々の間にある1つの光以上のものでなければならない。彼らは世の光である。イエスは、ご自分の名をもって呼ばれるすべての者に向かって、あなたがたはわたしに心をささげた、そこでわたしはあな

たがたをわたしの代表者として世に与えたのだと仰せになる。父なる神がみ子を世につかわされたように、「わたしも彼らを世につかわしました」と主は言われる（ヨハネ17：18）。、キリストが父なる神を啓示するチャンネルであるように、わたしたちは、キリストを世にあらわすチャンネルでなければならない、クリスチャンよ、救い主は大いなる光の源であられると同時に、人間を通してこの世にご自身をあらわされることを忘れないでほしい。神の祝福は、人間の器を通して与えられる。キリストご自身も、人の子として世界にこられたのである。神性と結合した人性が、人間に接触しなければならない、主の個々の弟子からなるキリストの教会は、人々に神を啓示するために、天が定めたチャンネルである。光の天使は滅びるばかりの魂に、天の光と力をあなたを通して与えようと待ちうけているのである。人間の器が命じられた働きに、失敗したらどうであろうああ、その時、この世界は、約束された聖霊の感化をそれだけ失うことになるのである。

しかしイエスは弟子たちに、「あなたがたの光を輝かすために努力せよ」とはお命じにならなかった。イエスは「それを輝かせよ」と言われたのである。キリストが心に宿られるならば、その臨在の光をかくすことは不可能である。もしキリストの弟子であると自称する者が世の光でないなら、それは生きた力が彼らから去ったためである。また、もし彼らが与えるべき光をもっていないなら、それは彼らが光の源であるお方と結合していないからである。

どの時代においても、「彼ら……のうちにいますキリストの霊」は、神の真の子らをその時代の人々の光とした（ペテロ1：11）。ヨセブはエジプトにおいて、光を掲げる者であった。彼の純潔、慈愛、親を思う愛は偶{象教国のただ中でキリストをあらわした。イスラエル人がエジプトから約束の地へ行く道中、彼らの中の真心をもった人々は、周囲の国々の光であった。彼らを通して神は世にあらわされた。バビロンではダエルとその友らが、ペルシャではモルデカイが暗い王宮に輝かしい光を放った。

同じように、キリストの弟子たちは、天へ向かう途上で光を掲げる者として置かれている。神について誤った考えをもち、暗黒に閉ざされている世界に、彼らを通して父なる神の憐れみといつくしみがあらわされるのである。彼ら

のよい行いを目撃して、他の人々は、天にいます父をあがめるようになる。実に賛美さ れるにふさわしく、また、その姿に似るにふさわしい品性をお持ちになっている神が、宇宙の王座にいますことが明らかにされたからである。心に燃える神の愛、生活にあらわれるキリストのような調和は、世の人々が天のすぐれたところであることを知るように与えられた、天のかすかなあらわれにほかならない。 [1141]

こうして人々は、「神がわたしたちに対して持っておられる愛を信じる」ように導かれるのである（ヨハネ4：16）、こうしてかつては罪深く、堕落していた魂は変えられ、「その栄光のまえに傷なき者として、喜びのうちに」立たせられるのである（ユダ24）。

「あなたがたは、世の光である」との救い主のみことばは、主の弟子たちに世界的任務がゆだねられた事実を示している。キリストの時代には、神のみことばの守り手に任じられた者たちと、地球上の他のすべての国々との間に、利己毛義、高慢、偏見が、強く高い障壁を築いていた。しかし救い主は、このすべてを変えるために来られたのである。人々が主の口から聞いた言葉は、彼らが今まで祭司やラビから聞いてきたことと全く違っていた。キリストはへだての壁、利己主義、国民と国民をへだてる偏見を打破し、人類家族全体に対する愛をお教えになっている。主は利己主義が規定する狭い囲いから人々を引きあげ1すべての国境線や社会の人為的な差別を廃される、主は隣人と見知らぬ他人、また友人と敵の区別をなくされる。そしてわたしたちに、すべての困窮者を隣人と見、世界をわたしたちの伝道地とみなすようにお教えになっている。

太陽の光が地のどんな片すみにもさし込むように、福音の光が地に住むすべての魂にまで及ぶように、神は計画しておられる。キリストの教会が主の目的をなしとげていたならば、暗黒の中に座し、死の地と死の陰にいるすべての者の上に光が注がれたことであろう。ひとところに集まってしまって、責任と十字架を負うことを避けるかわりに、教会員はすべての国にちらばり、キリストの光を輝かし、また魂の救いのために主が働かれたように働いて、この「み国の福音」はすみやかに全世界に伝えられたにちがいないのである。

神がメソポタミヤの平原からアブラハムを召されてから、今日わたしたちを召されるまで、神の召しの目的は、みわざの達成されることである。「わたしは……あなたを祝福し、……あなたは祝福の基となるであろう」と神は言われた（創世記12：2）。「起きよ、光を放て。あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上にのぼったから」（イザヤ60：1）、福音の預言者イザヤを通して語られたキリストのみことばは、山上の説教に反響しているにすぎないのであるが、このみことばは、終わりの時代に住むわたしたちのために語られたのである。もしあなたの心に宅の栄光がのぼり、あなたが万人にぬきんでる主の美しさ、美しさの極みであるおかたを見、あなたの魂が一}三の臨在の栄光によって輝くようになったら、この言葉は主からあなたに送られているのである。あなたはキリストとともに変貌の山に立っただろうか。山のふもとにはサタンに捕らわれた多くの魂がいる。彼らは、自分たちを解放してくれる信仰と祈りのことばを待ちわびているのである。

わたしたちはキリストの栄光を瞑想するだけでなく、主がいかにすぐれているお方であるかを語るべきである。イザヤはキリストの栄光を見たばかりでなく、キリストについて語った。ダビデは瞑想しているうちに心が燃え、その舌をもって語った。彼が神のおどろくべき愛を瞑想した時、自分が見たり感じたりしたことを話さずにいることはできなかった。信仰をもって、贖罪のすばらしい計画や、神のひとり子の栄光を見ながら、それを語らない者があるだろうか。わたしたちが滅びないで、永遠の命を得るように、キリストがカルバリーの十字架上に死んであらわされた測りしれない愛を瞑想し、凝視しながら、救い主の栄光を賛美することばを持っていないという者があるだろうか。

「その宮で、すべてのものは呼ばわって言う、『栄光』と」（詩篇29：9）。イスラエルの歌い手は琴に合わ
[1142] せ、美しい声で主を賛美した、「わたしはあな たの威厳の光栄ある輝きと、あなたのくすしきみわざとを深く思います。人々はあなたの恐るべきはたらきの勢いを語り、わたしはあなたの大いなることを宣べ伝えます」（詩篇145：5、6）。

カルバリーの十字架は人々の上に高く掲げられ、それに、人々の心がひきつけられ、彼らの思いが集中させられなければならない。その時、すべての霊的機能は神からの直接の力に満たされる。そして、全力をあげて主のための真の働きに集中するのである。働き人たちは地を照らす生きた器として、世界に光の流れを送るのである。

キリストはどんなに喜んで、主に心をささげる人間の器をお受けになることであろう。主はご自分のうちに具体化された愛の奥義を世に伝えるために、人を神と結合させられるのである。それを語ろう。それについて祈ろう。それを歌おう。主の栄光の使命を広く宣べ伝え、地の果てまで押し進めよう。

忍耐強く耐えた試練、感謝して受けた祝福、おおしく退けた誘惑、柔和、親切、憐れみ、習慣となった愛は、品性に輝く光であり、命の光がさし込んだことのない利己心の暗さときわめて対照的である。

律法の精神

「廃するためではなく、成就するためにきたのである」

（マタイ5：17）

むかし、雷鳴と炎の中で、シナイ山上から律法を宣告なさったのはキリストであった。焼き尽くす火のような神の栄光がその頂をおおい、山は主のこ臨在に震動した。イスラエルの群衆は地にひれ伏し、おののきながら律法の聖なる戒めに聞きいった。それは、この祝福の山の光景とは、何という違いであったろう。小鳥のさえずりのほか、静寂を破る物音の一つもない夏空のもとで、イエスはみ国の原則をお語りになった。しかし、愛にあふれた口調で、その日、民衆にお語りになったイエスは、シナイ山で宣告された律法の原則を彼らにお示しになっていたのである。

律法が与えられた当時、イスラエルはエジプトの長い生活のために堕落していたので、神の大能と威厳とを印象づけられる必要があった。それでも神は、愛の神として彼らにご自身をあらわされたのであった。

「主はシナイからこられ、
セイルからわれわれにむかってのぼられ、
パランの山から光を放たれ、
ちよろずの聖者の中からこられた。
その右の手には燃える火があった。
まことに主はその民を愛される。
すべて主に聖別されたものは、み手のうちにある。
彼らはあなたの足もとに座して、
教を受ける」（申命記33：2、3）。

各時代を通じて愛唱されてきた、「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まことの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」というすばらしいことばのうちに

神がご自分の栄光をあらわされたのは、モーセに対してであった（出エジプト34：6、7）。

シナイで与えられた律法は、愛の原則の言明であり、天の律法の地上への啓示であった。それは仲保者キリストの手で制定され、そのみ力を通して、人間の心をこの原則に調和させることのおできになるキリストによって、語られたのであった。神はイスラエルに、「あなたがたは、わたしに対して聖なる民とならなければならない」と述べて、律法の目的をあらわされた（出エジプト22：31）。

しかし、イスラエルは律法の霊的性格を理解せず彼らのいわゆる服従とは、心が愛の主権に従うことではなく、単に形式と礼典の遵守にすぎないことがあまりに多かった。イエスがご自分の品性とお働きによって、神のきよく情け深い、父としての1生質を人々に あらわし、単に儀礼的な [1143] 服従の無価値なことを示された時にも、ユダヤ人の指導者たちは、イエスの言葉を聞きいれずまた、理解もしなかった。彼らは、イエスは律法の要求をあまりに軽視していると考え、神から命じられて彼らが行っている、宮の奉仕の真髄である真理そのものが目前に示されると、彼らはただ外面ばかりを見て、イエスはその奉仕を破壊しようとしているのだと非難した。

キリストの語られるみことばは、静かではあったが、群衆の心を動かす熱と力がこもっていた。彼らはまたしても、ラビたちの生気のない言い伝えときびしい要求が聞かれるのではないかと耳を傾けていたが、そうではなかった。彼らは「その教えにひどく驚いた。それは律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように、教えられたからである」（マタイ7：28、29）。パリサイ人は、自分たちの教え方とキリストの教え方との大きな違いに気がついた、彼らは、真理の威厳と純粋さと美しさとが、落ちついた深い影響力を伴って、多くの人々の心をしっかりとつかんでゆくのを見た。救い主の天来の愛とやさしさが、人々の心を彼に引きよせた。ラビたちは、彼らが国民に与えてきた教えが、イエスの教えによってすっかりむだになってしまったのを見た。イエスは、彼らの誇りと排他的精神にとって都合のよかった隔ての中垣を打ちこわしておられるのであった。そして彼らは、成り行きにまかせておけば、イエスが彼らから民衆を全く引き離してしまのではないか

と恐れた。そこで彼らは、機会があれば群衆をイエスから引き離して、サンヒドリンがイエスを罪に定めて、死刑にするきっかけを見つけようと、敵意を固めてイエスについてまわった。

山の上でも、イエスにはスパイの看視の目がついていた。そしてイエスが義の原則を教えられると、パリサイ人はそれを、イエスの教えは、神がシナイからお与えになった戒めに反するものだと、ささやき合う材料に利用した。救い主は、モーセを通して与えられた宗教とおきてへの信仰をくつがえすことは、一言も語られなかった。なぜなら、このイスラエルの大指導者がその民に伝えた天来の光は、その一筋一筋がキリストから受けたものだったのである。多くの人は、キリストが律法を廃するために来られたのだと思っているが、イエスはまちがう余地のない言葉で、神の律法への態度を明らかにしておられる。「わたしが律法や預言者を廃するために来た、と思ってはならない」とイエスは言われた（マタイ5：17）。

律法を廃することが自分の意図なのではないと宣言なさったお方は、人間を創造し、かつ律法をお与えになったお方である、日の光に漂うほこりから天上の諸世界に至るまで、自然界のものはすべておきてのもとにある。そして自然界の秩序と調和は、これらのおきてに従うことにかかっていろのである。それと同じく、すべての知的存在の生命を支配する偉大な義の原則があって、宇宙の安寧は、これらの原則に一致するか否かにかかっている。地球が創造される以前から、神の律法はあった。天使も、これらの原則によって治められている。そして、地が天と調和するためには、人もまた、天のおきてに従わなければならない。「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」時に、キリストは律法をお与えになった（ヨブ38：7）。地上におけるキリストの使命は、律法を廃することではなく、その恵みによって人類を再びその律法に従わせることであった。

山上でイエスの言葉に聞き入っていた愛された弟子ヨハネは、そのずっと後に聖霊の感動のもとに筆をとり、律法を永遠の義務として述べている。「罪とは律法に背くことである」。また「すべて罪を犯す者は、律法に背く者である」（ヨハネ3：4・英語欽定訳）。ヨハネは、ここで言う

律法は、「あなたがたが初めから受けていた古い戒めである」ことを明らかにしている（ヨハネ2：7）。彼は創造の時すでに存在しており、シナイ山で反復された律法のことを言っているのである。

イエスは律法について、「廃するためではなく、成就するためにきた」と仰せになった。イエスはここで、「成就する」ということばを、「正しいことを成就する」のが自分の意向であると、バプテスマのヨハネに告げられた時と同じ意味でお用いになった。すなわ ち、律法の要求を満たす神の意志への完全な一致の模範を与える、ということである。 [1144]

イエスの使命は、「教を大いなるものとし、かつ光栄あるものとすること」であった（イザヤ42：21）。イエスは、律法の霊的な性質を示し、その遠大な原則を教え、それが永遠の義務であることを明らかにされるのであった。

この世のどんなに高尚で柔和な人も、キリストの品性のこうこうしい美しさにくらべれば、そのかすかな反映にすぎない。キリストのことを霊に感じてソロモンは、「万人にぬきんで……彼はことごとく麗しい」と歌った（雅歌5：10、16）。ダビデもまた預言の幻のうちにみ姿を見て、「あなたは人の子らにまさって麗し」いと歌った（詩篇45：2）。イエスは、天父の本質の真の姿であり、その栄光の輝きである。地上における愛の生涯の始めから終わりまで、自己を犠牲にされたあがない主は、神の律法の性格の生きた表現であった。キリストの生涯によって、天来の愛とキリストのような原則とが、永遠の公正という法則の基礎であることが明らかにされている。

イエスは「天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである」と仰せになった（マタイ5：18）。キリストは、自ら律法に従うことによって、律法の不変性をあかしし、キリストの恵みによって、アダムの息子、娘はみな、完全にそれに従うことができることを証明された。キリストは山の上で、すべてのこと——人類にかかわるすべてのこと、あがないの計画に関するすべてのこと——が全うされるまでは、律法の最も小さい部分もすたれることはないと言明なさった。イエスは、律法が廃棄されるとはお教えにならない。そして、世界の終末に目を向けて、その時が来るまで、律法

はその権威を保ちつづけることを保証しておられる。それだから、だれも律法を廃することが、イエスの使命であったと考えることはできないのである。天地が存続するかぎり、神の律法の聖なる原則は残る。神の義は「山のごとく」存続し、それは祝福の源となって、地をうるおす流れを送り出すのである（詩篇36：6）。

主の律法は完全であり、従って変わることがないから、罪人は、自分でその要求の水準に達することは不可能である。これが、イエスがわたしたちのあがない主としておいでになった理由であった。神のこ性質にあずかる者とすることによって、人を天の律法の原則に調和させるのが、イエスの使命であった。わたしたちが罪を捨て、キリストを救い主として受けいれる時に、律法は高められる。使徒パウロは、「すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのであるか。断じてそうではない。かえって、それによって律法を確立するのである」と言っている（ローマ3：31）。

新しい契約による約束は、「わたしの律法を彼らの心に与え、彼らの思いのうちに書きつけよう」という約束である（ヘブル10：16）。キリストを、世の罪を取り除く神の小羊として指し示していた象徴の制度は、キリストの死とともにすたれるものであったが、十戒に具体的に表現された義の原則は、永遠のみ座と同様に不変のものである。1つの戒めも廃されていないし、一点一画も変更されてはいない生命の偉大なる律法として楽園の人類に知らされた原則は、楽園回復の後も変わることなく存続する、エデンが再び地上に栄える時には、目の下のすべてのものが神の愛の律法に従うのである。

「主よ、あなたのみ言葉は天においてとこしえに堅く定まり」「すべてのさとしは確かである。これらは世々かぎりなく堅く立ち、真実と正直とをもってなされた」「わたしは早くからあなたのあかしによって、あなたがこれをとこしえに立てられたことを知りました」（詩篇119：89、111：7、8、　119：152）。

「これらの最も小さいいましめの1つでも破り、またそうするように人に教えたりする者は、天国で最も小さい者と呼ばれるであろう」

（マタイ**5：19**）

すなわちそういう人は、天国にはいらないというのである。それは、1つの戒めでも故意に破ろ者は、そのどれをも、霊とまこととをもって守らないからである。「律法をことごとく守ったとしても、その1つの点にでも落ち度があれば、全体を犯したことになるからである」（ヤコブ2：10）。 [1145]

罪を構成するのは不従順の大きな行為ではなくて、最も小さな点で神のあらわされたみこころに一致しないことである。それは、魂と罪との間に、依然としてかかわり合いがあることを示しているからである。心は、2つのものに仕えているのである。これは事実上、神を否定したことであって、神の政府の律法に対する反逆である。

かりに人が主のご要求を離れて、自分で義務の標準を立てる自由があるとすると、人それぞれに合うさまざまな標準ができることとなり、支配権は主のみ手から奪われてしまうことになる。人間の意志が最高権威とされ、高く聖なる神のみ旨――神の被造物に対する愛の目的――は尊ばれず、軽んじられることであろう。

人々が自分たちの道を選ぶ時はいつでも、神に敵対することになる。彼らは天の原則と戦っているのであるから、天のみ国に入ることはできない。彼らは、神のみこころを無視して、自分たちを、神と人との敵であるサタンの側に置いているのである。人は、神のお語りになった1つの言葉でもなく、また、多くの言葉でもなく、すべての言葉によって生きるのであるわたしたちは、たとえそれがどんなにささいなことに見えようとも、1つの言葉でも無視するなら安全を保つことはできない。この世においても、きたるべき世においても、人間の安寧と幸福のためにならないような律法の戒めは一つもない。神の律法に服従することによって、人間は生垣をめぐらされたように悪から守られる。神が築かれたこの障壁の1か所でもこわす者は、それが持つ保護の力を破壊したのである。なぜなら、敵が侵入して荒らし滅ぼすための通路を開いてしまったからである。

神のみこころの一点をあえて無視することによってわたしたちの最初の祖先は、この世界にわざわいの水門を開いてしまった。そして彼らの例にならう者はみな、同様の結

果を刈り取る。神の愛がその律法の一つ一つの戒めの基礎である。そして戒めを離れる者は、自分で自分の不幸と破滅をもたらしているのである。

「あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、決して天国に、はいることはできない」

（マタイ5：20）

律法学者やパリサイ人は、キリストばかりでなく弟子たちも、ラビの儀式と礼典を無視しているから、罪人であると非難してきた。弟子たちは、宗教の教師として敬ってきた人々から非難とけん責を受けて、当惑することがあった。イエスはその欺きの皮をはがされた。イエスは、パリサイ人が非常に高く評価していた義は、無価値なものであると断言された。ユダヤ民族は、自分たちが神の恩恵に浴している、特に選ばれた忠実な民だと主張していたが、キリストは、彼らの宗教は、魂を救う信仰に欠けていると仰せになった。彼らの見せかけの敬虔さや、人間の作りごとや、儀式、さらには彼らの誇りにしていた律法の外面的な要求の遂行などは、彼らをきよくする助けとはならなかった。彼らの心はきよくなく、その品性は気高いものでも、キリストのようなものでもなかった。

律法的宗教は、魂を神と調和させるのに不十分である。悔い改めもやさしさも愛もない、堅く厳格なパリサイ人の伝統的宗教は、罪人のつまずきの石となるだけであった。彼らは、味を失った塩のようなものであった。彼らは、世を腐敗から防ぐ力を持っていなかった。唯一の真の信仰は、「愛によって働」き魂をきよめる信仰である（ガラテヤ5：6）。それは品性を改変するパン種のようなものである。

ユダヤ人はこうしたことをみな、預言者の教えから学んでいるべきであった。神のみ前に義とされることを求める魂の叫びとその応答は、何世紀も前に預言者ミカの言葉の中にあらわされている。「わたしは何をもって主のみ前に行き、高き神を拝すべきか。燔祭および当歳の子牛をもってそのみ前に行くべきか。 主は数千の雄羊、万流の油を喜ばれるだろうか……。人よ、彼はさきによいこと

[1146]

のなんであるかをあなたに告げられた。主のあなたに求められることは、ただ公義をおこない、いつくしみを愛し、へりくだってあなたの神と共に歩むことではないか」（ミカ6：68）。

預言者ホセアは、「イスラエルは（自分のために）実を結ぶ茂ったぶどうの木である」（ホセア10：1・英語欽定訳参照）という言葉で、パリサイ主義の本質となっていろものを指摘していた、ユダヤ人は神に仕えると称しながら、実際は自分のために努力していた。彼らの義は、自分の考えに従って、自分の利益のために律法を守る、自分自身の努力の実であった、だからその義は、彼ら自身よりよいものではあり得なかった。彼らは自分をきよくしようとして、汚れたもののうちから清いものを出そうと努めていたのであった。神の律法は、神が聖であるのと同じように聖であり、神が完全であるのと同じように完全である、律法は神の義を人間に示している。人間は、自分の力ではこの律法を守ることができない。人間の性質は堕落し、ゆがんでおり、神のご品性とは全く似ても似つかなくなっているからである。利己的な心のわざは汚れたもののようであり、「われわれの正しい行いは、ことごとく汚れた衣のようである」（イザヤ64：6）。

律法は聖なるものであるが、ユダヤ人は、律法を守ろうとする自己の努力によっては、義に到達することができなかった。キリストの弟子たちは、天のみ国に入りたければ、パリサイ人の義とは異なった義を獲得しなければならない。神はみ子をお与えになることによって、律法の完全な義を彼らに提供なさった。もし彼らが心を十分に開いて、キリストを心に受けいれるなら、神の生命そのもの、神の愛が彼らのうちに宿って、彼らを神ご自身のみかたちに変えるのである。こうして彼らは、報いを求めない神の賜物によって、律法の要求する義を所有するのである。しかしパリサイ人は、「神の義を知らないで、自分の義を立てようと努め」てキリストを拒否した（ローマ10：3）、彼らは神の義を受け入れようとしなかった。

イエスはさらに進んで、神の戒めを守るとはどういうことか、すなわちそれは、キリストのご品性を自分たちのうちに再現することであることを、聴衆にお教えになった。

なぜなら、神はキリストにおいて、日々彼らの前にあらわされていたからである。

「兄弟に対して怒る者は、だれでも裁判を受けねばならない」

（マタイ5：22）

主はモーセを通して、「あなたは心に兄弟を憎んではならない。……あなたはあだを返してはならない。あなたの民の人々に恨みをいだいてはならない。あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない」と言われた（レビ19：17、18）。キリストが示された真理は、預言者たちが教えてきたところと同じものであったが、人の心がかたくなで罪を愛していたために、わからなくなっていた。

キリストの言葉はその聴衆に対して、彼らは他人を罪人であると非難しているが、自分たちも悪意と憎しみを抱いているのであるから、同様に罪ある者であることを明らかにした。

彼らの集まっている所から、海を隔てたかなたは人跡まれなバシャンの地で、その荒涼とした峡谷と樹木のおい繁った山々とは、長い間ありとあらゆる犯罪者が好んだかくれ場であった。そこで行われた強盗や殺人の知らせは、民衆の心になまなましく、これら悪を働く者たちの告発に熱心な人が多かった。ところが同時に、彼ら自身も激しやすく論争好きであった。彼らはローマの圧政者に最もはげしい憎しみを抱き、他のすべての民族や、また自国民でも、彼らの考えに全面的に同調しない人々を憎んだりさげすんだりするのは、自由だと思っていた。彼らはこのすべてにおいて、「あなたは殺してはならない」と言明している律法を犯していた。

憎悪と復讐の精神はサタンから出、この精神がサタンに神のみ子を殺害させたのである。だれでも悪意や冷酷な心を抱く者は、これと同じ精神を抱いているのであって、[1147] その実は死に至らせるものである。種の中に草木がすでに包まれているように、復讐心の中に悪の行為が包まれている。「すべて兄弟を憎む者は人殺しであり、人殺しはすべて、そのうちに永遠のいのちをとどめてはいない」（ヨハネ3：15）。

「兄弟にむかって愚か者と言う者は、議会に引きわたされるであろう」（マタイ5：22）。神は、わたしたちのあがないのためにみ子を賜うことによって、人間一人一人の魂をどんなに高く見ておられるかをお示しになった。神は、他人をさげすんでうわさする自由を、だれにも与えておられない。わたしたちは、周囲の人々に欠陥や弱点を見るであろうが、神は、すべての魂は自分のものである――すなわち創造によって自分のものであることと、キリストの尊い血をもって買いとられたゆえに、二重に自分のものである――と主張なさる。人はすべて、神のみかたちにかたどって創造されたのであって、どんなに堕落した者であっても大切にやさしく扱わなければならない。キリストが生命をささげられたところの1人の魂を、さげすんで語ったことばに対してさえ、神はその責任を問われるのである。

「いったい、あなたを偉くしているのは、だれなのかあなたの持っているもので、もらっていないものがあるか。もしもらっているなら、なぜもらっていないもののように誇るのか」（コリント4：7）。「他人の僕をさばくあなたは、いったい、何者であるか。彼が立つのも倒れるのも、その主人によるのである」（ローマ14：4）。

「また、ばか者と言う者は、地獄の火に投げ込まれるであろう」（マタイ5：22）。旧約聖書では、「ばか者（fool）」ということばは背信者、すなわち悪に全くふけってしまった者を指すのに使われている。だれでも兄弟を背信者として、あるいは神をさげすむ者として非難する人は、その人自身が、同じ非難に値するとイエスは言われる。

キリストご自身も、モーセの死体についてサタンと論じ争われた時、「相手をののしりさばくこと」はあえてなさらなかった（ユダ9）。告発は悪魔の武器であるから、もしそうなさっていたら、キリストは、サタンの領域にご自分を置かれたことになる。サタンは聖書の中で、「われらの兄弟らを訴える者」と呼ばれている（黙示録12：10）。イエスは、サタンの武器は一切用いようとはなさらなかった。ただ「主がおまえを戒めて下さるように」と仰せになっただけである（ユダ9）。

これはわたしたちのための模範である。わたしたちは、キリストに敵対する者との争いにまき込まれても、報復の

精神をいだいて口を開いたり、ののしりさばくように聞こえる言葉を語ったりしてはならない。神の代弁者として立つ者は、天の君でさえ、サタンと争った時に避けてお用いにならなかったようなことばを語ってはならない。審判と宣告のわざは、神にゆだねるべきである。

「兄弟と和解し……なさい」

（マタイ5：24）

神の愛は否定一方のものではなく、むしろ積極的、活動的な原則であり、他人を祝福するためにたえず流れ出る生きた泉である。キリストの愛が心に宿っているなら、わたしたちは同胞に対して、憎しみを抱かないだけではなく、どんな点でも彼らに対する愛をあらわそうと努めるのである。

イエスは、「祭壇に供え物をささげようとする場合、兄弟が自分に対して何かうらみをいだいていることを、そこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に残しておき、まず行ってその兄弟と和解し、それから帰ってきて、供え物をささげることにしなさい」と仰せになった（マタイ5：23、24）。犠牲のささげ物は、それをささげる者がキリストによって、神の憐れみと愛にあずかる者となったという信仰を表していた。しかし、自分では愛に欠けた精神をほしいままにしながら、神のゆるしの愛に対する信仰を表明することは、おかしなことである。

神に仕えると告白する者が、兄弟に不正を働いたり傷つけたりする時、彼はその兄弟に、神のご品性を正しくあらわしていない。そして、神と調和するためにはその悪を告白し、それを罪と認めなければならない。兄弟から受けた仕打ちは、自分が兄弟にしたことよりももっと悪いことであったかも知れないが、そうだからと言って、それがわたしたちの責任を軽くするわけではない。神のみ前に出た時に、だれかが自分にうらみを持っていることを思い出したなら、祈りや感謝の供え物や任意のささげ物をそのまま残して、不和の関係にあるその兄弟のもとに行き、謙そんに罪を告白してゆるしを請わなくてはいけない。

[1148]

何か兄弟からだまし取ったり傷つけたりしたなら、そのつぐないをしなければならない。もし、知らずに偽ったあ

かしをたてたり、兄弟のことばを誤って伝えたり、あるいは何らかの点で兄弟の感化力をそこねたなら、それを話した人々の所へ行って、誤って述べたために、兄弟を中傷することになった言葉をすべて取り消すべきである。

もし、兄弟どうしの間の争いを他の人たちの前に持ち出さず、クリスチャンの愛の精神をもってお圧いの間で率直に話し合ったなら、どれほど多くの不幸を招かないで済むことだろう。多くの人々を傷つける不幸なできごとの根が、どんなにか多く絶やされ、キリストに従う者たちはどんなにか親しくやさしく、キリストの愛のうちに結び合うことだろう。

「だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫したのである」

（マタイ5：28）

ユダヤ人は自分たちの道徳を誇り、異教徒の情欲的習慣を憎々しく眺めていた。ローマ帝国の支配によって、パレスチナに送られてきたローマの軍人たちは、ユダヤ人にとって、たえず怒りの対象であった、それはこうした外国人とともに、異教の風習やみだらなことや放蕩などが流れ込んできたからである。カペナウムでは、ローマの軍人が、はでな身なりの女をつれて広場や遊歩場によく姿をあらわした。また、彼らの遊覧船が静かな水の上に浮かんで、歓楽のどよめきが湖の静けさを破ってわき起こったりしたのである。群衆はこうした者へのきびしい宣告を、イエスから聞くものと期待していた。これに反して、彼らが自分たちの心の邪悪さをあらわにする言葉を聞いた時、彼らはどんなにか驚いたことであろう。

邪悪な思いを愛してこれを心に抱く時、それはどんなにひそかな思いであっても、罪が依然として心を支配していることを示すものだと、イエスは言われた。魂はまだ、苦い胆汁があり、不義の縄目がからみついている。みだらな場面を思って楽しむ者、汚れた思いをいだき、色情をもって眺めたりしている者は、それがついには、あからさまな罪となってあらわれ、はずかしめと心をかき裂く嘆きを味わって、自分の心の隅にひそめていた悪の正体をみることになる。人が嘆かわしい罪に陥る時のその誘惑が、そこで

明らかにされた悪を作り出すのではない、それはただ、心の中に秘め隠されていたものを発達させて、明らかにするに過ぎない。それは、その心に思うように、その人となりもまたそのようなのである。というのは、「命の泉」は、心から流れ出るからである（箴言4：23）。

「もしあなたの右の手が罪を犯させるなら、それを切って捨てなさい」

（マタイ5：30）

病気が体中に広まって生命を奪うのを防ぐためには、人は、右手であっても切り捨てるだろう。まして、魂の生命を危険にさらすものを、進んで放棄するのは当然のことである。

サタンに捕らわれ堕落していた魂は、福音によってあがなわれ、神の子らの輝かしい自由にあずかるはずである。神のみ旨は、罪の不可避の結果である苦しみから解放することだけではなく、罪そのものから救うことである。汚れてゆがんだ魂も変えられてきよくなり、「われらの神、主の恵み」を身につけて、「御子のかたちに似たもの」となることができる（詩篇90：17、ローマ8：29）。「目がまだ見ず耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」（コリント2：9）。神のみかたちに回復された、人類の到達
[1149] することのできる輝かしい運命は、永遠のみが明らかにすることができるのである。

わたしたちが、この高い理想に達するためには、魂をつまずかせるものは犠牲にしなければならない。わたしたちが罪の支配下にあるのは、意志による。この意志を服従させることが、目を抜き出したり、手を切りとったりするという表現であらわされているのである。意志を神に従わせることは、人生を障害をもった体で過ごすかのように思えることがよくある。しかしこのようにして、命に入れるのであれば、体に傷をもち、障害をもつ者となるほうがよいのだとキリストは言われる。不幸と見えることが、何よりの幸福への門口なのである。

神は生命の泉であるから、わたしたちは神と交わっている時だけ、生命を持つことができる。神から離れても、し

ばらくは生存することができるが、そこには生命がない。「みだらな生活をしているやもめは、生けるしかばねにすぎない」（テモテ5：6）。わたしたちの意志を神に従わせてはじめて、神はわたしたちに、生命をわけ与えることがおできになる。自己放棄により、神の生命を受けてはじめて、わたしの指摘したこれらの罪に、打ち勝つことができるのであるとイエスは仰せになった。罪を心の中にひめて、人の目から隠すことはできても、神のみ前にはどうして立つことができよう。

自我に固執して、意志を神に従わせようとしないなら、あなたは死を選んでいるのである。罪は、それがどこに見いだされようとも、神は焼き尽くす火である。もしあなたが罪を選び、罪から離れようとしないなら、罪を焼き尽くす神の臨在が、必ずあなたを焼き尽くすだろう。

自己を神にささげることには犠牲が伴うが、これは、より高いものを得るために、より低いものを犠牲にすることであり、霊的なもののために世俗的なものを犠牲にすることであり、永遠のもののために滅びゆくものを犠牲にすることである。神はわたしたちの意志を、破壊しようとは考えておられない。神がわたしたちにさせようとしておられることは、わたしたちの意志の働きを通してはじめて行うことができるのである。意志は神にささげられなければならないが、それは、練りきよめられ、神の思いと一つに結びついたその意志を、わたしたちが再び受けて、神がご自分の愛と大能の潮流を、わたしたちを通して注ぐことができるようになるためである。強情でわがままな心には、この降伏がどんなにつらく苦しいものに思われても、そうするほうが「あなたにとって益である」（マタイ5：30）。

ヤコブはかたわとなり、どうすることもできなくなり、契約の天使の胸にすがってはじめて信仰の勝利を知り、神の王子という称号を受けることができた。彼が「そのももゆえに歩くのが不自由になっていた」時に、武器をたずさえたエサウの一隊は彼の前にしずめられた（創世記32：31）。そして、あの輝かしい王位の継承者パロは、ぬかずいて彼の祝福を懇願した。同様に、「救いの君」は「苦難をとおして」全うされ（ヘブル2：10）、また信仰の子らは「弱いものは強くされ」「他国の軍を退かせた」（ヘブル11：34）。そのように、「足の弱い者

（は）……獲物を取り」（イザヤ33：23）、弱い者は「ダビデのように」、また「ダビデの家は……主の使のようになる」のである（ゼカリヤ12：8）。

「夫がその妻を出すのはさしつかえないでしょうか」

（マタイ19：3）

ユダヤ人の間では、男は、ごくささいなことで妻を出すことが許されており、出された妻は、再び結婚してもかまわなかった。この習慣から、非常な不幸と罪が生じた。イエスは山上の垂訓で、結婚の誓約に対する不誠実以外のことでは、結婚のきずなが解消されないことを言明された。「だれでも不品行以外の理由で自分の妻を出す者は、姦淫を行わせるのである。また出された女をめとる者も、姦淫を行うのである」とイエスは仰せになった（マタイ5：32）。

また、後にパリサイ人が、離婚の合法性について質問した時、イエスは創造において制定されたものとして、結婚の制度に彼らの注意を向けられた。「モーセはあなたがたの心が、かたくななので、妻を出すことを許したのだが、初めからそうではなかった」とイエスは言われた（マタイ19：8）。イエスは、すべてのものが「はなはだよかった」と神が仰せになった祝福されたエデンの園の時代に、彼らを注目させられた。神の栄光と人間の幸福のための2つの制度、すなわち結婚と安息日の起源がここにあった。その時、創造主は聖なる2人に結婚の契りを結ばせて、「人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである」と仰せになった（創世記2：24）。創造主は、世の終わりに至るまでのすべてのアダムの子らのために、結婚の律法を宣言された。永遠の父なる神ご自身がよしと宣言されたのは、人間にとって最高の祝福と発達の律法であった。

[1150]

人類の保管にゆだねられた、その他のあらゆる良い神の賜物と同様に、結婚も罪によってゆがめられたが、その純潔と美しさを回復するのが福音の目的である。旧約聖書においても新約聖書においても、結婚の関係は、キリストとその民、すなわちカルバリーの価を払って買いとり、あがなわれた者たちとの間のやさしく聖なる結合をあらわすために用いられている。キリストはこう言っておられる、

「恐れてはならない。……あなたを造られた者はあなたの夫であって、その名は万軍の主、あなたをあがなわれる者は、イスラエルの聖者であ」る（イザヤ54：4、5）。「主は言われる、背信の子らよ、帰れ。わたしはあなたがたの夫だからである」（エレミヤ3：14）。雅歌では、花嫁がこう言うのが聞かれる、「わが愛する者はわたしのもの、わたしは彼のもの」。そして彼女にとって「万人にぬきんで」た彼は、ご自分の選んだ者にこう言われる、「わが愛する者よ、あなたはことごとく美しく、少しのきずもない」（雅歌2：16、5：10、4：7）。

後に、使徒パウロは、エペソのクリスチャンに書き送った中で、キリストが教会の頭であり、体なる教会の救い主であるのと同じく、夫は妻の頭として、妻を守り、家族を一つに結び合わせるきずなとなるように、主が定められたことを述べた。そこでパウロはこう言っているのである、「教会がキリストに仕えるように、妻もすべてのことにおいて、夫に仕えるべきである、夫たる者よ。キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたように、妻を愛しなさい。キリストがそうなさったのは、水で洗うことにより、ことばによって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、また、しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎えるためである。それと同じく、夫も自分の妻を……愛さねばならない」（エペソ5：2428）。

キリストの恵みが、そしてこれのみが、この制度を神の意図された通りのもの、すなわち、人類の祝福と向上の手段となすことができる。こうして人間の家族は、その一致と平和と愛によって、天の家族を代表することができるのである。

今日も、キリストの時代と同様、社会のありさまは、この神聖な関係に関する天の理想とは、あまりにもかけはなれた状態である。しかしながら、交わりと喜びを望んでいたにもかかわらず、苦さと失望を経験した人々に、キリストの福音は慰めと平安を与える。キリストのみたまによって与えられる忍耐と柔和が、苦い運命を甘く楽しいものにするのである。キリストが宿っている心は、キリストの愛に十分に満ち足りているので、自己に同情や関心を引こうとあせることがない。また、魂を神にささげているため

に、人間の知恵の及ばないことを、神の知恵がなしとげてくださる神の恵みの啓示によって、かつては互いに離れて無関心であった人々の心が、地上のいかなるきずなよりも強く永続的なきずなによって結ばれる。これこそ、試練にも耐えてゆくことのできる黄金の愛のきずなである。

「いっさい誓ってはならない」

（マタイ5：34）

「天をさして誓うな。そこは神の御座であるから。また地をさして誓うな。そこは神の足台であるから。またエルサレムをさして誓うな。それは『大王の都』であるから。[1151] また、自分の頭をさして誓うな。あなたは髪の毛一すじさえ、白くも黒くもすることができない」からであると、この戒めの理由が説明されている（マタイ5：3436）。

すべては神から出ている。わたしたちが持っているもので、受けなかったものはない。いや、そればかりでなく、わたしたちが持っているもので、キリストの血で買いとられていないものはない。わたしたちの所有する一切のものは、十字架の印が押され、とうてい評価することができない尊い血潮で買われて、わたしたちのところにくるのである。なぜなら、それは神の生命だからである。だから、あたかも自分のものであるかのように、あるものをさして、わたしたちが、自分の約束を果たすことを誓う権利のあるものは何一つない。

ユダヤ人は、第三の戒めは、神のみ名を冒とく的に用いることを禁じたものであると理解していたが、自分たちは、ほかの誓いの言葉は自由に川いてよいと考えていた。誓いを立てるのは、彼らの間で普通のことであった。偽って誓うことはモーセを通して禁じられていたが、彼らは、誓いによって課せられる義務から免れるためにいろいろな工夫をこらしていた。彼らは巧みに律法の網の目を避けて、のがれることのできるかぎり、真に冒とく的なことをあえて行うのを恐れはしなかったし、偽りの誓いからしりごみすることもしなかった。

イエスは、彼らの誓いの習慣は、神の戒めを犯すものだと言って、その風習を非難された。しかし救い王は、語ることがすべて真実で、真実以外の何物でもないこと

を、厳粛に神にかけて誓う裁判の際の誓いを禁じられたのではない。イエスご自身も、サンヒドリンの前で裁判を受けられた時、誓いのもとに証言することを拒まれなかった。大祭司が「あなたは神の子キリストなのかどうか、生ける神に誓ってわれわれに答えよ」と言うと、イエスは「あなたの言うとおりである」とお答えになった（マタイ26：63、64）、もしキリストが山上の嘱訓において、裁判の誓いを非難されたのであれば、ご自分がさばかれているこの時に、大祭司をとがめて、弟子たちのためにご自分の教えを実行なさったことであろう。

仲間を欺くことには恐れを感じないが、自分の造り主にいつわりを言うのは恐ろしいことであると教えられ、また、聖霊によってその印象を強く与えられてきた者が非常に多くいる。誓いを立てる時には、人の前のみならず、神の前にもあかしを立てているのであって、もし偽りのあかしを立てるなら、それは心を読みとり、事実を正確に知っておられるお方にそれを言うのだと、彼らは感じさせられた。この罪には恐ろしい審判が続くと知ることは、彼らを抑制する力があるのである。

しかし終始一貫して、誓ってあかしすることのできる者がいるとすれば、それはクリスチャンである。クリスチャンは、わたしたちが言い開きをしなくてはならない神の御目には、すべての心の思いがあからさまであることを知って、たえず神のみ前にいるかのように生活するのである。そして、誓いを立てるように法的に求められた時には、自分の言うことは真実であって、真実以外の何ものでもないことの証人となってくださるように、神に訴えるのは正しいことである。

イエスはさらに進んで、誓いを立てることが不必要になる原理を規定なさった。イエスは、真実そのものが話の法則となるべきことをお教えになった。「あなたがたの言葉は、ただ、しかり、しかり、否、否、であるべきだ。それ以上に出ることは、悪から来るのである」（マタイ5：37）。

このこ言葉は、冒とくに近い無意味な言葉や、ののしりの言葉をすべて非難している。また、一般社会や実業界の常である心にもないお世辞や、真実の回避や、へつらいの言葉や、誇張や、商売上のうそなどを非難している。この

言葉はまた、自分を実際以上に見せかけようとしたり、本心を伝えない言葉を口にしたりする者は、誠実とは言えないことを教えている。

もしキリストのこの言葉に注意が払われるなら、悪意のある推量や不親切な批判はひかえることであろう。というのは、一体だれが、他人の行動や動機について語る時に、真実そのものを語っているという確信が持てようか。高慢や怒りや恨みなどが、異なった印象を与えることがどんなに多いことだろう。ちょっとした目つきや一つの言葉、あるいは声の抑揚でさえ、偽りをにおわすことができるのである。事実でさえ、言い方によっては、誤った印象を与えるのである。真実「以上に出ることは、悪から来るのである」。 [1152]

クリスチャンのすることはすべて、日光のように透明でなければならない。真実は神からのものである。欺瞞は、その無数の形のどの一つをとっても、みなサタンからのものである。そしてだれでも、いかなる点においても、公正な真実から離れる者は、悪魔の手中に自分を売り渡しているのである。とはいうものの、真実そのものを語るのは容易なことではない。真実を知らなければ、真実を語ることはできない。しかし先入感や偏見や不完全な知識や誤った判断などのために、処理しなければならない事柄の正しい理解が、どんなにさまたげられていることだろう。わたしたちは、真理なるお方によってたえず心が導かれないかぎり、真実を語ることはできない。

キリストは使徒パウロを通して、「いつも……やさしい言葉を使いなさい」「悪い言葉をいっさい、あなたがたの口から出してはいけない。必要があれば、人の徳を高めるのに役立つような言葉を語って、聞いている者の益になるようにしなさい」と命じておられる（コロサイ4：6、エペソ4：29）。こうした聖句に照らし合わせると、キリストの山上の言葉は、冗談やつまらぬ話やみだらな会話を非難していると考えられる。キリストのお言葉は、わたしたちの言葉が真実なものであるばかりでなく、きよいものでもあるべきだと要求しているのである。

キリストに学んだ者は、「実を結ばないやみのわざに加わらない」（エペソ5：11）。彼らは、「口には偽りがな」い聖なる者たちとの交わりのために準備をしているの

で（黙示録14：5）、その生活と同じように言葉も、単純で率直で真実なのである。

「悪人に手向かうな。もし、だれかがあなたの右の頬を打つなら、ほかの頬をも向けてやりなさい」

（マタイ5：39）

ユダヤ人の立腹は、ローマの兵隊たちとの接触からたえず生じていた。ユダヤとガリラヤの各地に部隊が駐留しており、それによってユダヤ人は、民族としての自分たちの零落ぶりを思わせられていた。彼らは苦々しく心に思いながら、高くかなでられるラッパの音を聞き、ローマの旗の下に集まって、ローマの権力を象徴するこの旗に敬礼をささげる兵隊たちを眺めていた。ユダヤ国民とローマ兵士との衝突はひんぱんに起こり、このことが民衆の憎悪に火をつけた。ローマの役人は、兵卒を護衛にしてここかしこと急ぐ時には、よく、畑仕事をしているユダヤの農夫を捕らえては、山道で強制的に荷を運ばせたり、必要な労役を提供させたりした。これはローマの法律と風習に従ったことであって、この要求に反抗すれば、詰責と残酷な仕打ちを受けるだけであった、ローマのくびきを振り捨てたいという願いが、日一日と、ユダヤ人の心に深まっていった。ことに、大胆で荒っぽいガリラヤ人の間には、反抗の精神がみなぎっていた。国境の町カペナウムはローマ駐留軍の所在地で、イエスが教えておられる間にも兵士の一隊が目について、聴衆はイスラエルの屈辱を苦々しく思い起こすのであった。人々は、この方こそローマの誇りをへしおるお方であると期待して、熱をこめてキリストを見た。するとイエスは、悲しげに、目前の人々の顔を見つめられる。イエスは彼らのけわしい顔つきに、復讐の精神がありありとあらわれているのをごらんになり、人々が圧制者たちを打ちくだく権力を、どんなに期待しているかを悟られる。イエスは悲しげに、彼らにこうお命じになる。「悪人に手向かうな。もし、だれかがあなたの右の頬を打つなら、ほかの頬をも向けてやりなさい。」

この言葉は、旧約聖書の教えの反復にすぎない。「目には目、歯には歯」という規定がモーセを通して与えられた律法の一項目であったのは事実だが、しかしこれは民法で

あった（レビ24：20）。「『わたしが悪に報いる』とぼってはならない」「『彼がわたしにしたように、わたしも彼にしよう……』と言ってはならない」「あなたのあだが
[1153] 倒れるとき楽しんではな らない」「もしあなたのあだが飢えているならば、パンを与えて食べさせ、もしかわいているならば水を与えて飲ませよ」という主の言葉が、彼らにはあったのだから、だれも復讐を正当化することはできなかった（箴言20：22、24：29、17、25：21）。

イエスの地上の一生は、この原則を具体的にあらわしたものであった。救い主が天の家郷を後にされたのは、敵にいのちのパンを与えるためであった。ゆりかごから墓場まで、中傷と迫害の連続であったが、イエスからはただ、寛大な愛があらわされるばかりであった。預言者イザヤを通してイエスはこう言っておられる、「わたしを打つ者に、わたしの背をまかせ、わたしのひげを抜く者に、わたしのほおをまかせ、恥とつばきとを避けるために、顔をかくさなかった」（イザヤ50：6）。「彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のように、また毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかった」（イザヤ53：7）。そしてカルバリーの十字架からは、幾世紀後の今日まで、ご自分を十字架にかける者たちのための祈りと、死にゆく強盗に与えられた望みの言葉とが伝わってくる。

天父のご臨在がキリストを取り囲んでいたので、無限の愛なる神が世の祝福のためにお許しになること以外は、何一つキリストの身にふりかかってこなかった。これが、キリストの慰めの源であった。わたしたちにおいてもそうである。キリストのみたまに満たされた人は、キリストのうちに宿っている。彼を狙う打撃は、ご臨在をもって囲んでいてくださるキリストに当たる。彼に起こることはみな、キリストを経てくるものである。キリストが彼の守り手であるから、彼は自分で悪に手向かう必要がない。主のゆるしがなければ何ものも彼に触れることはできない。そして許されることはみな、相共に働いて彼を愛する者たちの益となるのである。

「あなたを訴えて、下着を取ろうとする者には、上着をも与えなさい。もし、だれかが、あなたをしいて1マイル

行かせようとするなら、その人と共に2マイル行きなさい」（マタイ5：40、41）。

イエスは弟子たちに、権威の座についている者の要求に反抗するのではなく、かえって求められる以上のことをするように命じられた。彼らはまた、国家の法律が要求する以上のことであっても、できる限り、義務をすべて遂行すべきことを教えられた。モーセを通して与えられた律法は、貧しい者を慈愛深くかえりみることを課していた。貧しい者が負債の質物、すなわち担保として上着を与える場合、債権者は家に入ってそれを取ることは許されなかった。彼はその質物が持ってこられるのを、通りで待たねばならなかった。そしてどんな事情であれ、その質物は、日暮れには持ち主に返さなければならなかった（申命記24：1013参照）。キリストの時代には、この憐れみの規定はほとんどかえりみられていなかった。だがイエスは弟子たちに、たとえモーセの律法が認める以上のことが要求されても、法廷の判決には服するように教えられた。衣服の一部が要求されても、彼らは従うべきであった。債権者に彼の分を与えるのは無論のこと、もし必要なら法廷が定めた以上に、提供しなければならないのである。「あなたを訴えて、下着を取ろうとする者には、上着をも与えなさい」また、使いの兵士がともに1マイル行くように要求するなら、2マイル行きなさい、とイエスは言われた（マタイ5：40）。

イエスはさらに続けて、「求める者には与え、借りようとする者を断るな」と仰せになった（マタイ5：42）。同じ教えは、モーセを通して与えられていた、「貧しい兄弟にむかって、心をかたくなにしてはならない。また手を閉じてはならない。必ず彼に手を開いて、その必要とする物を貸し与え、乏しいのを補わなければならない」（申命記15：7、8）。この聖句が、救い主のことばの意味を明らかにしている。キリストは、施しを求めるすべての者に、無分別に与えることを教えておられるのではなく、「その必要とする物を貸し与えよ」と言っておられるのである。そして、わたしたちは「何も当てにしないで貸（す）」のであるから、これは貸すというよりもむしろ与えるのである（ルカ6：35）。

「敵を愛（せ）」 [1154]

（マタイ5：44）

「悪人に手向かうな」という救い主の教えは、復讐心に燃えるユダヤ人には受け取りがたい言葉であったため、彼らは互いにつぶやき合った。しかしイエスはここで、一層強い言葉を述べられた。

「『隣り人を愛し、敵を憎め』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、迫害する者のために祈れ。こうして、天にいますあなたがたの父の子となるためである」（マタイ5：4345）。

これが律法の精神であって、ラビたちはこれを、冷酷できびしい不当な要求のように誤って解釈していたのであった。彼らは、自分たちがほかの者よりすぐれていて、イスラエル人であるために、特別な神の恵みを受ける資格があると考えていた。だが彼らが軽べつする取税人や罪人よりも、幾分でも高い動機に動かされているならば当然、寛大な愛の精神をあらわすはずであるとイエスは指摘された。

イエスは宇宙の支配者である神を、「われらの父」という新しい名前で聴衆にさし示された。イエスは、神がどのようにやさしく人々に愛情を注いでおられるかを、彼らが理解することをお望みになった。神は失われた魂の一人一人を心にとめ、「父がその子供をあわれむように、主はおのれを恐れる者をあわれまれる」ことを、イエスはお教えになっている（詩篇103：13）。このような神の観念は、聖書の宗教以外でどの宗教も世に与えたことがなかった。異教は、陣を、愛の対象としてではなく、恐れの対象として見るように教える。つまり、子供らに愛の賜物を惜しみなくお与えになる父としてではなく、犠牲をささげることによってなだめられる、悪意をもった神であると示すのである。イスラエルの民でさえ、神に関する預言者の尊い教えに盲目になっていて、父のような神の愛のこの啓示は、この世にとって初めての主題であり、新しい賜物のように思えたのであった。

神は、神に仕える者――ユダヤ人の考えに従えば、ラビの要求事項をみたす者――を愛されるのであって、この世のそのほかの者はみな、神の不興とのろいのもとにあるのだと、ユダヤ人は考えていた。しかしそうではない、世

界全体は、悪しき者も良き者も、ともに神の愛の光の中にあるのだと、イエスは言われた。神は「悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして」くださっているのであるから、この真理は自然界からも学ぶことができたわけである（マタイ5：45）。

年々地球が大地の産物をうみだし、太陽のまわりをまわるのは、その固有の力によるのではない。神のみ手が遊星を導き、正しい位置に保って、天を秩序正しく運行させているのである。夏と冬、種まき時と刈り入れ時、昼と夜がそれぞれ規則正しくめぐるのも、神の力によるのである。花が咲き、葉が繁り、草木が繁茂するのは神の言葉によるのである。わたしたちのもっている良いものは、日の光も、雨も、食べ物も、命の一瞬一瞬も、すべて愛の賜物である。

わたしたちがまだ人を愛する心がなく、品性に美しさがなく、「人に憎まれ、互に憎み合っていた」時に、天の父は、わたしたちに憐れみをかけてくださった。「わたしたちの救主なる神の慈悲と博愛とが現れたとき、わたしたちの行った義のわざによってではなく、ただ神のあわれみによって……わたしたちは救われたのである」（テトス3：36）。神の愛を受けいれる時、その愛は、わたしたちをもそれと同じように、自分を喜ばせる者ばかりでなく、どんなにひどい欠点とあやまちと罪の中にいる者にもやさしく親切を尽くす者とする。

神の子供とは、神のこ性質を受け継いでいる者である。わたしたちが神の家族の一員であることを証明するものは、この世の地位でも生まれでも国籍でも、あるいは宗教上の恩典でもなく、それは、愛——全人類を包容する愛——である。罪人でさえ、その心が神の聖霊に対して全く閉ざされているのでなければ、親切には応じてくる。彼らは、憎まれれば憎むが、愛されればまた愛することもできるのである、しかし、憎しみに対して愛で報いるのは、神の聖霊だけである。感謝の気持ちのない者や悪しき者に親切を尽くし、何も当てにしないで善をなすこと——これが [1155]
天の王家の紋章であり、いと高き者の子らがその高い身分を明らかにする確かなしるしである。

「それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」

（マタイ5：48）

「それだから」という言葉は、今まで述べてきた事の結論を意味する。イエスは聴衆に、神のゆるがない憐れみと愛を語ってこられて、それだからあなたがたも完全な者になれと命じておられる。天の父は、「恩を知らぬ者にも悪人にも、なさけ深い」お方であって、あなたを高めるために身を低くなさったのである（ルカ6：35）。それだから、あなたの品性も神と似たものとなって、人々とみ使いの前に傷なく立てるのだ、とイエスは仰せになった。

永遠の生命を受ける条件は、恵みのもとにあってもエデンの時と同様で、完全な義、神との調和、神の律法の原則への完全な一致である。旧約聖書に示されている品性の標準は、新約聖書に示されているのと同じである。この標準は、わたしたちの到達できないものではない。神のお与えになる命令や指図にはみな約束、しかも非常に積極的な約束が含まれていて、それがその命令の基礎となっている。神は、わたしたちが神に似た者となることができるように、備えをしてくださっている。そして神は、人が曲がった意志をさしはさんで神の恵みをむなしくしない限り、これをなしとげてくださる。

神は言葉に表現できない愛をもって、わたしたちを愛してくださっている。わたしたちが人知を越えたこの愛の長さ、広さ、深さ、高さをいくぶんでも理解する時に、わたしたちの愛は、神に向かって目覚める。人を引きつけるキリストの美しさがあらわされることによって、また、わたしたちがまだ罪人であった時にわたしたちにあらわされたその愛を知ることによって、かたくなな心は溶かされ、和らげられ、罪人は変えられて天の子となる。神は、強制な手段はお用いにならない。愛こそ、人の心から罪を追放するために、神がお用いになる力である。愛によって神は、高慢を謙そんに、敵意と不信を愛と信仰に変えられる。

ユダヤ人は自分自身の努力によって完全の域に達しようと営々刻苦してきたが、ついにそれができなかった。彼らの義では、決して天のみ国に入れないことを、キリストは

すでに語っておられた。今キリストは彼らに、天に入るすべての者のもつ義の性格を指摘なさる。山上の垂訓のあいだずっと、その実について語ってこられたが、今は一言をもって、その根源と本質とを指摘なさる。すなわち、神が完全であられるように、あなたがたも完全な者となれ、と仰せになったのである。律法は、神のご品性の写しにすぎない。あなたの天の父のうちに、神の政府の基礎である原則が完全にあらわれているのを見てほしい。

神は愛である。太陽の光のように、愛と光と喜びは、神からすべての被造物に流れ出る。与えることが神のご性格である。神の生命そのものが、無我の愛のほとばしりである。神はご自分が完全であると同様に、わたしたちも完全になるように——と仰せられる。神が宇宙にとって光と祝福の中心であられるように、わたしたちは、わたしたちの小さな範囲でそうならなければならない。わたしたちは、神の愛の光がわたしたちを照らし、その輝きを反映するのでなければ、自分では何も持っていない。神が神の領域で完全であられるように、わたしたちは自分の領域で完全な者となることができる。

イエスは、あなたがたの父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさいと仰せになった。もし神の子供であれば、あなたがたは神の性質を受けついでおり、従って神に似た者とならざるを得ない。子供はみな、父親の生命によって生きる。あなたがたは、神の子供であって、その聖霊によって生まれたのであれば、神の生命によって生きる。キリストには、「満ちみちているいっさいの神の徳が、かたちをとって宿って」いる（コロサイ2：9）。そしてイエスの生命は「わたしたちの死ぬべき肉体に」あらわされる（Ⅱコリント4：11）。あなたの中にあるこの生命が、イエスに生み出したのと同じ品性を生み [1156]
出し、イエスにあらわしたのと同じわざをあらわす。こうしてあなたは、主の律法のすべての戒めに調和するようになる。「主のおきては完全であって、魂を生きかえらせ」るからである（詩篇19：7）。愛を通して「律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされる」のである（ローマ8：4）。

奉仕の真実の動機

「自分の義を、見られるために人の前で行わないように、注意しなさい」

（マタイ6：1）

キリストの山上の言葉は、その生活によって無言のうちに教えてこられたことの表現であったが、人々はそれを理解することができなかった。イエスがこれほどの偉大な力を持ちながら、どうして最高の幸福と考えるものを獲得するためにそれをお用いにならないのか、彼らは理解することができなかった。彼らの精神と動機と方法は、イエスのものとは相反していた、彼らは細心の注意を払って律法を尊ぶと言いながら、自己賞揚が彼らの求めたほんとうの目的であった。だからキリストは、自己を愛する者は律法にそむく者であることを、彼らに明らかにしようとされたのである。

しかし、パリサイ人の抱いていた原則は、どの時代の人間も持っている特質である。パリサイ的精神は人間性の持つ精神である。だから救い主が、ご自分の精神や方法とラビのそれとを対照して示された時、その教えはどの時代の国民にも同じくあてはまるものであった。

キリストの時代にパリサイ人は、善行の報酬とみなされていたこの世の栄誉と繁栄とを獲得するために、たえず天の神の愛顧を得ようと努めていた。同時に彼らは、人々の注意を引き、聖人であるという評判を得るために、人々の前で慈善行為を見せびらかしていた。

神はこのような奉仕をお認めにならないこと、また、彼らが求めてやまなかった人々のへつらいと賞賛、それだけが彼らの受ける唯一の報いであるとイエスは言われて、彼らの虚栄心を調責された。

「あなたは施しをする場合、右の手のしていることを左の手に知らせるな。それは、あなたのする施しが隠れてい

るためである。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう」と、イエスは仰せになった（マタイ6：3、4）。

こう言われたからといって、イエスは、親切な行為はいつも隠しておくべきだと教えられたのではない。使徒パウロは聖霊に感じて手紙を書き送り、マケドニヤのクリスチャンの物惜しみしない自己犠牲の精神を隠すことをせず、キリストが彼らのうちにあって働いた恵みを述べたのであったが、こうしてほかの人々も、同じ精神に満たされたのである。彼はコリントの教会に書き送ったときにも、「あなたがたの熱心は、多くの人を奮起させた」と述べている（Ⅱコリント9：2）。

キリストご自身のことばが、その意味を明らかにしている一すなわち、慈善行為においては、その目的が人々から賞賛や栄誉を得ることであってはならないという意味である。真の敬虔は、決して誇示しよりとは努めない。賞賛とへつらいの言葉を願い、それにおぼれてしまう者は、ただ名目だけのクリスチヤンである。

キリストに従う者は、その善行によってほまれを自己に帰すのではなく、彼らに善行を行う恵みと力を与えたお方に帰さなければならない。よきわざがなし遂げられるのはすべて聖霊によるのであって、聖霊はそれを受ける人間の栄えのためではなくて、その与え主なる神に栄えを帰するために授けられる。キリストの光が魂の中で輝く時、くちびるは神への賛美と感謝に満たされる。あなたは自分の祈り、自分の義務を果たしたこと、自分の博愛、自分の自己犠牲などは 考えもしなければ、話題にもしない。イエスが [1157]
ますます大きくなり、自己は隠され、キリストがすべてのすべてとなるのである。

わたしたちは、自分の善行を示すためではなく、苦しんでいる人々への同情と愛をもって、真心から与えるのでなければならない。純粋な目的、心からの真の親切が、天によって高く評価される動機である。誠実のこもった心を、神はオフルのこがねよりも尊いものとみなされる。

わたしたちは報いなど考えずただ奉仕のことを思うべきである。しかし、この精神をもって行う親切は、必ずその報いを受ける。「隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう」（マタイ6：4）。神ご自身が、

ほかのすべての報いを包含する大きな報いであるのは事実だが、魂はその品性が神と同化してはじめて、神を受けてその交わりを楽しむことができるのである。同類のみが、同類を理解することができる。神がご自身をわたしたちにお与えになるのは、人類への奉仕のために自分を神にささげる時である。

自分の心と生活のうちに、神の祝福の流れが他の人々に流れ出るための場所を与える者はだれでも、その人自身、豊かな報いを受ける。山の流れが海に達するための通路を提供する丘や平野は、それによって少しの損害もこうむらない。与えたものは、百倍にもなって返ってくる。さざめき流れる小川は、そのあとに緑と豊かな実りの賜物を残してくれるからである。岸辺はあざやかな緑にはえ、樹木は深い緑を装い、草花は色とりどりに咲き誇る。焼けつくような暑さのもとで、地上の草木が枯死しようとしている時、川の流れに沿って緑が1つの線をえがき、山の宝を海に運ぶためにそのふところを開いた平野は、新鮮さと美しさによそおわれる。これは、自分をささげて神の恵みを世に流す通路となるすべての者に、どんな報いが与えられるかをあかしするためである。

これは、貧しい人々に憐れみをあらわす者たちが受ける祝福である。預言者イザヤはこう言っている、「また飢えた者に、あなたのパンを分け与え、さすらえる貧しい者を、あなたの家に入れ、裸の者を見て、これに着せ、自分の骨肉に身を隠さないなどの事ではないか。そうすれば、あなたの光が暁のようにあらわれ出て、あなたは、すみやかにいやされ……。主は常にあなたを導き、良き物をもってあなたの願いを満ち足らせ……られる。あなたは潤った園のように、水の絶えない泉のようになる」（イザヤ58：711）。

慈善の行為には、二重の祝福がある。貧しい人に与える者は他人を祝福している一方、その人自身がさらに大きな祝福を受ける。魂に宿るキリストの恵みは、自我とは反対の品性、すなわち生活をきよめ、高め、豊かにさせる品性を育ててくれる。隠れたところでなされた親切な行為は、お互いの心を結びつけ、すべて寛大な思いの源である方の心に、人々を近づける。花から流れる香りのように、静かに生活から流れ出るわずかな心づかいや愛と自己犠牲の小

さな行為――こうしたものが少なからず人生の祝福と弔福に寄与する。そして他人の利益と幸福のために自己を否定することは、たとえこの世では人目につかず賞賛されないものであっても、天では栄光の王――富んでおられたが、わたしたちのために貧しくなられたお方――との結合のしるしと認められていることが、ついにはわかるのである。

親切の行為は、隠れたところでなされても、その人の品性にあらわれる結果は隠すことができない。わたしたちは、キリストの弟子として、全くおのれをささげて働くなら、心は神の心と一つとなり、神の聖霊はわたしたちの心に働きかけて、神のみ手がふれるのに答えて、聖なる音をかなでるようにしてくださるのである。

ゆだねられた賜物を賢明に活用する者には、さらにタラントを増し加えられるお方は、愛するみ子を信じ、その恵みと力を通して活動する民の奉仕を喜んで認めてくださる。善行によって自分の能力を働かせながら、クリスチャン品性の発達と完成を求めていた者は、そのまいたものをきたるべき世界で刈り取る。この世界で始められた働きは、より高くよりきよい来世において、その極致に達して永遠に続くのである。

「また祈る時には、偽善者たちのようにするな」 [1158]

（マタイ6：5）

パリサイ人には、きまった祈りの時間があった。そして、そのきまった時刻に外出していることが多かったが、その時はどこにいても――おそらくは通りや市場など、人の往来のはげしい所であったろう――彼らは立ち止まり、大きな声で形式的な祈りを繰り返すのであった。単なる自己賞揚のためにささげられるこうした礼拝を、イエスは容赦なく非難された。とはいっても、イエスは公の祈りに反対なさったのではない。イエスご自身も弟子たちと一緒に祈ったり大勢の人々の前で祈ったりなさった。イエスは個人的な祈りを公にしてはいけないと教えておられるのである。密室の祈りの時には、祈りをお聞きになる神のほかだれの耳にも聞こえてはいけないのである。こうした願いの言葉は、好奇心から耳をそばだてて聞いてはならない。

「あなたは祈る時、自分のへやにはいり」なさい（マタイ6：6）。ひそかな祈りの場所を持ちなさい。イエスは神との交わりの場所をきめておられたが、わたしたちもそうすべきである。わたしたちは、どんなささやかな所でもよいから、ただ一人神と交わることのできる場所へたびたび退く必要がある。

「隠れた所においでになるあなたの父に祈りなさい」（マタイ6：6）。わたしたちはイエスのみ名によって、幼な子のように確信をもって神のみ前に出ることができる。わたしたちには仲介者はいらないのである。わたしたちは、自分を知って愛してくれる人に対するように、イエスを通して心を神に開けばよいのである。

神のほかだれの目も見ることができず、彼のほかだれの耳も聞くことのできないひそかな祈りの場所で、わたしたちは心の奥底にひそむ願いや望みを、無限の憐れみに富んでおられる父に注ぎ出せるのである。こうして、心が静まっている時に、助けを求める人間の叫びに必ずお答えになるあのみ声が、わたしたちの心に語りかけてくださる。

主は、「慈愛とあわれみとに富んだかたである」（ヤコブ5：11）。主はうむことを知らない愛をもって、わがままな者の告白を聞き、その悔い改めを受けいれようと待っておられる。かわいい幼な子が自分の顔を認めてほほえむのを待つ母親のように、主はわたしたちがいくぶんでも感謝をあらわすのを待っておられる。主がどんなに熱心に、またやさしく、わたしたちのことを心にとめておられるか理解することを主は望んでおられる。わたしたちの試練を主の憐れみに、悲しみをその愛に、傷をそのいやしの力に、弱さをその力に、むなしさをその充満にゆだねるように、主は、わたしたちを招いておられる。イエスのみもとに来た人で失望した者は一人もいない。「主を仰ぎ見て、光を得よ、そうすれば、あなたがたは、恥じて顔を赤くすることはない」（詩篇34：5）。

隠れたところで主を求め、その必要を主に告げて助けを求める者の願いが、むなしくなることはない。「隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう」。わたしたちは、キリストを日々の友とする時、見えざる世界の力に囲まれているのを感じ、イエスを見つめることによって、そのみかたちに似た者となるのである。見

ることによってわたしたちは変えられる。品性は天のみ国にふさわしく和らげられ、きよめられ、高められる。主と接して交わる時、そこには必ず敬虔と純潔と熱意とが増し加えられる。祈りを通してさとりが増し加わる。わたしたちは天の教育を受けているのであって、生活に勤勉と熱意があらわされてくるのである。

日々真剣な祈りによって神を仰ぎ、助けとささえと力を求める魂は、気高い抱負を持ち、真理や義務についての明確な認識が与えられ、行動の目的も高められ、たえず義に飢え渇くようになる。わたしたちは神との結びつきを保つことによって、人々に接する時に、自分の心を支配している光と平和と落ち着きとを、彼らのうちにひろめることができる。祈りによって与えられる力と、人間の思慮深さを養おうとするたゆまぬ努力とによって、人は毎日の義務を行う力が与えられ、どういう立場に置かれても、心の平静を保つことができるようになる。

わたしたちが神に近づくなら、神のためにあかしすること [1159]
ばや、み名をたたえる賛美の言葉を、神はわたしたちに授けてくださる。神はわたしたちに天使の歌のしらべ、天の父への感謝の言葉を教えてくださる。人生のあらゆる行為において、内住する救い主の光と愛が現される。世のどんなわずらいも、神のみ子を信じる信仰によって生きる者の生活には、何の影響も及ぼすことはできない。

「また、祈る場合、異邦人のように、くどくどと祈るな」

（マタイ6：7）

異邦人は祈りを、罪をあがなう効力のあるものと考えていた。だから祈りが長ければ長いほど、その効力は大きくなると思っていた。もし彼らが自分の努力できよくなれるものなら、彼ら自身に何らかの取り柄があり、誇る根拠もあることになろう。祈りについてのこうした考えは、あらゆる誤った宗教制度の根本となっている、自分で自分をあがなうという原理の結果である。パリサイ人は、祈りについてのこの異教的な考えを取り入れていた。そしてこの観念は、今日、クリスチャンと称する人々の間ですら、決して消え去ってはいない。心に神の必要を少しも感じてい

ないのに、慣例的なきまり文句を繰り返すのは、異邦人が「くどくどと祈る」願いと同じ性質のものである。

祈りは罪をあがなうものではない。祈りそれ自体には、何の取りえも功績もない。どのような美辞麗句を並べることができても、それは一つのきよい願いに比べることはできない。この上なく流ちょうな祈りも、心の本当の思いをあらわすものでなければ、むだなことばにすぎない。しかし信仰の祈りとは、真剣な心をもってささげる祈りのことである。それはちょうど、かなえてもらえるものと信じてこの世の友人に好意を求めるのと同様に、心のささやかな願いを申し上げることなのである。神は儀礼的な賛辞は求めておられない。だが自分が罪人であることと、まったく無力であることを悟って、砕かれ和らげられた心の叫びは、言葉にはあらわされなくても、憐れみあふれる父なる神のみもとに達するのである。

「また断食をする時には、偽善者がするように、陰気な顔つきをするな」（マタイ6：16）

神のみことばが命じている断食は、単なる形式ではない。この断食は、食物をとらずに荒布をまとい、頭に灰をふりかけるだけのことではない。真心から罪を悲しんで断食する者は、決してこれを誇示しようとはしないのである。

神がわたしたちに求めておられる断食の目的は、魂の罪のために体を苦しめることではなく、わたしたちが罪の嘆かわしい性質を会得し、神の前に心を低くして、その寛大な恵みを受けられるようになる助けとなるためである。神はイスラエルに、「『あなたがたは衣服ではなく、心を裂け』。あなたがたの神、主に帰れ」と命じておられた（ヨエル2：13）。

わたしたちが苦行をしても、あるいは、自分の行為によって聖徒の受ける嗣業を買い取るものとなると考えたとしても、それは何の役にも立たない。「神のわざを行うために、わたしたちは何をしたらよいでしょうか」という質問を受けた時、イエスは「神がつかわされた者を信じることが、神のわざである」とお答えになった（ヨハネ6：28、29）。悔い改めとは、自己からキリストへと向きなおることである。そして信仰によってキリストを受け入

れ、わたしたちのうちにキリストが生きてくださるようにする時、よきわざがあらわれる。

「あなたがたは断食をする時には、自分の頭に油を塗り、顔を洗いなさい。それは断食をしていることが人に知られないで、隠れた所においでになるあなたの父に知られるためである」とイエスは仰せになった（マタイ6：17、18）。神の栄光のためにすることは何であれ、喜ばしい心でなすべきであって、悲しい陰うつな気持ちでしてはいけない。イエスの宗教には、陰うつなところは何一つない。クリスチャンが悲しみに沈んだ態度をとって、主に失望したような印象を与えるなら、それは神のご品性をまちがってあらわし、神の敵に論議の種を提供するのである。そのようなクリスチャンは、口先では神を父と呼びながら、陰うつな悲しみの態度で、みなし子の姿を世に示すのである。 [1160]

キリストはわたしたちに、キリストに奉仕することが実際に楽しいものであると世にあらわすことを望んでおられる。自己犠牲や心の中の人知れない試練は、これを憐れみ深い救い主に申し上げよう。重荷は十字架のもとに置いて、まずあなたを愛された主の愛を受けて、道を進もう。人々は、魂と神との間でひそかに行われる交わりを知ることはないであろうが、聖霊が心に働きかけられた結果は、すべての人に明らかになるのである。「隠れた事を見ておられる」お方が、「あからさまに報いてくださる」からである（マタイ6：6・英語欽定訳）。

「あなたがたは自分のために……地上に、宝をたくわえてはならない」

（マタイ6：19）

地上にたくわえられた宝は、永続しない。それは盗人らが押し入って盗み出し、虫が食い、さびがつき、火事や嵐で一掃される。そして「あなたの宝のある所には、心もある」（マタイ6：21）。地上にたくわえられた宝は心を奪い、天のことを除外してしまう。

金を愛することが、他の何ものよりも、当時のユダヤ人の心を捕らえていた欲望であった。心の中で、神が占めるべき位置を世俗が横領していた。これは今日も同じであ

る。富をむさぼる気持ちは人間を全く魅了し、そのために人間の高貴さがそこなわれ、人間性が堕落して、ついに破滅の淵に陥ってしまうようになるのである。サタンに仕えることはわずらわしく、複雑で、身心を消耗させるものであり、人が営々として地上に蓄積する宝は、ほんの一時的なものにすぎない。

イエスは、「自分のため、虫も食わずさびもつかず、また、盗人らが押し入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい。あなたの宝のある所には、心もあるからである」と仰せになった（マタイ6：20、21）。

「自分のために天に宝をたくわえなさい」と教えられている。天の宝を手に入れるのはあなたのためなのである。あなたの持つすべてのものの中で、これだけが本当にあなたのものである。天にたくわえられる宝は不滅である。それは神が守っていてくださるから、火も洪水も滅ぼすことができず盗人も奪うことができず、虫も食わず、さびもつかない。

キリストが万物にまさって尊ばれるこの宝は、「聖徒たちがつぐべき神の国がいかに栄光に富んだものであるか」といわれる、その栄光の富である（エペソ1：18）。キリストの弟子は彼の宝石、彼の尊い特別の宝と呼ばれている。「彼らは冠の玉のように」なる、「わたしは人を精金よりも、オフルのこがねよりも尊くする」とキリストは言われる（ゼカリヤ9：16、イザヤ13：12・英語欽定訳）。キリストは純潔で完全な民を、ご自分の苦難と屈辱と愛の報いであり、同時にご自分の栄光をさらに増すものとしてごらんになる。キリストは、あらゆる栄光が輝き出る源なのである。

そしてわたしたちは、あがないのみわざに加わることを許され、キリストの死と苦難によって得られた富に、キリストとともにあずかることができるのである。使徒パウロは、テサロニケのクリスチャンにこり書き送った、「わたしたちの主イエスの来臨にあたって、わたしたちの望みと喜びと誇の冠となるべき者は、あなたがたを外にして、だれがあるだろうか。あなたがたこそ、実にわたしたちのほまれであり、喜びである」（テサロニケ2：19、20）。キリストは、わたしたちにこの宝のために働けと命じておられる。品性こそ、人生の大きな収穫である。そして、キリス

トの恵みによって人の心の中に、天のことを思わせる言葉や行い、またキリストのような品性を築こうと努めるあらゆる努力などが宝を天に積むのである。

宝のある所には心もある。他人に益を与えようとする努力はすべて、自分自身を益することになるのである。福音を広めるために金銭や時間をささげる者は、そのみわざと、みことばに接する魂のために関心を持ち、祈りをささ [1161] げる。愛情が他の人々に流れ出る時、なおいっそう神に献身するように刺激される。それは、人々のためにさらによい働きをすることができるようになるためである。

そして天に宝をたくわえていた者は、地上の富がすべて滅びる最後の日に、自分の生活によって獲得したものを見る。わたしたちは、キリストの言葉に注意を払うなら、大きな白いみ座のまわりに集まるその時に、わたしたちの働きを通して救われた魂を見るのである。そして、1人は幾人かを救い、さらにその人々が他の人々を救って、こうしてわたしたちの労苦の結果、大勢の人々がいこいの港に導かれる。彼らは冠をイエスの足もとに置いて永遠にわたってイエスを賛美するのである。キリストのために働いた者は、どんなに大きな喜びをもって、あがない主の栄光にあずかるこれらのあがなわれた人々を眺めることであろう。救霊のみわざに忠実だった人々にとって、天国はなんと尊いものであろう。

「このように、あなたがたはキリストと共によみがえらされたのだから、上にあるものを求めなさい。そこではキリストが神の右に座しておられるのである」（コロサイ3：1）。

「あなたの目が澄んでおれば、全身も明るいだろう」

（マタイ6：22）

1つの目的に徹し、まったく神に献身することが、救い主の言葉によって指摘された条件である。真理を識別し、どんな犠牲を払ってもそれに従おうという、いちずでゆるがない心を持つなら、あなたは神の光を受ける。ほんとうの敬虔さは、罪との妥協をすべて捨てる時にはじまる。その時、使徒パウロの言った言葉があなたの言葉となるのである。「ただこの一事を努めている。すなわち、後の

ものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである」「わたしは……わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている。キリストのゆえに、わたしはすべてを失ったが、それらのものを、ふん土のように思っている。それは、わたしがキリストを得るためであ」る（ピリピ3：13、14、8）。

しかし自己愛によって目が見えなくなると、そこにあるのは暗闇ばかりである。「あなたの目が悪ければ、全身も暗いだろう」（マタイ6：23）。この恐ろしい暗闇が、ユダヤ人をかたくなな不信仰のうちにおおって、彼らを罪から救うために来られたお方の品性と使命を、理解できなくしたのである。

誘惑に負けるのは、心がぐらついて神への信頼が揺らぐ時にはじまる。わたしたちは、自分を完全に神にささげる道を選ばないならば、暗闇の中にいるのである。少しでも保留するところがあれば、それは、サタンが誘惑によってわたしたちを惑わそうと侵入してくる戸口を開いておくことである。わたしたちの視力をかすませて、信仰の目で神を見ないようにすることができれば、罪への障壁がなくなることを、サタンは知っている。

罪深い欲望が心に満ちていることは、魂が惑わされていることを示している。その欲望にふけるごとに、魂は神をきらうようになる。わたしたちは、サタンの選んだ道を歩くなら、悪の影にとり囲まれ、1歩進むごとに暗さは増して、心の盲目はつのるばかりである。

自然界と同じ法則が、精神の世界の法則でもある。暗闇の中に住む者はついに視力を失ってしまう。そういう人は真夜中以上の暗黒に閉ざされ、真昼の明るさも彼にとっては光とはならない。彼は、「やみの中を歩くのであって、自分ではどこへ行くのかわからない。やみが彼の目を見えなくしたからである」（ヨハネ2：11）。いつまでも悪を心に抱き、神の愛の訴えをあえて無視するならば、罪人は、善を愛する心と、神を慕う心と、天の光を受ける能力そのものさえも失ってしまうのである。憐れみの招待は今なお愛にあふれ、光はその魂をはじめて照らした時と同じく輝

いているのに、み声はその耳に入らず、み光は目に見えないのである。

救われる望みが少しでもある限り、いかなる魂も最終的に神に捨てられて、なすがままに放棄されることはない。「人が神から離れるのであって、神が人から離れるのではない」。天の父は、訴えと警告と憐れみの保証を与えて、わたしたちがこれ以上、どんな機会や特権にも答えなくなるまで、わたしたちのあとを追われるのである。責任は罪人の側にある。今日神の聖霊にさからうならば、この次にさらに強い力で光が来ても再びその光にさからうようになる。こうして反抗から反抗へと進み、ついに光は感銘を与えることができなくなり、罪人は神の聖霊にまったく応じなくなる。その時は、「あなたの内なる光」までが暗闇となる（マタイ6：23）。すでに知っている真理でさえ曲げられてしまって、そのためにかえって魂の盲目が増すばかりである。 [1162]

「だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない」

（マタイ6：24）

キリストは、だれも2人の主人に兼ね仕える者はないとか、兼ね仕えてはならないとか言うのではなく、兼ね仕えることはできないと言われるのである。神と富との利害関係には、協調も一致もない。クリスチャンの良心が、抑制し、自己犠牲を求め、あるいはとどめたりするところを、世の人はその線を越えて、利己的性癖のままにふるまうのである。境界線の一方には、自己を否定してキリストに従う者たちがおり、その向こう側には、世を愛して流行を追い、不まじめに暮らし、禁断の楽しみにふける放縦な者たちがいる。境界線の向こうには、クリスチャンは行くことができない。

だれも中立の立場を取ることはできない。神を愛しもせず、義の敵に仕えもしない中間層は存在しない。キリストは人間のうちに生き、その才能を通して働き、その能力を通して活動なさるのである。人間の意志はキリストの意志に従い、人間は聖霊とともに行動しなければならない。その時、生きているのはもはや彼らではなく、彼らのうちに

キリストが生きるのである。神に自分を完全にささげない者は、別の力に支配され、まったく違った言葉をささやく別の声に耳を貸すのである。どっちつかずの奉仕は、人間を暗闇の軍勢の心強い友として、敵の側に置いてしまう。キリストの兵士と自称する者がサタンと結束し敵を助けるなら、彼らはキリストの敵であることを証明することになる。彼らは神聖な信頼を裏切る。彼らはサタンと忠実な兵士との間のつなぎであって、敵はこれを仲介としてキリストの兵士の心をさらおうとたえず努めている。

この世における悪の側の最も強力なとりでは、ならず者や、堕落しきった者の罪の生活ではない。それは見たところ立派で道徳的に見えながら、心に一つの罪を抱き、一つの悪にふけっている者の生活である。心の中で何か大きな誘惑と戦っていて、ちょうどがけのふちでふるえながら立っているような人にとって、このような実例は、非常に力のある誘惑である。生命と真理と名誉についての高尚な考え方を授かっていながら、神の聖なる律法の一つを故意に破る者は、神の高尚な賜物を悪用して、罪へのおとりとしたのである。素質も才能も同情心も、さらには寛大で親切な行為でさえも、他の人をいざなって、この世の命もきたるべき世の命も破滅させてしまう、サタンのおとりとなることもあるのである。

「世と世にあるものとを、愛してはいけない。もし、世を愛する者があれば、父の愛は彼のうちにない。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、持ち物の誇は、父から出たものではなく、世から出たものである」（ヨハネ2：15、16）。

「思いわずらうな」

（マタイ6：25）

生命を与えてくださったお方は、それを維持する食物が必要なことをご存じである。体を造ってくださったお方が、衣服の必要をかえりみないということはない。生命という大きな賜物を与えてくださったお方は、それを補うために必要なほかのものを、お与えにならないことがあろうか。

[1163] イエスは何の思いわずらいもなく、賛美の歌をさえ ずっ

ている小鳥に聴衆の注意を向けられた。小鳥は「まくことも、刈ることも」しない（マタイ6：26）。それなのに、大いなる天の父はその食物を備えてくださる。そしてイエスはこう仰せになる。「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」（マタイ6：26）。

主は、すずめの落ちるのをごらんになる。
人の心の痛みも、ご存じである。
主はどこにでも、わたしたちと共におられて、
なげきの涙に目をおとめになる。
主にたよる者は、主に捨てられたりはしない。
決して、捨てられたりすることはない。

野山には花が咲き誇っていた。イエスはみずみずしく朝露にぬれたその姿をさして、「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい」と仰せになった（マタイ6：28）。野の花の優美な姿や繊細な色合いは人間が巧みに写し出すことができるかもしれないが、いったいだれが1輪の花、1枚の葉にさえ生命を与えることができるだろうか。道ばたの草花のどれ一つをとっても、その存在は、天空に星の世界を設けたのと同じ力によって造られたのである。すべて造られたもののうちに、神の偉大な心臓から生命が脈打っている。神は野の花を、地の王たちの身を飾ったいかなる装いよりもさらにはなやかに装われた。「きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ」（マタイ6：30）。

「野の花を考えよ」「鳥を見よ」と仰せになるのは、花を造り、すずめに歌をさずけられたお方である。自然の美しさの中から、学者の知っている以上の神の知恵を学ぶことができる。ゆりの花びらに、神はあなたにおくることばをお書きになった——そしてそれは不信と自我と思いわずらいを捨て去る時に、はじめてあなたの心が読むことのできる言葉である。さえずる小鳥ややさしい花を神がお与えになったのは、あなたの人生の歩みを明るく楽しいものにしようとする、父の心からあふれでる愛のゆえではなかったろうか。花や小鳥はなくても、生存に必要なものはすべて与えられていた。だが神は、単に生存に十分なだけを備えることで満足なさらなかった。神がいかにあなたを愛

しておられるかを知らせるために、地にも大空にも美しいものを満たされたのである。すべて造られたものの美しさは、神の栄光の輝きのかすかなあらわれにすぎない。神があなたの幸福と喜びのために、自然の事物にこうした無限の技巧をこらされたとすれば、まして必要な祝福をすべて与えてくださるのを、疑うことができるだろうか。

「野の花を考えてみるがよい」。日光に向かって開く花はみな、星を導いているのと同じ法則に従っている。しかもその生命は、何と単純で美しく新鮮なことであろう。神は花を通して、わたしたちの注意をキリストのような品性のもつ美しさに向けようとしておられる。花にこれほどの美しさを与えたお方は、それよりはるかにまさって、魂がキリストの品性の美しさに装われることを願っておられる。

野の花がどうして育っているか、考えてみるがよい。草木が冷たい暗い土から、あるいは川底の泥の中から芽生え育って、どうして美しく花を咲かせ、香りを漂わせるのか考えてみるがよいとイエスは仰せになる。だれが、ゆりのあの褐色のごつごつした球根の中に、美の可能性を想像することができるだろうか。しかし、その中に隠れている神の生命が、その呼びかけに従い、雨と日光を受けて開く時、人々はその優雅で美しい姿に驚くのである。それと同じく、神の恵みの働きかけに従うすべての者の心の中に、神の生命が芽ばえるのである。この神の恵みはちょうど雨や日光のように、すべての人に豊かな祝福をもたらすものである。草花を創造したのは神の言葉であるが、その同じ言葉があなたのうちに、聖霊の実を生み出すのである。

神の律法は愛の律法である。神はあなたを美で囲み、あなたを地にお置きになったのは、あなたがただ自己にのみ没頭するためではなく、キリストの愛によって、生活を輝
[1164] かしく美しいものとするためであるこ とを、教えようとされたのである。それは、花のように、愛の奉仕によって、人々に喜びを与えることである。

両親がたは、どうか子供たちを、草花の教訓によって教えていただきたい。子供たちを庭や野原や茂った木立のもとにつれて行って、自然の中から神の愛の言葉を読みとることを教えなさい。鳥や花や木を見ては神のことを思わせなさい。すべて楽しい美しいことの中に、子供たちへの

神の愛があらわれていることを理解させなさい。子供たちに、あなたの宗教の楽しさを示して教えなさい。口を開く時には、親切な言葉を語りなさい。

神が大きな愛を持っておられるから、自分の性質は変えられて、神と調和するようになることを、子供たちに教えなさい。神はきれいな花を咲かせて、彼らの生活を美しくしようと思っておられることを教えなさい。きれいな花を摘む子供たちに、花をお造りになった神は、花よりもっと美しいお方であることを教えなさい。そうすれば彼らの幼い心は、神に信頼するようになり、「ことごとく美しい」お方であるイエスは、彼らにとって、毎日の生活の親しい友となることであろう。そして子供たちの生活は、神の純潔なかたちに変えられていくことであろう。

「まず神の国……を求めなさい」

（マタイ6：33）

キリストの言葉に聞きいっていた人々は、それでも何か地上の王国のことを言われるのではないかと待望していた。イエスが天の宝を彼らに開いておられた時にも、多くの人々の心に第一に浮かんだのは、この人とつながっていれば、この世における自分たちの前途は、どう開けて行くのだろうという思いであった。彼らは、この世のことを何よりも思いわずらっていた。まるで、被造物をやさしく守られる神がいないかのような生活を送っている、周囲の異教徒と何ら変わらないことを、イエスは明らかになさった。

イエスは言われた、「これらのものは皆、この世の異邦人が切に求めているものである」「あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである。まず、神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」（ルカ12：30、マタイ6：32、33）。わたしはあなたがたに、愛と義と平和の国を明らかにするために来たのである。心を開いてこの国を受け入れ、そのために尽くすことを第一のこととしなさい。これは霊の国ではあるが、この世の生活の必要がかえりみられないのではないかと恐れるには及ぼない。あなたがたがみずから神の奉仕に

ささげるなら、天でも地でもすべての権力を持っておられる方が、あなたがたの必要を満たしてくださるのである。

イエスは、わたしたちが努力をしなくてもよいようにしてくださるというのではなく、すべてのことにおいて、イエスを最初とし最後とし最上とするようにと、教えておられるのである。わたしたちは、自分の品性と生活において、イエスの義が完成されるのを妨げるような事業や務めにたずさわったり、あるいはそうした楽しみを求めたりしてはならない。わたしたちのすることは何であれ、主に対してするように心からしなければならない。

イエスは地上に住んでおられた時、神の栄光を人々の前にあらわし、またすべてを天父のみこころに従わせることによって、あらゆる点において人生を尊ばれた。わたしたちもその模範に従うなら、この世の生活で必要なものはすべて「添えて与えられる」と、イエスは約束しておられる。たとえ、わたしたちが貧しくても豊かでも、病気であっても健康でも、また無知な者であっても知恵ある者であっても、すべては神の恵みの約束のうちに備えられているのである。

どんなにかよわい魂でも、神に助けを求めてすがるならば、神は永遠のみ腕をもって、いだいてくださるのである。金銀は滅びるが、神のために生きる魂は神とともにながらえる。「世と世の欲とは過ぎ去る。しかし、神の御旨を行う者は、永遠にながらえる」（ヨハネ2：17）。この地上で損失と苦難にあいながらも、導きと知恵、慰めと希望を求めて神によりすがることを学んだ者を受け入れようと、神の都の黄金の門は開かれるのである。天使の歌声で迎えられ、命の木はその実を実らせる。「『山は移り、丘は動いても、わがいつくしみはあなたから移ることなく、平安を与えるわが契約は動くことがない』と、あなたをあわれまれる主は言われる」（イザヤ54：10）。

[1165]

「だから、あすのことを思いわずらうな……。一日の苦労は、その日一日だけで十分である」

（マタイ6：34）

もしあなたが、神のみわざを行うためにみずからを神にささげたなら、明日のことを思いわずらう必要はない。あ

なたが仕えている神は、はじめから終わりを知っておられるお方である。あなたの視界からは隠されている明日のできごとも、全能なる神の御目には明らかなのである。

わたしたちが、自分の関係していることを自分の手で処理し、自分の知恵だけで成功させようとすることは、神から与えられていない重荷を引き受けて、神の助けなしにそれをになおうとしているのである。そうすることは、神の責任を自分でとり、事実上自分自身を神の地位においているのである。危険や損害は、確かにふりかかってくるのであるから、それを予想して懸念するのももっともなことである。だが神はわたしたちを愛して、恵みを施そうとしておられることをほんとうに信じる時、わたしたちは将来のことを心配しなくなる。わたしたちは、ちょうど子供が愛情深い親を信頼するように、神を信頼する。その時、わたしたちの意志は神の意志に没入して、悩み苦しみは消えてゆくのである。

キリストは、明日の重荷を今日負おうとする時、助けを与えるとは約束しておられない。ペテロやパウロのようにイエス・キリストの使徒たちは、信仰のために投獄の苦しみをなめた。しかし彼らは、神の愛の約束を求めることを忘れなかった。「わたしの恵みはあなたに対して十分である」と言われたが（Ⅱコリント12：9）、しかしその恵みは、荒野のマナのように、1日に必要なだけその日に与えられるのである。荒野の旅をしていたイスラエルの大群衆のように、わたしたちも朝ごとに、1日分の必要な天のパンをいただくことができる。

1日だけしかわたしたちに与えられていないのであるから、わたしたちは今日、神のために生きなければならない。この1日、真剣に仕えて、目的も計画も心労もすべてキリストのみ手におゆだねすべきである。また、神はわたしたちを心に留めておられるのだから、わたしたちの思いわずらいを神におまかせすべきである。「主は言われる、わたしがあなたがたに対していだいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである」（エレミヤ29：11）。「あなたがたは立ち返って、落ち着いているならば救わ

れ、穏やかにして信頼しているならば力を得る」（イザヤ30：15）。

もし日ごとに主を求めて悔い改め、みずから進んで神にある自由と喜びの経験を味わい、神の恵み深い招きに喜んで応じ、キリストの服従と奉仕のくびきをになうなら、つぶやきはすべてなくなり、困難はすべて取り除かれ、現在直面している複雑な問題もことごとく解決される。

主の祈り

「だから、あなたがたはこう祈りなさい」

（マタイ6：9）

主の祈りは、救い主によって2度与えられた。最初は山上の垂訓の中で群衆に対して語られ、数か月のちに再び、弟子たちにだけ与えられた。しばらく主のもとを離れていた弟子たちが帰って来た時、主はひたすら神と交わっておられた。彼らが帰って来た ことにも気づかないかのように、主は声高く祈り続けられた。主のみ顔は天の光で輝いていた。その様子は見えない神のみ前にいるようであり、そのみことばには、神と語る者の持つ生きた力があった。 [1166]

それを聞いていた弟子たちの心は強く感動した。彼らは、主が、父なる神との交わりに、お一人で幾時間もお過ごしになることがしばしばあることを知っていた。主は毎日を、つめかける群衆に奉仕することに、また、律法学者たちの反逆的な奇弁の真相を明らかにすることに費された。この休む間もない働きは、しばしば主をとても疲れさせたので、主の母や兄弟たち、また弟子たちさえも、主の生命まで犠牲になるのではないかと心配したほどであった。しかし、骨の折れる一日を終えて祈りの時を過ごされた主のみ顔には、平安の色が認められ、さわやかな気分がその身辺にただようように思われた。神と幾時間もお過ごしになってから、主は朝ごとに、天の光を人々にもたらすために出て来られた。弟子たちは、主の祈りの時間と、主の言葉や働きの力とを、結びつけて考えるようになった。今、彼らが主の懇願を聞いた時、彼らの心は、畏敬の念に満たされ低くされた。主が祈り終えられた時、彼らは自分たちの必要を強く感じて、「主よ、……わたしたちにも祈ることを教えてください」と叫んだ（ルカ11：1）。

イエスは、別に新しい形式の祈りをお与えになったのではなかった。あなたがたは、わたしがすでに与えたもの

を、理解することが必要なのだ、それにはまだ、あなたがたが達していない深い意味が含まれているのだとでも言われるかのように、主は彼らに、以前にお教えになったことを繰り返された。

けれども、救い主は、これらの言葉をそのまま用いるようにと言っておられるのではない。人類の一人として、主はご自身の、祈りの理想をお示しになったのである。その言葉はきわめて単純であって、幼な子でも口にすることができるが、その意味は非常に広く、どんなにすぐれた知者も、それを十分に把握することはできない。主はわたしたちに、感謝のささげ物を持って神のもとに来、わたしたちの必要を申し上げ、罪を告白し、さらに、神の約束に従って神の恵みを求めるようお教えになっている。

「あなたがたはこう祈りなさい、……われらの父よ」

（マタイ6：9）

イエスは天の父を、われらの父よ、と呼ぶように、教えておられる。主はわたしたちを、「兄弟と呼ぶことを恥とされない」のである（ヘブル2：11）。救い主は熱心に、喜んで、わたしたちを神の家族の一員として迎えようとしておられるので、神に近づく時に用いる最初の言葉として、わたしたちと神との関係を保証する「われらの父よ」という言葉を述べておられる。

ここに、神はそのみ子を愛されるようにわたしたちを愛されるという、励ましと慰めに満ちたあの驚くべき真理が告げられている。このことをイエスは、弟子たちのための最後の祈りの中で、「あなたが……わたしを愛されたように、彼らをお愛しになった」と言っておられる（ヨハネ17：23）。

サタンが自分のものだと主張し、圧政をもって支配してきた世界を、神のみ子は、大いなるお働きによって愛のうちに包み、再びエホバのみ座とつながれたのである。この勝利が確立した時、ケルビムとセラビム、堕落しない諸世界の無数の大群衆は、神と小羊とに賛美の歌をささげた。彼らは、堕落した人類に救いの道が開かれて、地が罪ののろいからあがなわれることを喜んだ。ましてこのような驚

くべき愛の対象であるわたしたち自身は、どれほど喜ぶべきであろうか。

どうしてわたしたちは、疑いや不安にとらわれたり、自分が孤児であるように感じたりすることができるだろうか。律法を犯した者のために、主は人性をお取りになったのである。主はわたしたちが、永遠の平和と保証を持つことができるために、わたしたちのようになられたのである。天には、わたしたちの仲保者がおられる。だれでも主を個人的救い主として受け入れる者は、孤児として取り残され、自分の罪の重荷を負うままにされるようなことはない。

「愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である」 [1167]
「もし子であれば、相続人でもある。神の相続人であって、キリストと栄光を共にするために苦難をも共にしている以上、キリストと共同の相続人なのである」「わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである」（ヨハネ3：2、ローマ8：17）。

神に近づく第一歩は、神のわたしたちに対する愛を知りかつ信じることである（ヨハネ4：16参照）。なぜなら、神の愛に引かれることによって、わたしたちは神のもとに導かれるからである。

神の愛を知る時、利己主義は捨てられる。神を父と呼ぶことによって、わたしたちは神のすべての子らをわたしたちの兄弟と認めるのである。わたしたちはみな、人類という大きな織物の一部であり、同じ家族の一員である。祈りのうちに、わたしたちは、自分たちのことだけでなく隣人をも含めるべきである。自分のための祝福だけを求める者は、正しい祈りをささげているとは言えない。

無限の神は、父の名によって神に近づくことを、あなたの特権とされるとイエスは言われた。このことの意味するところを、すべて理解してもらいたい。世の親が、過失を犯した子供に嘆願する、その熱心さにもまさる熱心をもって、あなたを造られた方は罪人に嘆願される。人間のいかなる愛情深い心も、悔い改めない者を、このように優しく招きつづけたことはなかった。神はすべての住居にお住みになる。神は、わたしたちの語る言葉や、ささげるすべて

の祈りを聞き、あらゆる人の悲しみと失望を味わい、わたしたちが、父母や姉妹や友や隣人に対してどのような扱いをするかと注意しておられる。神は、わたしたちの必要に関心を寄せられる。そして神の愛と憐れみと恵みとは、わたしたちの必要を満たすためにたえず流れ出ている。

しかし、あなたがたが神を父と呼ぶならば、あなたがたは、自分が神の子であることを認め、神の知恵に導かれ、すべてのことにおいて服従することを承認したのである。それは、神の愛が変わらないものであることを悟ったからである。あなたがたは、自分の人生に対する神のご計画を受け入れる。神の子として、あなたがたは、神の名誉、神のご性格、神の家族、神の働きをあなたの最高の関心の対象とするのである。父なる神および神の家族のすべての者と、あなたがたとの関係を認め尊ぶことは、あなたがたの喜びとなってくる。神の栄光となり、神の家族の幸福に役立つことならば、取るに足りない小さな行為であっても喜んでするようになるのである。

「天にいます」キリストが「われらの父」として仰ぐように命じておられる方は、「天にいらせられる。神はみこころにかなうすべての事を行われる」。神のご配慮のうちに、わたしたちは、「わたしが恐れるときは、あなたに寄り頼みます」と言ってやすらかにくつろぐことができる（詩篇115：3、56：3）。

「御名があがめられますように」

（マタイ6：9）

主のみ名をあがめるためには、わたしたちは、神に畏敬の念をもって語らなければならない。「そのみ名は聖にして、おそれおおい」（詩篇111：9）。決して神の称号や名称を、軽々しく取り扱ってはならない。祈りをささげる時、わたしたちは、至高者の謁見室に入るのである。わたしたちは聖なるおそれをもって、神のみ前に出るべきである。天使たちも、神のみ前では顔をおおうのである。ケルビムや輝く聖なるセラピムも、厳粛な崇敬の念をもってそのみ座に近づくのである。まして、わたしたちのような有限で罪深い者は、いかにうやうやしい態度をもって、わた

したちの造り主なる主のみ前に出なければならないことであろう。

しかし、主のみ名をあがめるということには、もっと多くの意味が含まれている。キリストの時代のユダヤ人たちのように、外面的には最大の尊敬を神にささげながら、神のみ名を絶えず汚すということもあり得るのである。「主の名」は「あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる……悪と、とがと、罪とをゆるす者」である（出エジプト34：57）。キリストの教会について、「その名は『主はわれわれの正義』ととなえられる」と書かれている（エレミヤ33：16）。この名は、キリストに従うすべての者に与えられる。それは神の子の遺産である。家族は父の名によって呼ばれる。預言者エレミヤは、イスラエルのきびしい苦難の時に、「われわれは、み名によって呼ばれている者です。われわれを見捨てないでください」と祈った（エレミヤ14：9）。 [1168]

このみ名は、天使たちや堕落したことのない諸世界の人々によって、あがめられている。あなたがたが、「御名があがめられますように」と祈る時、あなたがたは、それがこの世において、また、あなたがたによってあがめられるようにと求めるのである。神はあなたを人々や天使たちの前に、ご自分の子としてお認めになった。「あなたがたに対して唱えられた尊い御名」を、汚すことのないように祈ることを望むのである。神はあなたがたを、神の代表者として世におつかわしになる（ヤコブ2：7参照）。生活のあらゆる行いのうちに、あなたがたは神のみ名をあらわすべきである。この願いは、神のご品性を持つことを要求する。生活と品性において、神の命とご品性そのものをあらわさないならば、神のみ名をあがめることも、世に神をあらわすこともできない。このことは、キリストの恵みと義を受けることによってのみ、なされるのである。

「御国がきますように」

（マタイ610）

神は、わたしたちを子供として愛し、わたしたちのために配慮されるわれらの父である。神はまた、宇宙の偉大な王でもあられる。神のみ国に関する事柄はわたしたちに関

する事柄である。わたしたちは、み国の建設のために働かなければならない。

キリストの弟子たちは、神の栄光のみ国がすぐに来るものと期待していたが、イエスは、この祈りを彼らにお与えになることによって、み国は、その時代に建設されるべきものでないことをお教えになった。彼らは、み国の出現をなお未来のできごととして、祈り求めるのであった。しかし、この祈願は、彼らに対する保証でもあった。彼らは、自分たちの時代にみ国の出現を見ることはできなかったが、イエスが彼らにそのことを祈るようにと言われたことは、神ご自身がお定めになる時に、み国が必ず来るという証拠である。

神の恵みのみ国は、罪と反逆に満ちた心が、日ごとに、神の愛の主権に服する時、今も建設されつつあるのである。しかし、神の栄光のみ国の建設は、キリストがこの世界に再臨される時まで完成を見ることはない。「国と主権と全天下の国々の権威とは、いと高き者の聖徒たる民に与えられる」（ダニエル7：27）。彼らは、「世の初めから」彼らのために用意されたみ国を受けつぐのである（マタイ25：34）。そして、キリストは大いなる力をご自身の手に収めて、統治なさるのである。

天の門は再びあげられ、幾千幾万の聖者とともに、わたしたちの救い主は王の王、主の主として出てこられる。エホバ・インマヌエルは、「全地の王となられる。その日には、主ひとり、その名一つのみとなる」「神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共に」います（ゼカリヤ14：9、黙示録21：3）。

しかし、その出現の前に、「この御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう」と、イエスは言われた（マタイ24：14）。み国は、恵みのよきおとずれが全地に伝えられるまで、出現しないのである。それだから、わたしたちが自分を神にささげ、他の人々を神のためにかち取る時、わたしたちはみ国の出現を早めるのである。自己を神の奉仕にささげ1盲人の目を開き、人々、を「やみから光へ、悪魔の支配から神のみもとへ帰らせ、また、彼らが罪のゆるしを得、……聖別された人々に加わるため」に、「ここにわたしがおりま嵐わたしをおつかわしください」と言う者だけ

が、心から「御国がきますように」と祈るのである（使徒行伝26：18、イザヤ6：8）。

「みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように」（マタイ6：10） [1169]

神のみこころは、神の聖なる律法のうちに表明されている。そして、この律法の原則は天の原則である。神のご意志を知ることは、天使たちの達しうる最高の知識であり、神のみこころを行うことは、彼らの力を働かせる最高の奉仕である。

しかし、天においては、奉仕は、律法主義の精神で行われるようなことはない。サタンがエホバの律法に対して反逆した時、それまで考えもしなかったことに目覚めたかのように、天使たちは、律法があったことを意識した。奉仕をするにあたって、天使たちは、しもべとしてでなく、子として奉仕する。彼らと創造主との間には完全な一致がある。服従は彼らにとって苦役ではない。神に対する愛は、彼らの奉仕を喜びとする。そのように、栄光の望みなるキリストが内住するすべての心のうちに、「わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」という、キリストのみことばが反響するのである（詩篇40：8）。

「みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように」という祈りは、この地上の悪の支配が終わり、罪が永久に滅ぼされ、義のみ国が樹立されるようにという祈りである。その時、地には、天におけるように、「善に対するあらゆる願い」が成就される（Ⅱテサロニケ1：11）。

「わたしたちの日ごとの食物を、きょうもお与えください」

（マタイ6：11）

イエスがわたしたちにお教えになった祈りの前半は、神のみ名、み国、みこころに関するものである。すなわち、み名があがめられますように、み国がきますように、みこころが行われますようにという祈りである、あなたがこのように、神の奉仕をあなたの第一の関心事とする時、あなたは確信をもって、あなた自身の必要が満たされるようにと祈ることができる。あなたが自我を捨て、

自分自身をキリストにささげるなら、あなたは神の家族の一員であり、父の家のものはすべて、あなたのものなのである。神の宝はすべて、今の世にあっても来たるべき世にあっても、あなたに開かれている。天使の奉仕、聖霊の賜物、神のしもべたちの働き――これらすべてはあなたのためである。世界と、その中にあるすべてのものは、それがあなたに役立つ限り、あなたのものである。悪者から受ける敵意さえも、天国へ入るための鍛練という祝福となるのである。もし「あなたがたはキリストのもの」であるなら、「すべては、あなたがたのものなのである」（コリント3：23、21）。

しかし、あなたは、相続財産の支配権をまだ与えられていない子供のようなものである。神は、サタンがその悪だくみによってエデンの最初の夫婦をあざむいたようにあなたをあざむくことがないため、あなたの貴重な所有物をあなたにゆだねなかったのである。キリストは、それをあなたのために、略奪者の手のとどかないところに安全に保持される。子供のように、あなたは日々、その日に必要なものを受ける。毎日あなたは「わたしたちの日ごとの食物を、きょうもお与えください」と祈るべきである。明日のために十分持っていなくても、あわてて取り乱してはならない。「そうすればあなたはこの国に住んで、安きを得る」という神の約束の保証がある。ダビデは、「わたしは、むかし年若かった時も、年老いた今も、正しい人が捨てられ、あるいはその子孫が食物を請いあるくのを見たことがない」と言っている（詩篇37：3、25）。

ケリテ川のほとりでエリヤを養うためにからすをつかわされた神は、ご自分の忠実で自己犠牲的な子供たちを見過ごされることはない。正しく歩む者について、次のように書かれている。「そのパンは与えられ、その水は絶えることがない」「彼らは災の時にも恥をこうむらず、ききんの日にも飽き足りる」「ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、御子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか」（イザヤ33：16、詩篇37：19、ローマ8：32）。

[1170] 寡婦となった母マリヤの生活の苦労を軽くし、家族を養う手助けをなさったイエスは、子供たちに食物を与えるために苦労しているすべての母親に同情なさる。群衆が「弱

り果てて、倒れている」のをごらんになって同情された方は、今も、苦しんでいる貧しい人々をあわれまれる（マタイ9：36）。そのみ手は、祝福をもって彼らに向かって伸ばされている。そして弟子たちにお与えになった祈りそのものの中で、主はわたしたちに、貧しい人々を忘れないようにとお教えになっているのである。

「わたしたちの日ごとの食物を、きょうもお与えください」と祈る時、わたしたちは、自分たちのためだけでなく、他の人々のためにも求めているのである、そして、神がわたしたちにお与えになるものは、わたしたちのためだけに与えられるのではないことを認めるのだ。神は、わたしたちが飢えている者に食物を与えるように、わたしたちに委託しておられる。「あなたは恵みをもって貧しい者のために備えられました」（詩篇68：10）。また主は、次のように言われた。「午餐または晩餐の席を設ける場合には、友人、兄弟、親族、金持ちの隣り人などは呼ばぬがよい。……むしろ、宴会を催す場合には、貧しい人、障害のある人、足の不自由な人、盲人などを招くがよい。そうすれば、彼らは返礼ができないから、あなたはさいわいになるであろう。正しい人々の復活の際には、あなたは報いられるであろう」（ルカ14：1214）。

「神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかたなのである」「少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる」（IIコリント9：8、6）。

日ごとのパンを求める祈りは、肉体をささえる食物だけでなく、魂を養って永遠の命に至らせる霊的な食物をも求めるものである。イエスはわたしたちに、「朽ちる食物のためではなく、永遠の命に至る朽ちない食物のために働くがよい」と言っておられる（ヨハネ6：27）。また、「わたしは天から下ってきた生きたパンである。それを食べる者は、いつまでも生きるであろう」と言っておられる（ヨハネ6：51）。わたしたちの救い主は、いのちのパンである。その愛を見、その愛を心の中に受け入れることによって、わたしたちは天から下ってきたパンを食べるのである。

わたしたちは、みことばを通じてキリストを受け入れる。そして、わたしたちが神のみことばを理解し、その真

理を心に悟ることができるように聖霊が与えられる。神のみことばを読む時には、その日の必要に対してわたしたちを力づける真理を、神が聖霊をつかわしてあらわしてくださるように、日ごとに祈るべきである。

わたしたちの必要とするもの――物質的、霊的祝福を――日ごとに求めるように教えることによって、神は、わたしたちの益のために一つの目的を達成しようとしておられる。神は、わたしたちが神の絶えざるご配慮に依存していることを認めさせようと望んでおられる。それは、わたしたちをご自身との交わりに入れようと望まれるからである。キリストとのこの交わり、すなわち、祈りと、みことばのこの上なく尊い真理を学ぶことを通じて、飢えた魂は養われ、渇く者は命の泉でうるおされるのである。

「わたしたちに負債のある者を皆ゆるしますから、わたしたちの罪をもおゆるしください」

（ルカ11：4）

イエスは、わたしたちが他の人々を赦す時にのみ、自分が神からの赦しを受けることができるとお教えになっておられる。わたしたちを神のもとに引きつけるのは、神の愛であり、その愛がわたしたちの心に触れる時、必ず兄弟に対する愛が生み出されるのである。

主の祈りを言い終わったあとで、イエスは、「もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるして下さるであろう。もし人をゆるさないならば、あなたがたの父も、あなたがたのあやまちをゆるして下さらないであろう」と言われた[1171]（マタイ6：14、15）。赦さない者は、神の憐れみを受ける唯一の通路を遮断しているのである。わたしたちを傷つけた者が、その悪を告白しないならば、彼らを赦さなくともよいと考えてはならない。悔い改めと告白によって心を低くすることは疑いなく彼らのなすべきことである。しかし、わたしたちは、彼らがあやまちを告白してもしなくても、わたしたちに対して罪を犯した者に対して、憐れみの心を持たなければならない。どんなにひどく彼らがわたしたちを傷つけたとしても、恨みをいだき、自分の受けた危害について自己をあわれむ心を持つべきではない。神に対

するわたしたちの罪を赦されたいと望むように、わたしたちは、わたしたちに対して悪をなしたすべての者を赦すべきである。

しかし、赦しは、多くの人が考えるよりももっと広い意味を持っている。神が「豊かにゆるしを与えられる」という約束をお与えになる時、その約束の意味はわたしたちの理解できるすべてを超えるかのように「わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い」と神は言い添えておられる（イザヤ55：79）神の赦しは、罪の宣告からわたしたちを解放する法的行為であるばかりではない。それは罪の赦しであるだけでなく、わたしたちを罪から救うことである。心を変えるものは、あふれでる贖罪的愛である。ダビデは、「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」と祈った時、赦しということを正しく理解していた（詩篇51：10）。また彼は、「東が西から遠いように、主はわれらのとがをわれらから遠ざけられる」と言っている（詩篇103：12）。

神はキリストによって、ご自身をわたしたちの罪のためにお与えになった。主は、その愛をあらわし、ご自分にわたしたちを引き寄せるために、十字架の残酷な死を受け、わたしたちのために、「自らは義なるかたであるのに、不義なる人々のために」罪の重荷を負われたのであった。そして、「互に情深く、あわれみ深い者となり、神がキリストにあってあなたがたをゆるして下さったように、あなたがたも互にゆるし合いなさい」と言っておられる（エペソ4：32）。神の命なるキリストをあなたのうちに住まわせ、あなたを通して天来の愛をあらわし、希望のない者に希望を、罪にうちひしがれた心に、天の平和を与えるようにしよう。わたしたちが神のもとに来る時、まずわたしたちが出会う条件は、自分が神から憐れみを受けたのであるから、他の人々に神の恵みをあらわすために、自己をささげることである。

赦しを与える神の愛を受け、また、その精神をあらわすために欠くことのできない一つのことは、神がわたしたちに対していだいておられる愛を知り、かつ信じることで

ある（ヨハネ4：16参照）。わたしたちがその愛を認めないように、サタンはあらゆるあざむきをもって働いている。彼は、あやまちや罪があまりに大きいので、主はわたしたちの祈りをかえりみてくださらず、わたしたちを祝福し、救ってはくださらないと思わせようとする。わたしたち自身のうちには、欠点以外何も見られず、神にとって魅力のあるものは何も見られない。サタンは、むだだ、品性の欠陥を改めることはできないと、わたしたちに告げる。わたしたちが神のもとに行こうとする時、敵は、祈ってもむだだ、あなたはあの悪事をしたではないか、あなたは神に対して罪を犯し、自己の良心にそむいたではないかとささやくだろう。しかしわたしたちは、「御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである」と敵に告げることができる（ヨハネ1：7）。わたしたちが罪を犯した、祈ることができないと感じる時こそ、まさに祈るべき時なのである。恥じ、誇りをいたく傷つけられているかも知れないが、祈り、かつ信じなければならない。「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった』という言葉は確実で、そのまま受けいれるに足るものである。わたしは、その罪人のかしらなのである」（テモテ1：15）。神との和解すなわち赦しがわたしたちに与えられるのは、わたしたちのわざに対する報いとしてではない。それは、罪深い人間の功績のために与えられるのではなく、わたしたちに対する賜物であって、それが与えられる根拠は、キリストのしみのない義のうちにあるのである。

[1172]

わたしたちは罪の言いわけをして、自分の罪を軽くしようとしてはならない。わたしたちは、罪についての神の評価を受け入れなければならない。それは実に重いものである。カルバリーのみが、罪のいかにおそるべきものかを明らかにする。もしわたしたちが、自分の罪を負わなければならないのであれば、それはわたしたちを、打ち砕くことであろう。しかし、罪なき方がわたしたちに代わってくださった。不義を受けるべき方ではないのに、主はわたしたちの不義を負われた。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」（ヨハネ1：9）。なんと輝かしい真理だろう。神はご

自身の律法に対して義でありながら、なおイエスを信じるすべての者を義とされるお方なのである。「だれかあなたのように不義をゆるし、その嗣業の残れる者のために、とがを見過ごされる神があろうか。神はいつくしみを喜ばれるので、その怒りをながく保たず」（ミカ7：18）。

「わたしたちを試みに合わせないで、悪しき者からお救いください」

（マタイ6：13）

試みとは罪へ誘うことである。これは神から出るものでなく、サタンとわたしたちの心の悪から出るのである。「神は悪の誘惑に陥るようなかたではなく、また自ら進んで人を誘惑することもなさらない」（ヤコブ1：13）。

サタンは、人々と天使たちの前にわたしたちの品性の欠陥をあらわし、わたしたちを彼のとりこだと主張するために、わたしたちを試みにあわせようとするのである。ゼカリヤの象徴的な預言の中で、サタンは、主の使いの右に立って、汚れた衣を着た大祭司ヨシュアを訴え、主の使いが彼のためにしようとしていることに反対していた。これは、キリストが、ご自分のもとに引き寄せようとしておられるすべての人に対する、サタンの態度を示している。敵はわたしたちを罪に導き、わたしたちを全天の前に、神の愛に値しない者であると訴える。しかし、「主はサタンに言われた、『サタンよ、主はあなたを責めるのだ。すなわちエルサレムを選んだ主はあなたを責めるのだ。これは火の中から取り出した燃えさしではないか』」「またヨシュアに向かって言った、『見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう』」（ゼカリヤ3：2、4）。

神は大いなる愛をもって、わたしたちのうちに、聖霊による尊い徳を育成しようとしておられる。神がわたしたちに障害や迫害や困難がくるのをおゆるしになるのは、のろいとしてでなく、わたしたちの生涯の最高の祝福としてである。うち勝ったあらゆる試み、勇敢に耐えたすべての試練は、わたしたちに新しい経験を与え、わたしたちの品性建設の働きを押し進める。神のみ力によって試みに抵抗し

た人は、世界と全天にキリストの恵みの力をあらわすのである。

しかし、たとえきびしい試練がきても、それによって恐れてはならないが、それと同時に、自分の心の悪い欲望に引かれて行くことを、神がおゆるしにならないように祈るべきである。キリストがお与えになった祈りをささげることによって、わたしたちは自己を神の導きにゆだね、神がわたしたちを安全な道にお導きくださるように求めるのである。この祈りを心からささげながら、自分の好き勝手な道を歩こうと決心することはできない。わたしたちは、神のみ手が自分を導くのを待つのである。わたしたちは神のみ声が、「これは道だ、これを歩め」と言うのを聞くだろう（イザヤ30：21）。

サタンのささやきに従うことによって得られる利益を、いつまでも考えていることは安全ではない。罪は、それにふけるすべての者に不名誉と災いをもたらす。しかし、その性質は、人の目をくらます欺瞞的なものであって、甘言をもって人を誘うのである。もしわたしたちが、あえてサ
[1173] タンの領域に踏み込むならば、彼の力から守られるという保証はない。できるかぎりわたしたちは、誘惑者が自分に近づくすべての道を閉ざさなければならない。

「わたしたちを試みに会わせないで」という祈りは、それ自体約束である。わたしたちは自分を神にゆだねるならば、神は「あなたがたを耐えられないような試錬に会わせることはないばかりか、試錬と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである」という保証を持っている（コリント10：13）。

悪から守られる唯一の道は、キリストの義を信じる信仰によって、心の中にキリストを宿すことである。わたしたちが誘惑に負けるのは、利己主義が心にあるからである。しかし、神の大きな愛を見る時、利己主義は憎むべき、いまわしいものに思われ、それを心の中から追い出したいと願うようになる。聖霊がキリストを高め、わたしたちの心がやわらげられる時、試みはその力を失い、キリストの恵みは品性を変えるのである。

キリストは、ご自分が代わって死なれた魂を決してお捨てにならない。人はキリストを離れ、試みに負けることもあろう。しかしキリストは、ご自分の命をもってその代

償を払われた者から離れることはない。もし霊の目が開かれるならば、多くの魂が圧迫され悲嘆にくれて、ちょうど荷車が重い束を積まれて押しひしがれているように、死ぬばかりになっているのを見るだろう。わたしたちは、天使が、危機にひんしている、これらの試みられる者を助けるために、すみやかに飛びかうのを見る。天からのみ使いたちは、これらの魂を取り囲む悪の勢力を押しかえし、彼らを導いて、その足を堅い基の上に置くのである。2つの勢力の間に戦われる戦いは、この世の軍隊によって戦われる戦いと同様に現実的であり、この霊的闘争の結果に永遠の運命がかかっている。

わたしたちに対しても、ペテロに対してと同じく、次の言葉が語られる。「サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った」（ルカ22：31、32）。神がわたしたちを、お見捨てにならなかったことを神に感謝しよう。「御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るため」「そのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」神は、神と人の敵との戦いにおいて、わたしたちをお見捨てにならない（ヨハネ3：16）。主は、「わたしはあなたがたに、へびやさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けた。だから、あなたがたに害をおよぼす者はまったく無いであろう」と言っておられる（ルカ10：19）。

生けるキリストと、つらなって生きなさい。そうすれば、主はみ手をもってあなたをしっかりとささえ、決して放されないであろう。神があなたに対して持っておられる愛を知り、かつ信じなさい。そうすれば、あなたは安全である。その愛は、サタンのあらゆる欺瞞と攻撃に対して不落の要塞である。「主の名は堅固なやぐらのようだ、正しい者はその中に走りこんで救を得る」（箴言18：10）。

「国と力と栄えはかぎりなくあなたのものだからです」

（元訳マタイ6：13参照）

主の祈りの最後の句は、最初の句と同様に、われらの父を、あらゆる力、権威、名の上にある方としてさし示し

ている。救い主は、弟子たちの前に横たわる年月が、彼らの夢想しているような、世的な繁栄と栄誉の輝きの中にあるものでなく、人間の憎しみとサタンの怒りのあらしで暗くなっているのをごらんになった。国家の闘争と破滅の中にあって、弟子たちの歩みは危険に取り囲まれ、彼らの心はしばしば恐怖におそわれるのだった。彼らは、エルサレムが荒廃し、神殿が一掃され、その礼拝が永久に終わりを告げ、イスラエルが、人けのない海岸の難破物のように、全土に散らされるのを見た。イエスは、「戦争と戦争のうわさとを聞くであろう」「民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。またあちこちに、ききんが起り、また地震があるであろう。しかし、すべてこれらは産みの苦しみの初めである」と言われた（マタ イ24：68）。しかし、キリストに従う者は、自分たちの望みが絶たれたのではないか、神は地をお見捨てになったのではないかなどと、恐れるべきではなかった。力と栄えとは神に属し、神の偉大な目的は、何ら妨げられることなく、その完成へ向かって前進するのである。日ごとの必要を言いあらわす祈りの中で、キリストの弟子たちは、悪のあらゆる力と支配を越えて、万物の主宰者であり、彼らの父であり、永遠の友である神を仰ぎ見るように命じられているのである。 [1174]

エルサレムの滅亡は、世界を襲う最後の滅亡の象徴である。エルサレムの破滅によって部分的成就を見た預言は、もっと直接的には、最後の時代に適用されるべきものである。わたしたちは今、大きな厳粛な事件の門口に立っている。かつてなかったような危機が、目前にある。しかし、わたしたちには、弟子たちに対すると同様に、神のみ国が万物を支配するという保証が快く響いて来る。未来の諸事件の成り行きは、わたしたちの造り主のみ手のうちにある。天の王は、教会の諸問題ばかりでなく、国家の運命をも支配しておられる。聖なる教師は、そのご計画の完成のために働くすべての者に、クロスに言われたように、「あなたがわたしを知らなくても、わたしはあなたを強くする」と言っておられる（イザヤ45：5）。

預言者エゼキエルの幻の中で、ケルビムの翼の下に人の手のようなものが見えた。これは、そのしもべに、彼らを成功させるのは神のみ力であることを教えるためであった。神がご自分の使者としてお用いになる人々は、神のみ

わざが自分たちに依存していると思うべきではない。有限な人間が、この責任を負うように任されてはいない。まどろむことがない神、常にそのご計画の完成のために働いておられる神が、ご自身の働きを押し進められるのである。神は悪人の目的をくじき、神の民に危害を加えようとする者の企てを、混乱させられる。王であり、万軍の主である神は、ケルビムの間に座して、国家間の争闘と騒乱の中に、その子らを、今なおお守りになる。天にあって支配される方は、わたしたちの救い主である。主はあらゆる試みを計り、すべての人を試みる炉の火を見守られる。王たちのとりでが破壊され、怒りの矢が神の敵の心臓をつらぬく時にも、神の民は神のみ手の中で安全である。

「主よ、大いなることと、力と、栄光と、勝利と、威光とはあなたのものです。天にあるもの、地にあるものも皆あなたのものです。……あなたの手には勢いと力があります。あなたの手はすべてのものを大いならしめ、強くされます」（歴代志上29：11、12）。

さばかずに、行え

「人をさばくな。自分がさばかれないためである」

（マタイ**7：1**）

自分の行いによって救いを得ようとする努力は、必然的に、罪に対する防壁として、人間的なきびしい要求を積み重ねるように、人々にさせるのである。自分たちが律法を守れないのを知って、彼らは、自分自身のさまざまな規則や規定を作り出して、自分を無理にそれに従わせようとするのである。このようなことはみな、人の心を神から転じて自己へ向けるのである。神の愛は心から消え去り、それとともに隣人に対する愛も消えうせてしまう。人間の作り出した規律は、おびただしい要求を伴うもので、その規律の支持者に、定められた人間的標準に達しないすべての人を、さばくようにさせるのである。自分本位の狭い批判の空気は、けだかく寛大な感情を抑えつけ、人々を自己中心的な裁判官や心の小さなスパイにしてしまう。

パリサイ人は、こういう種類の人々であった。自己の弱さを感じて心を低くすることもなく、神のお与えになった大きな特権に感謝することもなく、彼らは礼拝から出てきた。彼らは、霊的誇りに満たされて出てきた。彼らの主題は、「わたし自身、わたしの気持ち、わたしの知識、わたしの方法」であった。彼ら自身の達成したところが、他の
[1175] 人々をさばく標準となった。 自尊の衣をまとい、彼らはさばきの座に着き、批判し、断罪したのであった。

人々も、だいたいにおいてこれと同じ精神をいだき、人の良心の領域にまで入り込んで、人と神との間に横たわる問題について、互いにさばき合った。イエスが「人をさばくな。自分がさばかれないためである」と言われたのは、このような精神と行為についてであった。すなわち、あなた自身を、標準として立ててはいけないのである。あなたの意見、義務についてのあなたの見解、あなたの聖書解釈

を、他の人々に対する規準とし、あなたの理想、に彼らが達しないからと言って、心の中で彼らを非難してはならない。他の人々の動機を推測し、彼らに判決を下して、他の人々を非難してはならないのである。

「主がこられるまでは、何事についても、先走りをしてさばいてはいけない。主は暗い中に隠れていることを明るみに出し、心の中で企てられていることを、あらわにされるであろう」（コリント4：5）。わたしたちは、人の心を読むことはできない。わたしたち自身、不完全な者であって、さばきの座に着く資格はない。有限な人間は、外から見たところによってさばき得るだけである。行為のかくれた動機を知り、優しく同情をもって処置なさる神にのみ、すべての人間の問題の決定がゆだねられている。

「ああ、すべて人をさばく者よ。あなたには弁解の余地がない。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めている。さばくあなたも、同じことを行っているからである」（ローマ2：1）。他の人を非難したり批判したりする人々は、自分に罪があることをあらわしているのである。なぜなら、彼らも同じことを行っているからである。他の人々を非難することによって、彼らは自分自身の上に判決を下しているのである。神はその判決が正しいと言明される。神は、彼ら自身が自分自身に対して下す決定をお受け入れになる。

泥まみれのこのぶかっこうな足が
どこまでも草花をふみにじっていく。
心は優しいにもかかわらず
固い手が友の心を傷つけている。

「なぜ、兄弟の目にあるちりを見（るのか）」

（マタイ7：3）

「さばくあなたも、同じことを行っている」という宣告も、差し出がましくその兄弟を批判し非難する者の、罪の大きさを言いあらわすには十分ではない。イエスは、「なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある梁を認めないのか」と言われた（マタイ7：3）。

この言葉は、他人の欠点をすばやく認める人を描写している。彼は、品性や生活の中に欠点を見つけたと思う時、

非常に熱心にそれを指摘したがる。しかし、イエスは、このクリスチャンらしくない行為をすることによって形成される品性の特徴は、批判された欠点と比べる時、ちりに対する梁のようなものであると言明なさる。ごく些細なものを世界大の大きさにしてしまうのは、寛容と愛の欠如である。キリストへの全き降伏という悔い改めを経験していない者は、その生活に、救い主の愛の、心を和らげる力をあらわさない。彼らは、福音の穏やかな礼儀正しい精神を誤表し、キリストが代わって死なれた尊い魂を傷つけるのである。救い主がお用いになっている例によれば、批判的精神をほしいままにする者は、彼が非難している相手よりも、もっと大きな罪を犯しているのである。なぜなら、彼は同じ罪を犯すばかりでなく、さらに高慢とあらさがしの罪を犯しているからである。

キリストが品性のただ一つの、真の標準である。自分を他の人々の標準とする者は、キリストの位置に自己を置いているのである。また、父は、「さばきのことはすべて、子にゆだねられた」のであるから（ヨハネ5：22）、他の人の動機をさばくようなことをする者は、神のみ子の大権を奪っていることになるのである。これらの...人よがりの裁判官や批評家は、「すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して立ち上り、自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する」反キリストの側に立っているのである（IIテサロニケ2：4）。

[1176]

最も不幸な結果に導く罪は、パリサイ主義を特徴づけていた、冷たい、批判的な、赦すことをしない精神である。宗教的経験に愛が欠ける時、そこに、イエスはおられない。イエスのご臨在の輝かしい日の光は、そこには見られない。活発な活動も、キリスト抜きの熱心さも、その欠乏を補うことはできない。他人の欠点を見いだすのに驚くほど鋭い識別力はあるかも知れない。しかし、この精神をいだくすべての者に、イエスは、「偽善者よ、まず自分の目から梁を取りのけるがよい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取りのけることができるだろう」と言われる（マタイ7：5）。悪事を行った者が、まっ先に人の悪を思うのである。他の人を非難することによって、彼は自分の心の悪を、隠したり弁解したりしようとする。人が悪の知識を得たのは、罪によってであっ

た。人祖アダムとエバが罪を犯した時、彼らはすぐ互いに責め始めた。このことは、人間の性質がキリストの恵みによって支配されない時、必然的に行うことである。

人がこの非難の精神をいだく時、彼らは、兄弟の欠点と思われるものを指摘することだけでは満足しない。彼らが、ぜひ、こうさせたいと思うことを、穏やかな方法では人にさせることができないと、彼らは強制という手段に訴える。力の及ぶ限り、彼らは、自分たちが正しいと考えるところに従うように、人々を強制する。これが、キリストの時代のユダヤ人がしたことであり、教会がその後、キリストの恵みを失った時に、常に行ってきたことであった。教会は、自分が愛の力に欠けていることをさとって、その教義を強制し、その教令を施行するために、国家の強い腕を求めた。ここに、かつて制定されたあらゆる宗教法を理解するかぎがあり、アベルの時代から今日までのあらゆる迫害を、理解するかぎがある。

キリストは、人々を無理にこさせようとしないで、引きよせられる。キリストのお用いになる唯一の強制は、愛の迫る力である。教会が世俗の権力の支持を求め始める時、教会はキリストのカー神の愛の迫る力を明らかに失っているのである。

しかし、個々の教会員は弱い者であり、いやしが必要なのである。イエスは、人を責める者に向かい、他の人を正そうとする前に、まず自分の目から梁を取りのけ、人をとがめる精神を捨て、自己の罪を告白して、捨て去るように命じておられる。なぜなら、「悪い実のなる良い木はないし、また良い実のなる悪い木もない」からである（ルカ6：43）。あなたが持っている、人を責める精神は悪い実であり、すなわち木が悪いことを示している。あなたが自らを義としようとしてもむだである。あなたの必要とするものは、心の変化である。あなたが他の人々を正すことのできる者となるためには、この経験を持たなければならない。「おおよそ、心からあふれることを、口が語るものである」からである（マタイ12：34）。

だれかの人生に危機が訪れ、あなたが勧告や訓戒を与えようとする時、あなたの言葉は、あなた自身の模範と精神とが示すことができるだけしか、よい影響力を持たない。あなたはよいことを成す前に、よい者とならねばならな

い。あなた自身の心がキリストの恵みによって謙そんにされ、きよめられ、和らげられるまでは、あなたは他の人を変化させろような感化を及ぼすことはできない。この変化があなたのうちに起こる時、あなたが他の人々を祝福するために生きることは、ばらの木が香りのよい花を咲かせ、ぶどうの木が紫色の房を結ぶのと同様に、自然なこととなるであろう。

もしキリストが、あなたのうちに「栄光の望み」となるならば、あなたは、他の人々を見張り、彼らのあやまちを暴露しようというような性向を持たなくなるだろう。非難したりとがめたりしようとしないで、助け、祝福し、救うことがあなたの目的となるだろう。あやまちに陥っている人を取り扱うにあたって、あなたは、「もしか自分自身も誘惑に陥ることがありはしないかと、反省しなさい」という命令に気をつけるだろう（ガラテヤ6：1）。あなたは、自分も幾度もあやまちにおちいり、ひとたび離れたら、正しい道を見いだすことが、どんなに困難であったかを思い
[1177] 出すだろう。あなたは、兄弟をいっそう暗い暗黒の中に押し入れることなく、憐れみに満ちた心をもって、彼にその危険を告げるであろう。

しばしばカルバリーの十字架を仰ぎ、自分の罪が救い主をそこにつけたことを思い起こす人は、決して、自分の罪の度合いを他人の罪と比較して計ろうとはしない。彼は他の人を非難するために、さばきの座にのぼろうとはしない。カルバリーの十字架のかげを歩む者には、あら捜しや自己賞揚の精神はあり得ない。

あやまちを犯している兄弟を救うためには、自己の尊厳を犠牲にすることも、自分の命を捨てることさえもできると思う時にはじめて、あなたは自分の目から梁を取りのけ、兄弟を助ける備えができたと言えるのである。その時あなたは、彼に近づき、彼の心を感動させることができる。非難やけん責によって、悪から立ち返った者はいない。多くの者がそれによってキリストから離され、心を閉じて悔い改めなくなってしまった。優しい精神、穏やかな、人を引きつける態度は、あやまちに陥っている人を救い、多くの罪をおおうことができる。あなた自身の品性のうちにキリストがあらわされる時、それは、あなたの接するすべての者を変化させる力を持つのである。キリス

トが、日ごとに、あなたのうちにあらわされるようにしよう。そうすればキリストは、あなたを通してそのみことばの創造的な力——他の人々をわたしたちの神である主のつるわしさを持つように再創造する静かな、説得力のある、しかも力強い感化力——をあらわされのである。

「聖なるものを犬にやるな」

（マタイ7：6）

イエスはここで、罪の奴隷の状態から脱出しようという願いを持たない人々のことを言っておられる。彼らは、不正や悪にふけることによって、その性質が全く堕落し、悪に愛着を持って、それから離れようとしないのである。キリストのしもべは、福音を、ただ論争とあざけりの種にしかしようとしない人々によって、妨げられてはならない。

しかし、救い主は、いかに罪に落ち込んでいようと、喜んで天の尊い真理を受け入れる者を、決してお貝捨てにならなかった。取税人や遊女にとって、主のみことばは新しい生涯の始まりであった。主が7つの悪鬼を追い出されたマグダラのマリヤは、救い主の墓に最後までいた者であり、復活の朝、主が語りかけられた最初の者だった。キリストの献身的な伝道者パウロとなったのは、福音の断固たる敵であったタルソのサウロであった。表面は、憎悪と侮蔑をあらわしている態度のかげに、また罪や堕落のかげにさえも、キリストの恵みによって救われて、贖い主の冠に宝石のように輝く魂が、隠されていることもあるのである。

「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう」

（マタイ7：7）

主は、そのみことばについて、不信や誤解や誤った解釈の余地を残さないよう、3度繰り返して言われた約束をもう1度繰り返しておられる。主は、神を求める者に、万能の神を信じさせたいと望んでおられるので、「すべて求める者は得、捜す者は見いだし、門をたたく者はあけてもらえるからである」とつけ加えておられる（マタイ7：8）。

ただ、あなたが神の恵みを渇望し、その勧告を望み、その愛を熱望することのほかは、なんの条件も設けられていない。

「求めよ」。求めることは、あなたが、必要を認めていることをあらわす。あなたが信仰をもって求めるなら、与えられるのである。主は誓っておられるから、それは必ず成し遂げられる。もしあなたが真に悔い改めて主に来るならば、主のお約束を求めるのを出すぎたことと考える必要はない。キリストにならって完全な品性を築こうとし、必要な祝福を求めるならば、主は、あなたが、まちがいのない約束に従って求めていると仰せになるのである。あなたは、自分が罪人であるということを感じて自覚すれば、主の情けと憐れみとを、何らはばかることなく求めてよいのである。神のもとに来ることのできる条件は、あなたがきよいということではなく、神にすべての罪と不義からきよめていただきたいと願うことである。わたしたちが、いつ、どんな時でもお願いできるというのは、わたしたちが大きな必要に迫られていて、神と神の腰いの力がなければどうにもならない状態に陥っているからである。

[1178]

「捜せ」。神の祝福だけでなく、神ご自身を求めなさい。「あなたは神と和らいで、平安を得るがよい」（ヨブ22：21）。捜しなさい。そうすれば、見いだすであろう。神はあなたを捜し求めておられる。神のもとに行きたいという願いそのものが、聖霊が引き寄せていることにほかならない。その引き寄せる力に、身をゆだねなさい。キリストは、試みられる者、あやまちに陥っている者、信仰のない者のためにとりなしておられる。主は彼らを引き上げて、ご自分との交わりに入れようとしておられる。「あなたがもし彼を求めるならば会うことができる」（歴代志上28：9）。

「門をたたけ」。わたしたちは特別の招きをいただいて、神のもとに来る。神はわたしたちを、謁見室に迎え入れようと待っておられる。イエスに従った最初の弟子たちは、道を歩きながら、あわただしい会話をすることでは満足しなかった。彼らは、「ラビ（訳して言えば、先生）どこにおとまりなのですか」と言った。「……そこで彼らはついて行って、イエスの泊まっておられる所を見た。そして、その日はイエスのところに泊まった」（ヨハ

ネ1：38、39）。このように、わたしたちは、神とのきわめて親しい交わりに入ることを許されるのである。「いと高き者のもとにある隠れ場に住む人、全能者の陰にやどる人」（詩篇91：1）。神の祝福を望む者は、主よ、あなたは、「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう」と言われましたと言って、確信をもって恵みの戸をたたいて待つことである。

イエスは、そのみことばを聞くために集まった人々を見、群衆が、神の憐れみといつくしみを認めろことを心から望まれた。彼らの必要と神の喜んでお与えになるみ心とを説明するために、イエスは、親にパンを求める空腹な子供の姿をお示しになった。「あなたがたのうちで、自分の子がパンを求めるのに、石を与える者があろうか」と主は言われた。主は、子に対する親の優しく自然な愛情に訴えて、「このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物をすることを知っているとすれば、天にいますあなたがたの父はなおさら、求めてくる者に良いものを下さらないことがあろうか」と言われた（マタイ7：9、11）。父の心を持つ者は、飢えてパンを求める子供に、背を向けることはないであろう。期待だけさせておいて失望させ、その子供をいい加減にあしらい、じらすなどということを、父ができると考えられるだろうか。父が子供に栄養のある良い食物を与えると約束しながら、石を与えるだろうか。神がその子らの訴えにお答えにならないなどと考えて、神をはずかしめてよいものだろうか。

あなたがたは人間であり悪い者であっても、「自分の子供には、良い贈り物をすることを知っているとすれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さらないことがあろうか」（ルカ11：13）。神ご自身の代理者である聖霊は、すべての賜物のうち最大のものである。すべての「良い物」はこの中に含まれている。創造者ご自身、これ以上大きなもの、これ以上良いものをお与えになることはできない。わたしたちが悩みのうちにあって、主に、わたしたちを憐れみ、聖霊によってお導きくださるように求める時、主は決してわたしたちの祈りを退けることはされない。飢えた子供を拒むことは、親にはできることかも知れないが、神は、乏しさを感じて主に切望する心の叫びを

決してお拒みにならない。神はその愛を、なんと驚くばかりの優しさをもって、描写しておられることであろう。逆境の時に神は自分たちを顧みてくださらないと考えている人々に対して、神の心からのメッセーンは次のことばである。「シオンは言った、『主はわたしを捨て、主はわたしを忘れられた』と。『女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことかあっても、わたしは、あなたを忘れることはない。見よわたしは、たなごころにあなたを彫り刻んだ』」（イサヤ49：1416）。

[1179]

神のみことばの中の約束はみな、主がみことばをもって保証を与えておられるのであるから、その一つ一つがわたしたちの祈りのテーマとなるのである。わたしたちに必要な霊的祝福は、なんであっても、イエスを通して求めることができるというのがわたしたちの特権である。わたしたちは、子供のような単純さて主にわたしたちの必要なものを申し上げることができる。わたしたちは、主に命のパンとキリストの義の衣を求めるのと同じように、パンや衣服などこの世のものを主に申し上げることができる。あなたの天の父はこれらすべてのものがあなたに必要であることを、知っておられる。あなたはそれらについて、神に求めるように招かれているのである。すべての恵みは、イエスの名によって与えられる。神はその名を尊び、あなたの必要を、豊かな富のうちから惜しむことなく満たしてくださる。

しかし、父と呼んで神のみもとにくる時、あなたは自分が神の子であると認めるのを忘れてはならない。神のいつくしみに信頼するばかりでなく、神の愛が変わらないことを知って、万事において神のご意志にまかせることである。神のお働きをなすために、あなた自身をささげることである。イエスが、「求めなさい。そうすれば、与えられるであろう」という約束をお与尺になったのは、まず、神の国とその義とを求めよとお命じになった人々に対してであった（ヨハネ16：24）。

天においても地においても、一切の権威を持つお方からくる賜物は、神の子らのために貯えられているその賜物は非常に尊いもので、高価な犠牲である贖い主の血潮によって与えられたものである。それはまた、人の心のどんな願

いでも満足させ、永遠に続くものであって、幼な子のように神のもとにくるすべての人々が受けて、その祝福にあずかるのである。神の約束をあなたに与えられたものとして受け、それを神ご自身のお約束の言葉として神の前に申し上げるがよい。そうすれば、あなたは喜びに満ちあふれるであろう。

「だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ」

（マタイ7：12）

わたしたちに対する神の愛の保証に基づいて、イエスは、人間と人間のあらゆる関係についての包括的な一つの原則として、お互いに愛し合うようにお命じになった。

ユダヤ人たちは、自分たちの受けるもののことばかり考えていた。彼らがあくせく求めたことは、権力や尊敬や奉仕など、当然自分たちが受けるべきと彼らが考えたものを得ることであった。しかし、キリストは、わたしたちが心を用いるべきことは、どれだけ自分が受けるかということではなく、どれだけ自分は与えることができるかということでなければならないと、お教えになっている。わたしたちが他の人々にすべきことの標準は、他の人々がわたしたちにすべきであるとわたしたちが考えることなのである。

他の人々と交際する場合に、彼らの立場になってみなさい。彼らの感情、彼らの困難、彼らの失望、彼らの喜び、彼らの悲しみを味わってみなさい。あなた自身を彼らと同じものと考え、もしあなたが彼らの立場に立っていたならば、あなたが彼らに取り扱ってもらいたいと考えるように彼らにするのである。これが誠実ということの真の規則である。それは、「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」という律法を言い替えたものである（マタイ22：39）。また、それは、預言者の教えの本質である。それは天の原則であり、天の聖なる交わりにふさわしいとされるすべての者のうちに形成されるものなのである。

黄金律は真の礼儀の原則であって、それが最も真実にあらわされたのは、イエスの生涯と品性のうちにおいてであった。ああ、なんと柔らかな美しい光が、わたしたちの [1180]
救い主の日々の生活のうちに輝き出たことだろう。なんと

いうかぐわしさが、そのみ前に漂っていたことだろう。この同じ精神が、その子らのうちにあらわされるだろう。キリストがともにお住みになる者は、聖なるふんい気に包まれるだろう。純潔という彼らの白い衣は、主の園のかぐわしい香りを放つだろう。彼らの顔は主の光を反映し、つまずき、疲れ切った足の進む道を、照らすだろう。

何が完全な品性を形造るかについて、真の理想を持つ者は、キリストのような同情と優しさを必ずあらわす。恵みの力は心を和らげ、感情を洗練し、きよめ、主の思いやりと礼儀についてわきまえさせる。

しかし、黄金律にはもっと深い意味がある。神の多くの恵みの管理者とされた者はすべて、無知と暗黒のうちにある魂に、自分がその人たちの立場にあったならば、自分にしてもらいたいと願うことを、するように召されているのである。使徒パウロは、「わたしには、ギリシャ人にも未開の人にも、賢い者にも無知な者にも、果すべき責任がある」と言った（ローマ1：14）。あなたは、暗やみに閉ざされて全く堕落した人よりも、神の愛を知り、神の恵みの豊かな賜物を受けているために、これらの賜物をその人に分け与えるべき負い目があるのである。

このことはまた、この世の賜物や祝福についても同様である。あなたが何かを人以上に持っていれば、その程度に応じて、あなたはあなたより恵まれないすべての人に対して負い目がある。もし、わたしたちが富、または何か生活をうるおすものでも持っているならば、わたしたちには、苦しんでいる病人、寡婦、孤児のめんどうを見るという、きわめて厳粛な義務が負わせられている。わたしたちは、自分の状態と彼らの状態とが入れ替わっていたならば、自分がその人々にしてもらいたいと思うちょうどその通りのことを、彼らにしなければならないのである。

黄金律は、山上の垂訓のほかの箇所で、「あなたがたの最るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう」と教えられているのと同じ真理を教えている（マタイ7：2）。わたしたちが他の人に対してすることは、善であれ悪であれ、祝福またはのろいとなって、確実にわたしたちにはね返ってくる。自分が与えるものを、自分が再び受けるのである。わたしたちが他の人に与えるこの世の祝福は、同種のもので返される、事実しばしば返されてい

るのである。わたしたちが与えるものは、必要な時に、よく、4倍もの価値あるものとなってもどってくる。しかし、そればかりでなく、すべてわたしたちが人に与えたものは、この世においても、神の愛が豊かにそそぎ込まれることにより報われる。この神の愛こそ、天のあらゆる栄光と宝の総計である。また、人に悪を行えば、それも再び返ってくる。人を勝手気ままに非難したり失望させたりする人は、他の人を通らせたその場所を自分も通らされるという経験をするだろう。彼は、自分が同情と優しさに欠けていたために、その人たちが苦しんだことを知るだろう。

このことをお命じになったのは、わたしたちに対する神の愛である。神はわたしたちが、自分の心の無慈悲さを憎み、イエスに住んでいただくため心を開くようお導きになる。こうして、悪から善が生じ、のろいと見えるものが祝福となる。

黄金律の標準は、キリスト教の真の標準である。これに達しないものはみな、にせ物である。キリストが、ご自身をお与えになるほどの価値をお認めになった人間を、低く評価するよう人々を導く宗教、人間の必要や苦しみや権利に対して無関心にするような宗教は、にせの宗教である。貧しい人、苦しむ人、罪深い人の要求を軽んじることによって、わたしたちは、自分がキリストに対する反逆者であることを立証する。キリスト教が世にあって、このように力がないのは、人々がキリストの名を称しながら、その生活においてキリストの品性を否定しているからである。主のみ名は、これらのことのゆえにけがされている。

よみがえられたキリストの栄光が、照り輝いていた輝かしい使徒時代の教会について、次のように書かれている。「だれひとりその持ち物を自分のものだと主張する者がなく」「彼らの中に乏しい者は、ひとりもいなかった」「使徒たちは主イエスの復活について、非常に力強くあかしをした。そして大きなめぐみが、彼ら一同に注がれた」「そして日々心を1つにして絶えず宮もうでをなし、家ではパンをさき、よろこびとまこころとをもって、食事を共にし、神をさんびし、すべての人に好意を持たれていた。そして主は、救われる者を日々仲間に加えて下さったのである」（使徒行伝4：32、34、33、2：46、47）。 [1181]

天と地のどこをさがしてみても、わたしたちの同情と助けを必要とする人々に対する憐れみの行為にあらわされる以上に、力強い真理はあらわされていない。これは、イエスのうちにある真理である。キリストの名をとなえる人々が、黄金律の原則を実行する時、使徒時代に見られた同じ力が福音に伴うだろう。

「命にいたる門は狭く、その道は細い」

（マタイ7：14）

キリストの時代のパレスチナの人々は、城壁をめぐらした町々に住んでいた。これらの町はたいてい、丘か山の上にあった。門は日没に閉じられたが、その門まで、岩角けわしい道がきており、日の暮れるころに家へと向かう旅人は、しばしば、夜にならないうちに門に着くよう、骨の折れる上り道を急いで進まなければならなかった。漫然と歩く者は外に残された。

城内の家庭と休み場への狭い上り道は、そのままクリスチャンの歩む道の象徴であることを、イエスにまざまざと印象づけた。おたしがあなたがたの前に備えた道は狭い、と主は言われた。その門を入ることは困難を伴う。なぜなら黄金律は、誇りと利己主義とを一切排除するからである。もっと広い道があることは、事実である。しかし、その終わりは、滅びである。もしあなたが、霊的生命の道を上ろうと思うならば、あなたは絶えず上らなければならない。なぜならそれは上り道だからである。あなたは少数の人々とともに、行かなければならない。なぜなら多くの者が下り道を選ぶからである。

全人類は、死への道をあらゆる世俗的な思い、あらゆる利己主義、あらゆる誇り、不正直、道徳的堕落を持ったまま歩くことができる。その道には、どんな人の意見や教理も受け入れる余地がある。また、自分の好みに従ったり、利己主義のおもむくままにどんなことでもする余地がある。破滅への道を行くためには、その道を捜す必要はない。門は大きく、道も広く、足は自然に、死にいたる道に向かうからである。

しかし、命にいたる道は細く、その門は狭い。もしあなたが、まとわりつく罪に愛着を持つならば、あなたは、そ

の道はあまりに細くて、入ることができないことを知るだろう。もしあなたが主の道を歩き続けようと思うならば、あなた自身の道、あなた自身の意志、あなたの悪習慣を捨てなければならない。キリストに仕えようと思う者は、世の意見に従ったり、世の標準に応じたりすることはできない。天の道は、高位富裕の人々が堂々と進むにはあまりに狭く、自己中心的な野心をほしいままにするにはあまりに細く、安逸を愛する者が上るにはあまりにも険しい。キリストは労苦、忍耐、自己犠牲、非難、貧困、罪人たちの反対にあわれたが、それは、仮にわたしたちが神のパラダイスに入るとすれば、それがわたしたちの受けるべき運命でなければならないということである。

しかし、だからと言って、上へ向かう道は困難な道、下へ向かう道は安易な道と考えてはならない。死への道には、どこにでも、苦痛と刑罰があり、悲しみと失望があり、その道を行くなとの警告がある。神の愛は、不注意で強情な者が簡単に滅びに陥らないようにしたのである。サタンの道が魅力的に見えるのは事実である。しかし、それらはすべて欺きである。悪の道には、激しい後悔と思いわずらいがある。誇りと世俗的な野心を追求することは、楽しいことだと思うかも知れない。しかしその果ては、苦しみと悲しみである。利己的な企ては将来に輝かしい夢を描かせ、快楽を約束する。しかし、自己を中心にした望みがわたしたちの幸福をこわし、わたしたちの生涯をみじめなものにするのに気づくのである。下り坂の門は、花で飾られているかも知れない。しかしその道には、いばらがある。その門から輝く希望の光は、薄れていって失望のやみと化し、その道をたどる魂は、永遠の夜の やみの中に沈んで行くのである。 [1182]

「不信実な者の道は滅びである」。しかし、知恵の「道は楽しい道であり、その道筋はみな平安である」（箴言13：15、3：17）。キリストに服従する行為、キリストのための自己犠牲のすべての行為、耐え抜いたすべての試練、誘惑に対する勝利は、ことごとく、輝く最後の勝利へ前進する一歩である。わたしたちがキリストを導き手とするならば、キリストはわたしたちを安全に導かれる。どんな罪人も道に迷う必要はない。おののきながら求める者で、一人として、純潔なきよい光の中を歩むことができな

いものはない。その道が非常に細く、また、罪が黙認されないほどきよいものであっても、そこを歩くことは、すべての人に保証されているのであって、どんなに疑い深くおそれおののく魂も、「神はわたしを顧みてくださらない」と言う必要はない。

道は悪く、坂は急であるかも知れない。右や左に、おとし穴があるかも知れない。また、わたしたちは、旅の労苦を耐えなければならないかも知れない。疲れた時も、休息を切望する時も、労苦を続けなければならないかも知れない。弱っている時にも、戦わなければならないこともあろう。失望に陥ってもなお、希望を持たなければならない。しかし、キリストに導かれて、わたしたちは必ず最後には、望む港に達することができるのである。キリストご自身が、わたしたちの先に悪路を進み行かれ、わたしたちの足のために道をなめらかにされた。

永遠の命に導くこのけわしい道のほとりには、いたる所に、疲れた者を力づける喜びの泉がわき出ている。知恵の道を歩く者は、困難の時にも大きな喜びがある。彼らの魂の愛する主が、目には見えないが、彼らのそばを歩まれるからである。一歩高くのぼるごとに、一層はっきりとイエスのみ手が触れるのを感じる。一歩一歩、見えないお方から来る一層輝かしい栄光のきらめきが、彼らの道を照らす。そして彼らの賛美の歌は、一層調子を高めて天へのぼり、みくらの前の天使たちの歌と一つになるのである。「正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して真昼となる」（箴言4：18）。

「狭い戸口からはいるように努めなさい」

（ルカ13：24）

日の暮れる前に、町の門に着こうと急いでいる遅れた旅人は、途中にあるものに心をひかれて、わき道へそれることはできなかった。彼は、門に入るということしか考えていなかった。これと同じ強い目的が、クリスチャン生活には要求されるとイエスは言われた。わたしはあなたがたに、品性の栄光を示した。これが、わたしの国の真の栄光である。それはあなたがたに、地上の支配権を与えると約束はしない。しかし、それは、あなたがたの最高の希望と

努力とに値するものである。わたしは、世界大帝国の主権のために、戦うようにあなたがたを召したのではない。しかし、だからといって、何の戦いもせず1勝利を得なくてもよいなどと考えてはならない。わたしは、あなたがたに、わたしの霊的王国に入るために戦い、苦心せよと命じるのである。

クリスチャンの生涯は戦いであり、進軍である。しかし、勝利は、人間の力では得られない。戦場は心の中にある。わたしたちの戦い、すなわち、人間の戦わなければならない最も激しい戦いは、自己を神の意志に従わせること、心を、愛の主権に屈服させることである。血肉による古い性質は、神の国をつぐことができない。生まれつきの性癖、古い習慣は捨てなければならない。

霊的王国に入ろうと決心する者は、自分の生まれ変わらない性質のあらゆる力と欲望とが、暗黒の王国の勢力に支援されて、自分に手向かってくるのに気づくだろう。利己心と誇りとは、それが罪である二とを指摘するすべてのものに対して反抗する。わたしたちは、自分を支配しようとする悪い欲望や習慣を、自分で征服することはできない。わたしたちは、自分を奴隷の状態におく強い敵に、うち勝つことはできない。わたしたちに勝利を与えることができるのは、神だけである。神は、わたしたちが自分自身を、また、自 分の意志や行動を、支配することを望んでおられ [1183]
る。しかし、神はわたしたちの同意と協力がなければ、わたしたちのうちにお働きになることはできない。聖霊は、人に与えられた才能と能力を通して、働くのである。わたしたちの精力は、神と協力するよう要求されている。

熱心な多くの祈りと、一歩一歩自らを低くすることなしには、勝利は得られない。わたしたちの意志は、神の力と協力するように強いるべきものではなくて、それは、自発的にささげられなければならない。たとえ、100倍もの強さをもって、神の霊の力をあなたに強制的に及ぼすことができるとしても、それは、あなたをクリスチャン、すなわち天にふさわしい民とすることはできないだろう。サタンのとりでは、それによって打破されないだろう。意志が、神の意志の側に置かれなければならない。あなたは、自分の力では、あなたの目的や願望や傾向を、神の意志に従わせることはできない。しかし、もしあなたが、「喜んでそ

うする者とされることにこころよく同意する」ならば、神はあなたのためにわざをなしとげられ、「神の知恵に逆って立てられたあらゆる障害物を打ちこわし、すべての思いをとりこにして、キリストに服従させ」るのである（Ⅱコリント10：5）。その時あなたは、「恐れおののいて自分の救を達成」するのである。「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである」（ピリピ2：12、13）。

しかし多くの人は、キリストのうるわしさと天の栄光に引きつけられながらも、それらを自分のものとすることのできる唯一の条件を、回避するのである。広い道を歩いていても、大勢の人々が自分の歩いている道に十分満足してはいない。彼らは、罪の束縛から解放されたいと切望し、自分の力で自分の罪深い習慣をやめようとする。彼らは細い道と狭い門をながめるが、利己的な快楽や世を愛する心や高慢やきよめられていない野心が、彼らと救い主との間に障壁を設ける。自分の意志を放棄し、自分の好きなものやしたいことを捨てることは、犠牲を要するので、彼らは、ためらい、また引き返していくのである。「はいろうとしても、はいれない人が多い」のである（ルカ13：24）。彼らは良いものを望み、それを得ようとしていくらかの努力はする。しかし、それを選ばない。彼らはすべてのものを犠牲にしても、それを得ようという確固たる目的を持っていない。

勝利を得ようとする者にとって、唯一の勝つ見込みは、自分の意志を神の意志と一致させ、毎日、毎時間、神と協力して働くことにある。わたしたちは自己を保持したまま、神の国に入ることはできない。もしわたしたちがきよさに達するとすれば、それは自己を捨て、キリストの心を心とすることによってである。高慢とうぬぼれとは、十字架につけられなければならない。わたしたちは、要求される価を喜んで払うだろうか。わたしたちは、自分の意志を喜んで神の意志と完全に一致させるだろうか。わたしたちが同意しない限り、神の変化させる恵みは、わたしたちの上にあらわされない。

わたしたちの戦うべき戦いは、「信仰の戦い」である。使徒パウロは、「わたしは……、わたしのうちに力強く働

いておられるかたの力により、苦闘しながら努力しているのである」と言っている（コロサイ1：29）。

ヤコブは、その生涯の大きな危機に当面した時に、一人離れて祈った。彼は品性を変えていただきたいという切なる願いを、心にいだいていた。しかし、彼が神に懇願していた時、敵と思われる者の攻撃にあって、終夜、彼は必死になって格闘した。しかし彼の魂の願いは、命がどんな危険にさらされても変わらなかった。彼の力がまさに尽き果てようとした時、キリストは神の力をあらわされた。キリストのみ手がふれた時、ヤコブは自分が争っていた方がだれであるかを知った。傷つき、どうすることもできなくなったヤコブは、救い主の胸によりすがり、祝福を懇願した。彼はあくまで主におすがりし、願い求めることをやめようとはしなかった。キリストは、「わたしの保護にたよって、わたしと和らぎをなせ、わたしと和らぎをなせ」という約束に従って、このあわれな悔い改めた魂の嘆願をおきき入れになった（イザヤ27：5）。ヤコブは、「わたしを祝福してくださらないなら、あなたを去らせません」と切に訴えた（創世記32：26）。この堅固な精神は、ヤコブの組み打ちの相手であった主によって、吹き込まれたものであった。彼に勝利を与えたのは、キリストであった。「あなたが神と人とに、力を争って勝った」と言って、主は、彼の名をヤコブからイスラエルにお変えになった（創世記32：28）。ヤコブは、自分の力で懸命に得ようとして得られなかったものを、自己放棄と確固たる信仰によって得たのであった。「わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である」（ヨハネ5：4）。 [1184]

「にせ預言者を警戒せよ」

（マタイ7：15）

偽りの教師が起こって、あなたがたを細い道と狭い門から引きはなすであろう。彼らを警戒しなければならない。彼らは、羊の衣を着ているが、その内側は、強欲なおおかみである。イエスは、偽りの教師とまことの教師を見分ける方法を、お教えになった。主は、「あなたがたは、その実によって彼らを見わけるであろう。茨からぶどうを、あ

ざみからいちじくを集める者があろうか」と言われた（マタイ7：16）。

わたしたちは彼らを、そのりっぱな話や高尚な公言によってためすように命じられてはいない。彼らは、神のみことばによって検討されるべきである。「ただおきてとあかしとを求めなさい。彼らのいうところがこのことばに一致しなければ、光はない」「わが子よ、知識の言葉をはなれて人を迷わせる教訓を聞くことをやめよ」（イザヤ8：20・文語訳参照、箴言19：27）。これらの教師たちは、どのような教えを伝えているだろうか。それはあなたに、神を敬いおそれるようにさせるだろうか。それはあなたを、神のいましめに忠誠をつくさせ、神を愛するようにさせるものだろうか。もし人々が道徳律の重要性を感じないで、彼らが神の教えを軽んじ、彼らが神の律法の最も小さいいましめの一つでも破り、またそうするように人に教えたりするならば、彼らは神の御目には何の価値もない。わたしたちは彼らの主張が、何の根拠もないものであることがわかる。彼らは、神の敵である暗黒の王が始めた同じ働きをしているのである。

キリストの名をとなえ、そのしるしをつけている者が、皆キリストのものであるというわけではない、わたしの名によって教えた多くの者が、最後に足らないことを見いだされるであろうとイエスは言われた。「その日には、多くの者が、わたしにむかって『主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。また、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うであろう。そのとき、わたしは彼らにはっきり、こう言おう、『あなたがたを全く知らない。不法を働く者どもよ、行ってしまえ』」（マタイ7：22、23）。

まちがっていながら、自分は正しいと信じている人々がいる。キリストを主ととなえ、キリストの名によって大きなわざを行っているととなえながら、実は彼らは、不法を行う者たちなのである。「彼らは口先では多くの愛を現すが、その心は利におもむいている」（エゼキエル33：31）。神のみことばを宣言する者は、彼らには「美しい声で愛の歌をうたう者のように、また楽器をよく奏す

る者のように思われる。彼らは、あなたの言葉は聞くが、それを行おうとはしない」（エゼキエル33：32）。

弟子であると公言するだけでは、何の価値もない。魂を救うキリストに対する信仰とは、多くの人が表明しているようなものではない。彼らは、「信じなさい、信じなさい、あなたは律法を守る必要はない」と言う。しかし、服従へ導かない信仰は、臆断である。使徒ヨハネは、「『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない」と言っている（ヨハネ2：4）。だれも、特別な摂理や奇跡的なあらわれなどがあるからといって、彼らの働きやその主張する思想が正しい証拠であると考えてはならない。人々が神のみことばを軽んじて語り、自分の印象や感情や行動を神の標準以上に見なす時、彼らのうちには光がない— とがわかるのである。 [1185]

服従は、弟子であることの試金石である。わたしたちの神に対する愛の真実性を証拠だてるのは、律法の遵守である。わたしたちの受け入れる教理が心の罪の根を断ち、魂を汚れからきよめ、きよきに至る実を結ばせるなら、わたしたちはそれが神の真理であると知ることができる。博愛、親切、情け、同情がわたしたちの生活にあらわされ、正しいことをする喜びが心の中にあり、わたしたちが自分ではなくて、キリストをあがめるならば、わたしたちの信仰は正しいものであると知ることができる。「もし、わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである」（ヨハネ2：3）。

「倒れることはない。岩を土台としているからである」

（マタイ7：25）

人々は、キリストの言葉に深い感動を覚えた。真理の原則の聖なる美しさが、彼らを引きつけた。そしてキリストの厳粛な警告が、心を探る神の声のように彼らに聞こえた。その言葉は、彼らの持っていた思想や意見を根こそぎゆさぶった。その教えに従うならば、思考や行動のあらゆる習慣を、変えざるを得ないのである。それは、彼らを彼らの宗教教師と衝突させることになるだろう。なぜなら、

それは、ラビたちが幾世代にもわたって築いてきた全機構を、一切くつがえすことになるからである。それで、人々の心はそのことばに反応したけれども、それを人生の指針として喜んで受け入れる者は、ほとんどいなかった。

イエスは、お語りになった言葉を実行することが、どんなに大切であるかを、驚くほどはっきりした例話をもって示し、山上の垂訓を終えられた。救い主のまわりに群がった群衆の中には、ガリラヤ湖のほとりで生活していた人々が大勢いた。彼らが山腹にすわってキリストの言葉を聞いていた時、彼らは、山の流れが海へ注ぐ谷間や峡谷を望むことができた。夏には、これらの流れは枯れ、ただ乾いた、ほこりっぽい川床のみが残るのであった。しかし、冬の嵐が丘に吹きつけると、川は激しい怒り狂う奔流となり、時には谷間全体に広がり、とどめることのできない洪水となって、あらゆるものを運び去った。そのような時、しばしば、草の茂った平野に、農夫たちの建てた、見たところ危険の及ばないように思われた小屋が流されてしまった。しかし、家は、丘の高い所の、岩の上に建てられていた。またあるところでは、住居が全部岩で造られ、それらの多くは1000年もの長い間、嵐に耐えてきたのであった。これらの家は、骨折って建てられた。そこまで行くのは容易でなかったし、その場所は、草の茂った平野よりも好ましくないように思われた。しかし、それは岩の上に建てられていたので、どんな風も洪水も嵐も、ただむなしくそれらを打つばかりであった。

わたしがあなたがたに語ったことばを受け入れて、それらを品性と生活の基礎とする者は、家を岩の上に建てた人々のようであるとイエスは言われた。それより幾世紀も前に、預言者イザヤは、「われわれの神の言葉はとこしえに変ることはない」と書いたのであった（イザヤ40：8）。またペテロは、山上の垂訓がなされたずっとあとで、イザヤのこの言葉を引用して、「これが、あなたがたに宣べ伝えられた御言葉である」とつけ加えている（ペテロ1：25）。神のみことばは、この世界の中で唯一のゆるがないものである。これが確かな基である。「天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない」と、イエスは言われた（マタイ24：35）。

律法の大原則、また神のこ性質そのものの偉大な原則は、山上におけるキリストのみことばのうちに具体的に表現されている。それらのことばの上に建てる者はだれでも、千歳の岩なるキリストの上に建てているのである。みことばを受け入れることによって、わたしたちは、キリストを受け入れるのである。このようにキリストのみことばを受け入れる者のみが、キリストの上に建てているのである。「すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできない。そして、この土台はイエス・キリストである」（コリント3：11）。「わたしたちを救いうる名は、これを別に しては、天下のだれにも与えられていない」（使徒行伝4：12）。神の啓示であり、言葉であるキリスト、そして、彼のあらわされた品性、その律法、その愛、その生涯こそ、わたしたちが永遠の品性を築きうる唯一の土台である。 [1186]

わたしたちは、キリストのみことばに従うことによって、キリストの上に建てるのである。義人であるということは、単に義を楽しむ者ではなく、義を行う者のことである。聖潔は、恍惚状態ではない。それは、神にすべてをささげる結果である。それは、天の父の意志を行うことである。イスラエルの子孫が約束の地の国境に野営した時、彼らは、カナンについての知識を持ったり、カナンの歌を歌うだけでは十分でなかった。それだけでは、彼らは、美しい土地のぶどう園やオリーブ畑を所有することはできなかったろう。彼らは、神のお教えに従うとともに、占領すること、条件に応じること、神に対する生きた信仰を働かすこと、神の約束を自分のものとすることによってはじめて、それを実際に、自分の所有とすることができた。

信仰とは、キリストのみことばを行うことにある。行うのは、神の恵みを得るためではなく、全くそれに値しないのに、わたしたちが神の愛の賜物を受けたからである。キリストは、人間の救いを単なる告白によるものではなく、義の行いにあらわされる信仰によるものとされたのである。単に言うだけでなく、行うことが、キリストに従う者に期待されている。品性が築かれるのは、行為によってである。「すべて神の御霊に導かれている者は、すなわち、神の子である」（ローマ8：14）。心に御霊が触れる者では

なく、時々、御霊の力に屈伏する者でもなく、みたまに導かれている者が神の子なのである。

あなたは、キリストに従う者になりたいと願いながら、どのようにして始めたらよいかわからずにいるだろうか。あなたは暗い中で、光を見いだす方法を知らないでいるだろうか。今、持っている光に従うことである。あなたの知っている神のみことばに、従う決心をしなさい。神の力、神の命そのものが、みことばのうちに宿っている。あなたがみことばを、信仰をもって受け入れる時、それはあなたに服従する力を与える。あなたの持っている光に従えば、もっと大きな光がくる。あなたは神のみことばの上に築いているのであって、あなたの品性は、キリストの品性に型どってかたちづくられる。

まことの土台であるキリストは、生きた石である。キリストの命は、彼の上に建てられる、すべての者に与えられる。「あなたがたも、それぞれ生ける石となって、霊の家に築き上げられ」「建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長」する（ペテロ2：5、エペソ2：21）。石は土台と一つになった。なぜなら共通の生命が全体に宿るからである。その建物を嵐もくつがえすことはできない。なぜなら、

神の生命にあずかるものは、

神とともに、いつまでも生きるからである。

しかし、神のみことば以外の土台の上に建てられた建物は、みな倒れる。キリストの時代のユダヤ人のように、人間の思想や見解という土台の上に、人間の作り出した形式や儀式の土台の上に、さらに、その他キリストの恵みから離れてする行いの上に建てる者は、みな、品性という建物を、もろくくずれる砂の上に築いているのである。試みの激しい嵐は、砂の土台を流し去り、その家は、時の岸辺に打ちあげられる難破物となって残るだろう。

「それゆえ、主なる神はこう言われる……『わたしは公平を、測りなわとし、正義を、下げ振りとする。ひょうは偽りの避け所を滅ぼし、水は隠れ場を押し倒す』」（イザヤ28：16、17）。

しかし、今日、恵み深い神は、罪人に訴えておられる。「主なる神は言われる、わたしは生きている。わたしは悪人の死を喜ばない。むしろ悪人が、その道を離れて生

きるのを喜ぶ。あなたがたは心を翻せ、心を翻してその悪しき道を離れよ。イスラエルの家よ、あなたはどうして死んでよかろうか」（エゼキエル33：11）。悔い改めない者に今日語りかける声は、愛する都を見て心を痛め、「ああ、エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、おまえにつかわされた人々を石で打ち殺す者よ、ちょうどめんどりが翼の下 にひなを集めるように、わたしはおまえの [1187] 子らを幾たび集めようとしたことであろう。それだのに、おまえたちは応じようとしなかった。見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう」と叫んだかたのみ声である（ルカ13：34、35）。

イエスは、エルサレムが、ご自分の恵みを拒み、さげすんだ世界の象徴であるのをごらんになった。かたくなな心の者よ、イエスはあなたのために涙を流されたのである。イエスが山上で涙を流されたその時でさえ、エルサレムは悔い改めるならば破滅をのがれることができたのであった。いましばらくの間、天の賜物なるイエスは、エルサレムがご自分を受け入れるのを待っておられた。そのように、ああ人の心よ、キリストはあなたに、愛の口調で今も語りかけておられる。「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう」「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である」（黙示録3：20、Ⅱコリント6：2）。

自分にたよっている者は、砂の上に築いているのである。しかし、まだ、さし迫る滅亡からのがれるのに遅すぎることはない。嵐の起こる前に、堅固な土台にのがれようではないか。「主なる神はこう言われる、『見よ、わたしはシオンに一つの石をすえて基とした。これは試みを経た石、堅くすえた尊い隅の石である。「信ずる者はあわてることはない」』」「地の果なるもろもろの人よ、わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われる。わたしは、神であって、ほかに神はないからだ」「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる」「あなた

がたは世々かぎりなく、恥を負わず、はずかしめを受けない」（イザヤ28：16、45：22、41：10、45：17）。